

恒久平和を祈って

——戦争体験記——

寝屋川市

はじめに

我が国は、世界で戦争による唯一の被爆国であり、核の恐ろしさや戦争の悲惨さを実感している国であります。

第二次世界対戦後、我が国は、平和憲法と国民の努力などによって、平和な国を築いてきました。

今、戦争を知らない世代が過半数を占め、過去の暗く、苦しかった時代の意識も、めざましい経済発展のなかで年々風化する傾向にあります。

一方、世界では、たえず地域紛争や民族紛争、宗教紛争などで多くの人たちが傷ついています。また平成七年（一九九五年）から平成八年（一九八三年）にかけて、中国やフランスは世界の人たちが反対するなか核実験を繰り返しました。

世界平和の実現には、「人権の尊重」と一人ひとりが「戦争をなくし平和を求める」気

持ちを持たなければなりません。

そのためにも「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」を語り継ぐことは、我々の大切な役目であると思います。

この体験記をお読みいただき、改めて「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」について考えていただければ幸いです。

寝屋川市では、昭和五十八年（一九九三年）三月に「非核平和都市宣言」を行いました。今後も、世界平和の実現に向け「あらゆる国の戦争と核兵器廃絶」を訴えてまいります。最後に、この企画に理解いただき、寄稿いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成八年（一九九六年）三月

寝屋川市長

高橋 茂

もくじ

I
1～31は、戦後五十年を迎えるにあたり、戦時下における悲惨な体験を後世の人たちに語り
継ぐため、募集したものです。あいうえお順に掲載。

1. 熊谷空襲……………明戸まさ 一頁
2. 私の原爆体験……………朝枝サダ子 二頁
3. 学徒動員……………浅田幸子 五頁
4. 洞窟陣地の暑い夏……………安藤豊弘 七頁
5. 被爆体験……………井手キヨコ 十二頁
6. 青空に一筋の飛行機雲……………岡野健 十四頁
7. 悲惨な一日……………辛島初子 十九頁
8. 悲劇の戦争を二度と繰り返さぬよう……………岸川光男 二十一頁
9. わたしと原爆……………北シズエ 二十四頁
10. 輸送船崎戸丸と衝突して沈んだ上海丸……………黒江修 二十六頁
11. 私の戦争体験記……………香田武 三十一頁
12. 私の被爆体験記……………小楨尚 三十二頁
13. 被爆体験……………佐々木由政 三十四頁
14. 戦後五十年の今……………生野智子 三十七頁
15. 私の戦争体験記……………其田清 四十五頁
16. 戦争体験……………高野富美子 五十一頁
17. 戦争体験記……………高橋民夫 五十三頁
18. 私の被爆体験記……………武田邦雄 五十六頁
19. あの日を繰り返さないで……………樽床静子 五十九頁
20. 戦争体験記……………広畑花世 六十二頁
21. 悲惨な体験……………古澤早百合 七十二頁
22. 被爆の記憶“水”“水”……………古谷益雄 七十四頁
23. 思い起こすニューギニア戦線……………細谷一 七十八頁
24. 朝鮮の方々のこと……………松下いし 七十九頁
25. 軍隊教育の裏側……………道旗正夫 八十九頁
26. 広島平和大道言メートル防火道路建設の悲劇……………村上喜代治 九十一頁
27. 兵 役……………山野米蔵 百三頁
28. 墓番号第一〇九号……………矢部忠雄 百五頁
29. お父さんがこんなに小さくなった!!……………山本弘子 百七頁
30. 核廃絶を訴える……………與賀田英男 百十頁
31. 乳飲み子を抱いて……………吉田トモヨ 百十二頁

II

32～34は、大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会・大阪戦後五十周年記念事業実行委員会が募集した平和メッセージ部門の中学生の部において、入選された市内中学生三年生（一九九五年度）の平和へのメッセージです。あいうえお順に掲載。

32 本当の平和……………磯貝麻美百十五頁

33 戦争と平和……………柴田紗予子百十七頁

34 戦後五十年を迎えて……………宮沢良子百十九頁

熊谷空襲

明戸まさ

昭和二十年八月十五日、私は埼玉
県熊谷市におりました。その日の午
前二時ごろ、突然、空襲警報のサイ
レンが鳴り出しました。

私は、その時、二里（約八キロ）ほ
ど離れた田舎へ行っていて、外に飛
び出してみると、熊谷市の上空のあ
ちこちで火の手が上がってしまし
た。

そのうちに「熊谷に焼夷（しょう
い）弾が落とされた」と叫ぶ人たち
がやって来ました。私は、取る物も
取り敢えず、二里の道を歩き出しま
した。人々は、ちよつとした荷物を
持って逃げて来ます。私は、逆に火

の中に向かって行きます。

ちよつと村外れに来た時、父に会
いました。父は、警防団員で自宅に
はいなかったのです。私の顔を見る
と、へなへなと座り込み「皆、焼け
死んだ」と言った切り、放心状態に
なっていました。

私は、それでもまだ自分の家だけ
は残っていると思い、自分の目で確
かめたく、父が止めるのも聞かず、
火のない所を探し、自宅まで行って
みました。

やはり、家はなく、母をはじめ弟
妹七人全員が亡くなっていました。
すぐ下の妹は、玄関の前で焼夷弾の

直撃を受け、くすぶっていました。
火を消したくても水がなく、自然に
消えるのを待つばかりでした。火が
消えた後、ちよつと触っても皮がす
るりとむけ、何とも言えない地獄の
光景でした。

近所の人たちも川に飛び込んだ人
は、皆亡くなっていました。

カンカンと照りつける真夏の太
陽、それに燃え続ける火の中で、や
つと出来た五つの棺桶に七人の遺体
を入れ、田舎から持ってきてもらっ
た荷車に乗せ、一里半（約六キロ）の
墓地まで運びました。

忘れようとしても忘れられない八
月十五日が毎年やってきます。

私の原爆体験

朝枝 サダ子

今度、戦争が引き起こされると、核によって人類は死滅のほかなく、愚かにも人間が人間を滅ぼし合い、地球は瞬間に廃墟となってしまおうのです。

広島・長崎に原爆が投下されてよ、月日と共に人々の心からその恐怖が薄れつつある現在、また再び何時、その恐るべきことが現実となるか、心に寒さを覚えずにはいられませんが。

私は、八月六日の朝、東雲町の我が家を出て、柳橋の近くにあるパーマ屋さんに向かって歩いておりました。八時前空襲警報発令、防空頭布

に身を固めました。が短時間で解除となり、安心して歩きながら空を見上げますと、丁度ビール瓶を逆さにした様な黒い物体がユラユラ降ってくるのが見えました。これが後からあの恐ろしい原爆だったのだとわかりました。

私はそうこうしているうちに目的地のパーマ屋に着いたので、中に入り順番を待つておりました。その中には私を入れて全員で六人でした。

八時十五分頃でしたか、突然外を走っている市電がマグネシウムを焚いた様な異様な光を發して炎上しました。と同時に爆音。灰神樂の中

に私は吹き飛ばされました。熱いと思つた瞬間、真つ暗闇の中に閉じ込められて、不安と焦燥にかられ絶望のどん底にいたが、やがて気を静めて見ると店の長椅子の下に転がり込んでいたので命拾ひしたことがわかりました。しかし呼べど声は無く、出ようにも出られず、地獄の苦しみをしながら無我夢中でやつと外に出ました。助かったのは私一人だったようです。

首や背中から血を流しながら、裸足で阿鼻叫喚（あびきょうかん）の巷（ちまた）を走りました。途中、家は総て形はとどめず、電柱は倒れ、そこかしこで人の唸（うな）り声をする。「助けて！助けて！」と命の限り叫ぶ声、気が狂った様にあてもなく走り続ける人々、はだか同然の姿でヘトヘトになって歩いてい

人。腕からピロンと垂れ下がっているのは布切れではなく焼かれた皮膚が無残にも垂れ下がっているのです。

男か女かわからない。目も鼻もわからない。これが人間と言えるであろうか。道の両側には数え切れない程の人々が折り重なって死んでいる。生きている人間が何時この仲間入りするかわからないのです。私はやっと仁保国民学校にたどりつきました。長い列を作って軍医さんに傷の手当を受けました。アルコールで消毒して赤チンをつけ、大きい傷は麻酔もせず縫い合わせる治療を私は右腰骨に受けました。首と背中も赤チンだけ。

学校の講堂で大豆入りのおにぎりが配られ、立錐（りっすい）の余地もない程の多勢の人々がただ黙々と

食べました。胃袋を満たし、気も落ち着いてよく見ると、気が狂ってしまった母親がわが子の名前を呼び続けている。

また一方では、五、六歳位の男の子がだれにでも「母ちゃん、母ちゃん」と泣きすがりついている。

火傷の人々が全裸で板の間の毛布の上にゴロゴロ転がっていて、片側は毛布にくっついて寝返りも、うてないでいる。手まりの様に真ん丸く膨れて目も鼻もない。やっと二本の細い線と二つの穴で目と鼻の識別が出来、口だけが大きく膨れあがっている。

「水をくれ！」と絶え絶えの声をふりしぼって頼んでも、水を飲まずとすぐ死んでしまうから、もう長くないと思われ人だけ水が与えられる。一週間もすると火傷に蛆（うじ）

がわいて臭くて近より難い。ゴマ油を塗るだけの治療で、どこまでこの人達の命をつなぎ止めることが出来るか。毎日亡くなって行く人達を山のように積んで油をかけて焼く。お骨揚げもなく、墓も戒名も無い。私は二度とこんなことがないようにと、心の底より叫ばずにはおられませんが。

当時学徒動員で行っていた兵器補給廠（しょう）へ行って見れば、大きな鉄の扉は鉛の様に曲がっており、太い樹はなぎ倒されていた。

私は下痢が続き、右側の腹部に痛みがあつて腰を曲げないと歩くことが出来なかった。首や背中も無数の小さな傷あとは、入れ墨の様になつて十年位経った頃ポロポロ取れだした。

心身共に受けた大きな傷は消え去

るどころか、後遺症となって生涯苦し
しみ、縁談、就職等にも差しつかえ
のある人もいます。

可愛い子どもや身内の者が犠牲に
なつて涙を流すことを思えば、平和
の有難さを大切に守つて行かねばと
思います。



学徒動員

浅田 幸子

昭和二十年八月十五日。その日は日本国民のだれもが泣いて口惜しかった、あの終戦の日だ。私にとっても、年号は違ってもこの日は奇しくも誕生日だった。大阪府の職員だった私は十八歳。

天皇陛下の物静かで、かつ悲痛なあの声が皆の胸を締めつけるように響きわたった。皆、大声で泣き伏した。勝つ見込みのないアメリカのような大国と戦って、ついに負けた日本。それまでにどれだけ多くの人たちが死んでいったことか。無意味な死。戦争のいかに恐ろしい、この世の地獄を見せられたような、あんな

な思いは二度としたくない。

十六歳で大東亜戦争勃発（ぼっぱつ）。当時、四年制の女学生だった私は、大阪市此花区桜島の軍需工場の住友伸銅所で女子挺身隊員として、三年余り毎日働き続けた。男性が扱う六尺（約一・八メートル）旋盤と取り組み、顔も手も油にまみれて飛行機の部品、インゴットをつくる仕事をしていた。

本土も日ごとに空襲が激しくなり、仕事の最中でも防空頭巾（ずきん）をかぶり、急いで北港へと逃げた。防空壕の中で震えながらB29の爆音が遠ざかるのを待って外へ出た

時、トラックに乗せられた真つ黒な丸太のように焼けただれた人々。性別も分からない人たちが、こちらを見て「熱い、助けて！」と弱々しい声で泣き叫んでいた。

思わず涙があふれ、私は手を合わせて拝んでいた。気の毒な人たちが助かることはなかっただろう。トラックには何も敷いてなく、ガタゴトと無情な音をたてながら、走り去った。まさに、この世に見る地獄図だ。

空襲が終わって家路についた時、もう既に街中は国道を挟んで火の海。広い焼け野原の中に幽霊のようにポロ布を引きずって、こちらに歩いて来る人々。私は、友だちと二人で肩を寄せ合って、怖さに震えながら歩いた。また、歩き続けた。

市電の路線に沿って四貫島、九条、玉川、梅新、都島、赤川……どこをど

う歩いたか分からぬまま、やっとの
思いで守口まで来た。シトシトと降
り続ける雨、真夏の厚さ、家々が燃
える炎の中、例えようなない焼け焦
げた臭いに耐えながら、半ベソをか
きつつ守口の我が家にたどり着い
た。

幸い私たちの家は無事だったが、
近くに一トン爆弾が落ちて大きな洞
穴になっていた。そばに住んでいた
友人は直撃で亡くなった。あたら若
い命を散らしてしまった人たち。運
よく、私は今日まで無事生き延び、
よかつたと感謝している。

毎日、学徒動員に励んだとして、
全校生徒のうち三人が表彰され、そ
のひとりに選ばれた。ほとんどの友
達は、戦争が激しくなるにつれ、恐
れて工場には出て来なかったのだ。
当時、父はビルマで戦っていた。机

の引き出しの底にそっと眠っている
表彰状を見ると、「我れながら、よ
くもあれだけやれたナ」いやが上に
も当時のことを思い出す。

今ごろの若者は、つまらぬことで
自殺したり、人を傷つけたり、戦時
中はだれもが生きることだけに必死
で自らの命を絶つようなことはしな
かった。平和になり、すべての物が
手に入る現在、私と同年配で戦争を
見てきた人たちでさえ戦争の苦しみ
を忘れ、日の丸を立てるな、君が代
を歌うな、と日本国民であることの
誇りを持っていない人も大勢いる。
だれも好きで戦争をしたわけではな
いのだ。

広島、長崎では、何十万人もの
人々が苦しみながら死んでいった。
お寺の境内で井桁（いげた）状に組
んだ黒い異物があつた。それは、全

裸の焼死体を積んでいたので。思わ
ず目を背けたくなる光景。市電は、
骨組みだけになってたたずんでい
た。戦争は、どんな時代にも多くの
犠牲者を出し、人の心まですさみ切
ってしまう。

私は、当時のことを一つ一つ思い
出しながらペンを取っている。絶対
に戦争をしてはならない。この世の
地獄を見てはならないと思う。

戦争で亡くなられた多くの人のご
冥福を心からお祈りする。

洞窟陣地の暑い夏

安藤豊弘

太平洋戦争末期

日本本土の最南端、沖縄を守る日本軍が、圧倒的多数のアメリカ軍部隊の猛攻撃を受けて玉碎する寸前、昭和二十年六月十八日、私の所属する部隊は、本土決戦の最前線になると予想される鹿児島市西方三十キロ附近に広がる吹上浜を目指し、薩摩半島の北部の山道を踏み越えて行軍を続けていた。梅雨の未だ明けやらぬ雲間をぬつて、銀色の機影をきらめかせてアメリカ軍の大型爆撃機が悠々と飛行している。いつ敵機の襲撃を受けるかわからない。部隊は敵機を発見すると全員山中に退避し、

敵機が去ると再び行軍を続行する。

私は当時熊本予備士官学校を卒業し、初めて現地部隊に配属されたばかりの新任の見習士官で兵二十名を指揮し、重機関銃二挺をもって歩兵戦闘を支援する任務を帯びていた。一個大隊約五百名の部隊が一同となつて朝霧に煙むる峠をいくつもこえて行軍を続けるうち、間もなく鹿児島市が近いという急坂を下つて行く時、夏草の生い茂つた山道や木立の間に焼夷弾が大きな束のままあちこちに落ちているのに出会った。不審に思いながら更に行軍を続け木立の間から鹿児島市街を見下ろして驚い

た。市街が海岸迄一面にまっ黒に焼けつくされているではないか。さては今しがた山中で見た焼夷弾はアメリカ軍が投下した不発弾だ。いよいよ戦場に近付いてきたという緊張感を抱いて山を下り市内に入つてゆくと、見渡すかぎり焼け落ちた家屋や電柱電線が道路にまで散乱しており、倒れた電柱から火の粉が上り僅かに焼け残つて点々と建っている土蔵の窓から白煙が昇っている。照りつける太陽の直射と焦土と化した残がい熱気の中を、部隊は汗まみれになつて黙々と行軍を続けた。

ふと見ると道路わきの崩れかけた防空壕の入口に坊主頭の男の児が二人、老母を真ん中に挟んですすけた顔をして放心状態で座り込んでいる。よく見ると老母は小さな手を合わせて兵隊を拜んでいる。この仇は

きつと討つて下さいと祈っているの
であろう。このあわれな姿を見た時
思わず両眼がカッと熱くなつて汗と
共に悲痛の涙がとめどなく流れ続け
た。戦争には絶対に負けられない。

部隊全員が悲壯な面持で焼きつき
た市街をぬけて吹上浜へと急行し
た。炎天下の道路を砂塵をあげて急
行軍してようやくたどりついた吹上
浜は、白砂青松遠浅の海岸が、大き
く弓なりに南北に長く伸びている。
アメリカ軍の上陸作戦には最適の場
所とみた。この浜の西方六百キロの
海上に沖繩があり、これを制圧した
アメリカ軍が次期上陸作戦を目指し
て着々と攻撃準備を進めているはず
である。海岸に向つて押出すように
迫っている山中には、阿蘇兵団数万
の将兵がアメリカ軍の上陸を阻止す
るため、秘かに山中に展開し防衛陣

地の構築に余念がなかった。一刻の
予猶もできない。

我々の部隊は直に海岸から千メー
トル程山中に入った海拔七一・四メ
ートルの小高い山頂を中心に防衛陣
地を構築すべく、それぞれの部署を
きめて布陣することになった。先ず
宿舎の建設である。起伏のはげしい
山の中には夏草が生い茂り樹令三十
年ばかりの杉の大き木が、谷間から山
頂へビッシリと植林されている。部
隊は茂みの中に分け入り比較的なだ
らかな斜面を見つけては、杉の立木
をそのまま柱として孟宗竹（もうそ
うちく）でつないで骨組をつくり、
附近の農村一体から藁（わら）を集
めて屋根を葺（ふ）き壁をつくった。
窓は空いているが戸がない。床に藁
を敷き毛布二枚の間に入って寝るの
である。風の強い時は木立がゆれて

小屋全体が船のようにゆれる。勿論
電灯水道もない一野戦の仮小屋であ
る。食器が足りないので近くの竹藪
から太い孟宗竹を切り出し節のここ
ろから切りはなして食器にする。食
事は炊事班が谷底において谷川の水
で炊事をする。配給されてくる食事
は米粒の中に豆粕や高粱（こうりよ
う）の混入しているもので、豆粕等
は昔は牛の飼料であったものが、こ
こでは人間の食糧である。おかずは
塩水にさつまいも等の葉っぱが少し
ばかり浮んでいる程度のものであ
る。長引く戦争で国全体に物が不足
し第一線の軍隊でもこの有様であつ
た。

便所は山腹に幅五十センチメート
ル長さ十メートルくらいの深い溝を
掘り周囲をむしろで囲いその中で用
を足す。屋根などはない。用便が終

ると上から土をまいて便をかくす。臭を防ぎハエの発生を防止するためである。ここに来て誰も不平を口にする者はいないし、またそれができる組織でもない。このような急造の小屋が山中いたるところにでき上り、各部隊が十数名づつに分かれて合宿した。

夜が明けると全員宮城のある方向に向かつて最敬礼し洞窟陣地の構築作業に取かかるのである。山腹にはいたるところに掘りかけた洞窟が暗い入口を見せていた。前の部隊が洞窟陣地を構築中前線へ緊急移動したためである。それを更に深く掘りすすむのである。何しろアメリカ軍は上陸直前になると空海より猛烈な砲爆撃を繰返し山地を畑のようにならしてから上陸する。昔の戦のように陣前に鉄条網を張り壕を掘りトーチ

カを設けたような露出陣地はひとたまりもない。砲爆撃が始った時は全員洞窟陣地にかくれ砲爆撃の止むのを待ち、敵が上陸前進すると洞窟から出撃して敵中に突入し敵味方入り乱れて接近戦を行うのである。こういう戦法をとられるとアメリカ軍は味方を傷つけるので砲爆撃ができない。洞窟陣地は部隊の重要拠点である。

小屋が出来て洞窟陣地の掘削に取りかかろうとしたが軍から工具の支給がない。仕方がないので鹿児島周辺出身の兵を家に帰し、先のとがった鉄棒やハンマーを集めさせたが、どの家も焼けていて、焼け跡から僅かばかりの鉄材やハンマーの先を持ち帰るのがやっとであった。それらを修理加工して道具をつくり洞窟を掘るのだが岩が硬くて一日十センチ

メートルも掘り進めない。そのうち栄養失調になって動けない兵がでてくる。体力が弱っている上に衛生状態が悪いので赤痢が発生し作業に従事できない兵が増えてきた。下痢がひどくなると便所まで行く暇がない。途中の山の中に下痢便をする。ハエがまっ黒にたかって、たちまち部隊に赤痢が拡がる。薬もないし野戦病院もないので手当の仕様がな

い。陣地構築中、度度アメリカ軍戦闘機が低空で飛来し附近の村落を攻撃するが、部隊はこれに対し対空射撃をすることができない。射撃をすれば部隊の所在が敵に知られるからである。部隊の資材を受取りに向いていた者がアメリカ軍機の急襲を受けて数名戦死したこともあったがこれに反撃することもできない。事態

は刻々急迫しつつあることは想像できるが、情報が全く入らないので戦況全般の動きがわからない。

私の指揮する重機関銃隊では重機二挺に対し実弾は六百発しかなかった。重機は一分間六百発の実弾を発射する能力があるので、二挺で連続射撃をすれば三十秒しかもたない。あとは無用の長物スクラップと等しくなる。部下の兵は誰も小銃一挺、銃剣一本、手投弾一発も持っていない全くの素手である。全弾撃ちつくしたあとはどうやって闘うというのか。上からは何の指示もない。アメリカ軍は前進にあたっては多数のM4戦車を先頭に立て、我に数倍する兵員をもって火炎放射器を発射し、自動小銃を撃ちまくって攻撃してくるのである。我友軍部隊には、これに対向できる戦車大砲、対戦車砲、

ロケット砲や戦車に対し関迫攻撃を行う黄色火薬もない。予備士官学校で訓練した対アメリカ戦闘を行うにも手の打ちようがない。内心困り果てた私は、せめて竹槍でもつくって兵に武器として与えようと思って竹藪に入って手頃な太さの竹を軍刀を抜いて切ってみたが、刃が竹の表面をすべって一本も切れなかった。当時の軍刀は形ばかりで、なまくらで到底使える代物ではなかった。こんな刀で攻撃して来る生身の人間を軍服の上から切るようなことはとてもできない。第一敵に近づく前に撃たれてしまう。恐らく玉砕した第一線の部隊もこういうひどい状況の下で無念の玉砕を続けたものと思うと暗澹（あんたん）たる気持になった。然し日本の軍隊はこのような劣悪な状況にあっても最後の一兵まで死力

をつくして闘はなければならない。陸軍刑法によれば「敵前において逃亡したる者は死刑に処す」となっており、捕虜になった者も死刑である。一度戦闘が起れば、逃亡しても死、攻撃に出ても死、洞窟陣地についても死である。この戦力この状況で部下を指揮してどう闘うか、指揮官としての責任の重圧と人間としての苦悩の中で、暑い夏が一日一日と過ぎてゆく。部隊全員が死を覚悟して、洞窟陣地を掘り進んでいるところに、突如として一大奇蹟がおこったのである。

昭和二十年八月十五日、日本はついにアメリカ・イギリスをはじめとする連合軍に無条件降伏したのである。言い表すことのできない異様な興奮と歓喜が全部隊の間に爆発的に拡まった。軍人が戦争に負けて喜

んだのである。恐らくこの時、日本国民全体がそうであつたと思う。

若しあの時ももう少し戦争が長引いていたら恐らく私はこの世に生きていなかったであろう。思えば無謀な戦争であつた。この太平洋戦争で以上に戦争の悲劇を味い傷つき倒れ、家を失い肉親を失つた人々は、敵味方合せれば何千万という数に上るであろう。

「二度と戦争はしない」

「平和に暮したい」

「軍隊は持たない」

痛烈な戦争の悲劇を骨の髄までなめつくした敗戦後の日本人が心の底から誓った言葉であつた。

あれから五十年、戦争の悲劇を味つた世代が亡くなってゆく中でまともや目の前に戦車や大砲やミサイルや軍艦や飛行機が、日の丸をつけて

動き回っている。あの我々が体験した悲劇、誓つた決意はどうなったのか。我が目を疑い我が心を疑う程の変貌振りである。

願くばこれらの武器を使って再び戦争の悲劇を味はぬよう日本人全員が今度こそ団結して政治を監視しなくてはならない。

敗戦の八月十五日が来る度に、我が青春、我が人生、我が命をかけて生き抜いた洞窟陣地のあの暑い夏の光景が、またしても私の脳裏に鮮によみがえってくるのである。



被爆体験

井手 キヨコ

私は昭和十八年、卒業四日後に日赤徳島支部から召集令状を受け、第五百救護班の一員として長崎県大村海軍病院（現長崎中央病院）へ派遣された。

十九年初期ごろまでは、あまり空襲もなく勤務の合間を利用し、交替で衛生兵や軽症の患者さんたちと自給自足のため、近くの山を開墾して馬鈴薯（ばれいしょ）を植えたり、田んぼをつくり、田植えなどもしたりしていた。

そのうちだんだんと空襲がひどくなり、防空壕へ走り込む回数も増え、九州地方も「戦地勤務だ」と、同僚

と口にするようになってきた。

そして八月九日、ピカツと閃光（せんこう）が走り、ドドーンと大爆音、同時に病棟の窓ガラスは割れて落ち「空襲警報発令総員退避」と繰り返すスピーカーの声に、早速、私たちは重要書類、救急袋、防毒面を肩にして防空壕へと走り込む。

初めて体験したあの閃光と爆音は一体何だったんだろうと話しているうちに、警報は解除となり、外へ出てみると、長崎市の上空には真つ黒な煙がモクモクと不気味に上がっていた。

しばらくすると、長崎市に新型爆弾が投下され、市内は焼け野が原と

なり、全滅で音信不通というニュースが入り、軍医、衛生兵、看護婦で救護隊を編成して出発。残りの者は患者収容の準備にかかる。

日暮れとともにトラックなどで次々と被災者が運び込まれ、病棟の入口は、身動きも出来ないほどになる。

「私も、私も」と助けを求める人。男女の区別さえもつかない顔は、真つ黒。衣類か、皮膚かわからないように焼けて垂れ下がっている。

ガラスの破片が体中に突き刺さり「痛い、痛い」「水、水」「おかあさん、おかあさん」と叫びながら、息を引き取る人も少なくなかった。その苦痛を訴える人々の姿は、まさに生き地獄そのもので、今でも鮮明に私の脳裏に焼き付いている。

処置中も、何度か警報の放送が流れた。その都度に「この人たちと

もに……」と思っていた。軍医の一人が「みんな覚悟は出来ているな」と大きな声で、怒鳴った。衛生兵も、看護婦も一斉に「はい！」と即答した。

私は、召集を受けて村を出発する際、見送って頂いた皆さんの前で「体の続く限り、命のある限りお国のために頑張つて来ます」と約束した日がきたのだと、ふとその日のことを思い出していた。

患者収容は夜が明けるまで続き、病室は一夜にして一変した。

前日までは海軍軍人の患者さんで、比較的静かで、規律正しい内科病棟が、老若男女の区別なく一般市民の患者さんで埋まり「痛い、痛い、看護婦さん」と四方からうめき声が響きわたる。

二、三日すると、傷口に蛆虫（う

じむし）がわき初めた。耳の中などいたるところでウヨウヨと動き回る。それまで、生きている人に蛆虫がわくなんて考えなかった。

「虫がかむ、痛い、痛い」と苦しむ声に、電灯を片手にピンセットで蛆虫を一匹残らず取っても、翌日にはまたウヨウヨと出てくる。いったん病室に入ると、なかなか控室には戻れない状態だった。

とてもかわいい女の子（小学校三年生）がガラスの破片で右ほおを大きくえぐり取られていた。体中にも破片が突き刺さっていた。お父さんは、師範学校の教員をしており、生徒とともに大村の学校へ疎開していた無事だった。

お母さんは、原爆が投下される二日前に出産し、市内の防空壕に入っていたという。娘の重体を知り、お

母さんは自分の体が充分でないのに、その当時はなかなか手に入らなかった卵、きつと何キロも歩き回って買ってきたのだろう。その卵を手にして来院。

変わり果てた娘を抱え込むようにして「元気に出ていったのに……」と言って、ただ涙を流すばかり。数時間後、女の子は父母にみとられ、帰らぬ人となった。何一つこの子たちが悪いことをしたわけでもないのに、前途有望であった娘さん、わずか十年にも足りない短い人生、あまりにも可愛想で、ともに涙し天国への旅立ちを見送ったのでした。

悲惨で、恐ろしい戦争を二度と繰り返さないよう、世界中に永遠に平和が続くことを念願し、戦争で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りし、筆を止める。

青空に一筋の飛行機雲

岡野 健

広島市で被爆 当時 十五歳

一九四五年（昭和20年）八月、私は、広島市の修道中学校三年生で、比治山南東端にあった陸軍兵器補給廠に学徒動員で勤務していました。

八月十五日の朝は、雲一つない青空で松林を通りくる風は、万一の時に兵器補給廠の垣根を壊して、弾薬、兵器を移す非常口を作っている私たちには爽やかでした。学友の声に呼ばれて空を見上げると、南東から北西に一本の飛行機雲。広島空を通りすぎた先端に白くピカリと光るB-29を見た瞬間、何万ものフラッシュがたかれた様な光に驚き、耳と

目を両手でふさぎながら伏せまし

た。何秒かすると身体全体が熱く感じて四本の指をそっと捻げると、右から左に青色、黄色の炎が流れて見え火薬庫が爆発したと思い立ち上がりました。光はもうなく、真っ白な一寸先が見えない霧中の感じで、しかも数秒間物音一つない静寂の世界がありました。近くの防空壕などから女学生や女子挺身隊員の悲鳴。熱線で水蒸気による白い視界も薄れ始めた頃、左手甲に暖かいものを感じ、見ると自分の左上半身は拳大の火脹れが裂けて汁が流れていました。身体全体がカッカ、カッカと火照り、

まだ爆音がするので比治山の横穴防空壕へと。横穴防空壕はヒンヤリしておりしばらくだが心地好い。またカッカ、カッカするのを学友が作業衣で煽いでくれると心地好い。扇風機でないので疲れると選手交替する間は、またカッカ、カッカ体が燃えるようでした。学友が火傷には油が良いと祖母が言っていたと、兵器庫に探しに行くも、見当たらなかつたと言つて、三八銃の錆び止めのグリスで治療してくれました。火薬庫も建っていたし何処も爆弾による穴が開いてないので、電線に何か仕掛けられて爆発されたとか、日本にはマツチ箱一個の大きさで、戦艦大和級が轟沈（ごうちん）出来る爆弾が出来たから日本は負けなと言つてたから、宇品港から運ぶ途中で爆発したのではないかと、中学生らしく話す

うちに痛みも和らぎ、それぞれ家に帰るべく解散する事に成りました。

兵器廠を出て被服廠に向かうと、家屋は半壊、瓦礫（がれき）状態で、人々は右往左往、瓦礫の下からの「助けて！」の悲鳴を聞きながら、専売公社を通り御幸橋にかかると、人々の服装が一変していました。川風に当たると少しはいえるのか、モンペが焼け剥がれて、顔と歯が一緒の様に青ざめたパンツ一つの女学生、裂かれた皮膚が爪の所でぶら下がって幽霊の様な人、上半身が火脹れで、目は糸のように、口は蛸の様な人、みんな橋の端で蹲（うずくま）っていました。御幸橋を渡り駐在所前に来ると（私は東から西に来た）西から来る人、北から来る人、見るも無残な姿を見て、爆発の中心は鷹野橋から城や西練工場のある五師団

の方向と感じて左に行く。寄宿舎の方に足をすすめました。二階建の校舎は一階になって傾き、サッカーグラウンドの向こうにある寄宿舎のブロック塀は北向きに倒れ、屋根は無く、自分の部屋に行くと、大掃除の時の様に畳は左右に立ち、空が見えていました。しかし戸棚、本箱、行李は無事でした。

西日が差す頃、私の名を呼ぶので振り向くと、上半身火脹れ、目は糸の様に細く、口は蛸の様な少少年で誰か分からない。聞くと、因島での小学校の同級生で、彼「やられました。広島人は百メートル通りの強制疎開で壊した家屋の整理に動員されて、作業を始めた時、ピカッと光った次に、暗闇（やみ）となり、アツと思った次に隣の女学生の黒髪がポツと燃えました」と。自分

の燃えたのと言わない。彼の上半身で残っているのは、背中のだみに、ランニングシャツらしき白く焦げた小さい布が焼き張り付いているだけでしたのに。彼はそれから火事の中で、宇品港まで逃げて、因島への方法を待っていたが。彼の様な怪我（けが）人は、当時外地から引き上げる軍隊の検疫所があった似島に強制的に送られそうになったので、送られると助からないと、恐くなって逃げて帰ったとのこと。

彼は二日前因島に帰郷して、列車の遅れで当日は直接に作業場に行つたので、私の母から預かったアラレを要れた茶筒を、自分も火脹れになった惨事の中を持ち帰り、お母さんからの預かり物ですと差し出され、彼の誠意に、言葉ありませんでした。明日一緒に因島に帰ろうと、彼の

近くの島々からの二年生を防空壕に寝かせました。日が落ちあちこちの火の手が見え始めた頃、学校のプールの南にあった創設期の帝人の赤レンガの建物から火が出ましたが、三菱造船に動員されていた四年生が中心に、消火に当たり学校のある南千田町の一角は消失から免れて、戦前の家が、今も数軒残っていて昔の面影があります。

その夜は広島を南西から北東に向かつて火の海と成りました。全壊、半壊の木造家屋は燃えるにも好都合な状態で、一晩で、皆さんがパネルなどでご承知の広島に成りました。

翌朝明るくなって防空壕の学友を因島に帰らそうと起こしに参りますと、誰もが足が立ちませんと言います。舎監と相談して私が因島に帰り、

船を宇品港に回して救出しかない事になり、二百メートルほど北にあった御幸橋駐在所に罹災証明を頂きに行きました。

昨日とは一変して、残っているのは遙か彼方の百貨店と日本銀行等のビルと風呂場のタイルと流台のタイルと大木の黒焦げた幹が一メートル程が残っているだけ、一面の焼け野原で、まだ一人の人影も無い。舎監の奥さんはそんな状態では怪我をしている貴方は無理だと反対されたが、助かる方法は、とにかく広島を脱出するしかない想いで、許可を得て、学生服を火傷の上に被って前に数冊の教科書、後ろに銀舍利のニギリを背負って寄宿舎を後に京橋川添いに広島駅に向いました。街を歩く人は見当たりませんが、足許には、全裸の人々が累々とうちならんでいられ

る。火脹れでパンパンに張って針を差すとパチンと弾けるのではないか、まだうごめいている人が多い。状況からみて昨夜の火事で、瓦礫の下敷きで逃げられず、被っていた木が燃えてやっと這い出し、この土手で、あ助かったと安心して倒れた人達だったのでしよう。兵隊さん助けての声のする方を見ると比治山の麓。京橋川のお陰で旧市内の、大火から唯一助かった所らしく瓦礫の下からの声でした。一晩どんな想いで過ごしたのでしょうか。やっと通りかけた兵隊も、目的が違うのか通り過ぎて行きます。そういえば昨日まで学校の講堂にいた百名ほどの兵隊も、私が寄宿舎に帰った時には、中国山脈の麓の三次方面に移動したとかで一人もいませんでした。

京橋に近づいた頃に、あちこちに

人影が見え始め、中年の夫婦にどちらえと声をかけられた。寄宿舎の二年生の救出を頼みに因島と答えると、自分等は八本松から一番列車で帰ってこない二年生の息子を尋ねて、海田市から歩いて来たとの事で、広島駅は駄目との事でした。息子さんの状況は寄宿舎に同級がいますからと言って、カンパンを戴き二号線を東に。途中九州から今治に帰省すると言う軍曹と一緒に、途中向灘駅で休憩したら、グラマンが飛来するも、もう逃げる気にもならない。夕暮れやつと汽車に乗り尾道へ。因島行きの船はもうなく、今治行きの最終便に乗る軍曹と別れる時の東の空は真っ赤で、福山市が燃えているとかでした。

海岸通りの岩崎旅館に着くと、さあ大変と病院に、しかし院長は広島

とかで、八十歳近い大先生に治療を受けるがその後の記憶は今は無。朝一番の便で港に着くと村の皆がジロジロと、今から思えば上半身右目が開いているだけで、包帯で真っ白の少年を見れば驚いたでしょう。

それから数日は四十度をこす高熱にうなされ、下痢の他は記憶はない。身重の母とすぐ上の姉が懸命の看護をしてくれて、記憶があるのが十三日頃、姉に火傷の治療を受けている時に、六年生の担任だった井上先生が見舞いに来てくれた。壮一郎君始めみんな帰って来たが駄目らしい、と母は話していました。

火傷にはビタミンを沢山取ればと、浄土寺の奥さんは、御盆にお供えのお下がりをどっさりと差し入れてくれ、ガーゼにキュウリの汁と卵白を交ぜて、白い粉と酢を交ぜたのを

火傷に良いと教えてくれました。最初はヒンヤリと気持ちが良いのですが、はがす時の痛さは今だに忘れられない。しかし、十数年は海水浴は出来ませんでしたがお陰で今はケロイドも皆さんと一緒に入浴しても言わないと分からない様に成りました。

しかし被爆者は今まで話してきた惨事の他に、放射線傷害がありました。小学校の同級で山陽中学の円光君は至近距離の八丁掘りの満員電車で被爆しましたが、回りの人のお陰で、ガラスの破片での傷程度でした。鉄工所経営の父親は彼が小学校低学年の時に中国で戦死しており、見舞いに来てくれた彼の祖母は、跡取り息子が戦死して神も仏も無いと思っ

ていましたが、孫は助かり学校が始まらないので、海水浴やら塩田の勤労奉仕をしていると母と話していまし

た。秋になりその祖母が蜜柑をわけてほしいと母を尋ねて来て言うのには、齒茎から血が出て止まらない。お宅の息子さんは果物をどっさりとして元気になられたと聞きましたのでとの事でした。円光君は年末には、髪の毛が抜けて亡くなりました。父は七〇八十年草木も生えない噂に驚き、私が寝ている内に尾道中学校に転校手続きをしていましたが、大阪、神戸からの罹災者の師弟で一杯で結局中学三年は三学期の期末試験だけで四年生になりました。食料事情は戦時中より戦後が大変で、寄宿舎でシボラレタと部屋で話していたら、地理の舎監がガラス戸をガラリとあけて、毎日コウリヤン飯や飲まずくわずの貴様等を絞っても油は出るかと怒鳴られたのは、悲しくもあり、笑いでもあった。このような生活です

から、因島に帰り、母や姉の心づかいのごちそうは、つい食べ過ぎて、月曜日は必ず下痢でした。十数年たつ頃、私もブラブラ病となり水泳に行くとき友から洗濯板と、病院では子どもの様な小さい胃と言われましたが二十年たつてやっと正常になりましたが、注射や怪我をした時の出血は二十〇三十分止まらないのが十年前までありました。

このように、原爆の惨事は当時の熱線による惨事だけでなく、ガンに成る率が十数年たつても、一般の人の十倍、二十年で五倍と言われ、ガンに対する恐怖を背負つての生活でした。結婚してからは被爆の記事のところはカミソリでそつとはずして持ち帰ったものです。

あれから五十年がたとうとしています。あの軍国少年の時代から、被

爆で目が覚め、平和憲法を信じ懸命に働いて来ましたが、その間色々な曲折が有りましたが、武力による平和の無い事は定着し、世界の人々も羨む経済大国となりました。しかし豊かになれば人々の中には、ともすれば戦前の汚点を美化とは言いませんが覆いかくそうとしたがるのは、歴史的に世の常かもしれません。おなじ過ちは繰り返しませんから安らかに“と誓った私達は、身体、経済的には恵まれいるとは思いませんが、せめて心は、若く、美しく、美しく”を掲げ、戦中、戦後を語り続ける事で武力によらない平和が、地球上の人々が皆迎えられの事を信じ、祈願いたします。

悲惨な一日

辛島初子

二十三歳の夏のよく晴れた朝の一時の出来事でした。弟、妹を送り出し、台所で麦茶をいっている母に、今日の飛行機の音は違うねと言って、川側の窓ぎわに立ってスタレを上げ飛行機をみた瞬間でした。数百個のフラッシュをたいした様な光でした。音は聞こえませんでした。キラッと光を受け思わず両手で顔を覆い坐り込んだところまでは覚えています。それからどのくらい時間が過ぎたかわかりませんが、二階の明るい窓ぎわにいたはずなのに、辺りは闇（やみ）の中です。身動きひとつできません。

二階の梁（はり）に押しつぶされて気を失っていたようです。やっとの思いで抜け出して辺りを見ると、一面瓦礫（がれき）の山です。体中の火傷やすり傷が痛みます。市内から郊外へと被災者がやって来ます。浮世絵の幽霊のように、両手を前に突き出して、指先には、ほろをぶら下げているように見えましたが、それは腕の皮膚が火傷で、ずりりとむけて垂れ下がり、爪の所で辛うじて止まっているのです。衣類はもちろん焼け焦げて、身につけるものも満足になく、ただ水を求めて川原へ下りて行きます。先着の負

傷者が水のそばでたくさん息絶えています。水辺までたどり着き安心して息絶えた人もいたことでしょう。腹を丸々とふくらませた無数の軍馬の死体もあります。中でも悲惨この上なかつたのは、鋳物工場で勤労奉仕をしていたのでしょうか、四つばいで鳴き声か悲鳴かなんとも言えない声で、尺取り虫のようにはっている婦人の姿でした。足ははれ上がってかばのようになり、足裏にはノロ（溶材）がべつとりと、げたの厚みほど付いています。恐ろしくて手助けもできません。ノロをはがそうと思うと、骨を残して足の裏の筋肉が根こそぎ取れそうです。避難途中の人もただ見守るのが精一杯の様子でした。

避難の人々といっしょに山の手を目指し、三滝山麓に避難しました。

開設された軍の治療は、薬も資材も無く、赤チンを先のすり切れた筆でつけるだけのものでした。

腕、左肩甲骨、腹部のガラスの破片による傷、ひざの火傷及び裂傷、体中ガラス破片の負傷、のどの腫れのための呼吸困難などで苦しみ、そのうちに下痢、発熱、頭髪脱落と生死の間をさまようこと二ヵ月、なんとか生き延び、翌二十一年二月日赤病院で受診しましたが、二、三ヵ月の生命と診断されました。しかし奇跡的に徐々に回復しました。

偏頭痛、腰痛、発作的な呼吸困難、腹部ガラス片残存、ケロイドなど、やや薄れて来たものの、まだ傷痕を残し、偏頭痛などは今でも悩まされております。私どもが初めて味わった苦しい経験を後世に残して、平和の一助ともなればなと思ひ筆をとり

ました。爆心地から八百メートルにて被爆。



悲劇の戦争を二度と繰り返さぬよう

岸川光男

戦後四十八年を振り返って思い出すのは、聖戦の名のもとにすべての国民が、悲劇以外に表現できない多くの艱難（かんなん）辛苦の生活を体験したことです。

私も、内地教育もそこそこに、満州国境警備隊の一員として母国をあとにしました。生物すべてが凍りつく酷寒、零下三十度近くの白銀一色に覆われた広漠たる国境最前線。よく口ずさんだり銃に氷の花が咲く：の歌詞通り、凍りつく銃を手に昼夜の別なく警備に明け暮れました。越境衝突事件も多く緊張の連続です。また、冬将軍への対策も日課の一

つで、注意を怠り凍傷になった者も多くいました。また、警備の合間に行う陣地構築も、地下深くまで凍土と化しており、どのような工具も受け付けず、作業は遅々として進行しません。いつ終わるとも知れない作業の連続に戦友は皆が四苦八苦です。出るのはため息ばかり。時折、星空に浮かぶ月を眺めては故郷を思い出していました。

明日に向けて警備、作業に備えて兵器や資材の手入れなど、過酷以外の何ものでもない軍務を振り返れば、貴重な体験はいまだに残る無形の宝として懐かしくもあります。

最前線にも四季があり、短期間ながら夏の訪れを待ちかねたように一度に花が咲き乱れます。国境ならではの珍しい眺めは美しく、すさんだ気持を和らげてくれる風景です。しかし、足早に訪れる冬将軍の到来を思うと、心身ともに凍りつく思いでした。

戦況も南方面では、連合国軍の反撃で転進また転進の後退を余儀なくされてきました。国境守備隊にも転属者が続出。私の部隊も移動になり、当時の釜山で旅団を編成。

行き先も知らされることもなく、不安が募るなかで駆逐艦や航空機の護衛の下、輸送船団を組み出発。途中、幾度も敵潜水艦の魚雷攻撃に見舞われ、灯火管制下の薄暗い船内で救命具や浮具代用の竹筒に命を託し、皆無言で天命を待っていました。

魚雷攻撃で船とともに去ってゆく戦友を目の前にし、不安は募るばかりです。

幸運にも私たちの乗った船は難を逃れ、目的地にたどり着き、久し振りに笑顔が戻りました。到着地も沖繩と知らされ、はじめて見る光景もすべてが珍しいもの。部隊名も沖繩派遣軍混成駒一三〇六四部隊となり、国土防衛の任務。

相変わらず警戒陣地構築が続くか、宮古島方面に敵艦船が接近の情報で、沖繩を離れ宮古島防衛へ。早速、変わることのない陣地構築。海岸線は珊瑚礁でできた硬い岩肌で形成され、作業もはかどらず、いらだつばかりの土木作業員同様の毎日。当初、島内も比較的平穏で、時折、空襲を受ける程度。それも束の間、日を追うごとに空襲は激しくなり、

攻撃目標も陣地、民家を問わず無差別になり、恐怖も増すばかり。

敵機への対空砲火は、貧弱なものでいかんともしがたく、敵機のなすがままの行動をただぼう然と見守るだけ。し烈な空爆に加え、敵艦船接近と伝えられ、宮古島の守備隊に対し「天一号作戦命令」となり、死守との大本営の命を受けました。全員玉砕を合言葉に時を待ち、各自が恩賜（おんし）の酒、たばこを拝受。今も思い出される菊の御紋の輝きでした。

同島駐屯中の食事は粗食の限りで、思い出すだけでも、よく激務に耐えられたものだと不思議に思えてなりません。毎食事はさつまいも三から四個、それにみそ汁一杯で腹ペコ状態。空腹を満たすため、手当たり次第に食べられそうなすべての野

草、島内に生息するあらゆる小動物なども口にしました。

当時の食生活を振り返り、ただ驚嘆の限りです。これらの食事で、空腹は満たされるものの、下痢、腹痛など当たり前。戦友のなかには衰弱が極限に達し、併せて島特有の悪性マラリアの高熱に苦しみながら戦病死する友も多くいました。哀惜の言葉もなく、遺体も故郷の土を見ず、異郷の土と化して安らかな永遠の眠りにつきました。

沖繩は、連合国軍の進攻から短期間で全滅状態。宮古島も損害が大きく、昭和二十年六月に全面降伏し、即刻、武装解除。各集積場に持ち込まれた兵器、弾薬の鉄くず同然の眺めは、見るに忍びなく、目をそらしました。

終戦でアメリカ軍監視の下、戦後

の後片付け作業が十二月で終わり、引き揚げとなり、アメリカ船で宮古島を出港。島影一つ見えない航路で内地送還とは聞いていたが、行き先がはつきりせず不安の十三日目、雪に覆われた富士の霊峰を見、待ちあぐねた祖国に帰れて感無量。十二月二十八日、横須賀港に上陸。

踏みしめる土も懐かしく、復員局で検疫を受け復員解除。友と再会を約し、各自無事に帰れた体を土産に家族の待つ故郷へ。

戦後四十八年、世界各地でのテレビなどで伝えられる内戦、民族紛争に起因する出来事は見るに忍びません。極限状態に追い込められ、悲惨の一言に尽きる生活を余儀なくされた多くの人が存在することも事実です。

戦争の悲劇、愚かさを二度と繰り返

返してはなりません。老年、若人の別なくすべての人が戦争放棄を合言葉に、永遠の平和を実現するため、他国の人とも手を結び、信じ合い、親から子へ、子から孫へと戦争の悲劇を風化させないよう語り継ぐことも私たちの責務と思います。



わたしと原爆

北 シズエ

私は十六歳でした。空襲対策の建物疎開で、母と私は広島の新魚市場から金屋町に移り住んでいた。二階には、日赤の看護婦さん三人に住んでもらった。裏の離れに母子三人家族も住み、女ばかり八人で仲良く生活していた。私は夜、タイプを習いながら日本郵便通送会社へ務めていた。

六日朝、私はなぜか、家から出たくない気がして、母に「休みたい」と言っただけで、やはり行きたくない、と思ひ、わざとぐずついたので、看護婦さんと楽しくお話を

して、夜を明かしたのだ。私は再び母にしかられ、朝食抜きで家を出た。

二、三軒ほど行つて「やはり家へ帰ろう」と体の向きを変えた途端、左側からピカッと青白い光を受けた。

目の前が真っ暗になり、防火水槽のそばにうずくまっていたら、顔の左半分がヒリヒリ痛み出した。そつと手を当てても痛いだけ。

わが家へ飛び込むと、表の間の畳が次の間に重なり、押入れも何もかも部屋の中はメチャメチャ。中庭にいた母は二階のガラスを背中一面に受け傷だらけ。表に出ると赤ちゃん

を背に、足首のちぎれた姑（しゅうとめ）さんを引きずるようにして女の人が走つて行くのが見えた。

私たちも着れるだけ服を身につけ、持てるだけの品物を手にして逃げた。日光に当たるとやけどが痛むので、シーツをかぶって歩いた。途中、何も身につけていない娘さんが私に近づいて道を聞かれ、驚いた。上半身、やけどで肩の皮が手の指先の爪にひっかかり、薄い布切れを持つているように見えた。痛みを体でぶるぶる震わせ、肌は美しいピンク色だった。

あれから四十七年。幸い、私は二十歳で結婚し、子どもには縁がなかったものの、やけどのあとも、割にきれいに治った。白血病などいろいろ被爆の不安はいつもあるが、亡くなった人たちのことを考えると、幸

せだと思っっている。ガラスで負傷した母も五年ぐらいしてガラスが一つ出ただけで、現在も元気に八十二歳を迎えた。

本当は、私は原爆のことを思い出したくない。あまりにも恐ろしく、悲しいことだもの。



輸送船崎戸丸と衝突して沈んだ上海丸

黒江 修

昭和十八年十月下旬、南方戦線に派遣される陸軍の将兵と兵器物資を満載して四隻の駆逐艦に護衛された十三隻からなる輸送船団が、山口県六連島沖に集結した。私は、濠北派遣第四六師団先遣隊（隊長以下三百一名）の一員として崎戸丸に乗船していた。崎戸丸は、一万九千九百屯の新鋭船で、昭和十七年六月、アツツ島上陸作戦に参加し、船内各所にそのとき受けた生々しい弾痕が見られ、自ずから身の引き締まる思いにかられた。船団の中に一際目だって大きな船が見られたが、その船はかつて我が国の捕鯨船団の母船として

活躍した二万二千屯の凶南丸であった。堂々たる船団は、十月二十八日、六連島の泊地を出帆した。この頃、すでに、アメリカ潜水艦が九州近海に出没しつつあったため、出港当初から対潜見張りを厳にし、全艦船ともジグザグ航法をを取って進んだ。それに加えて夜間は嚴重な灯下管制が敷かれた。

当時、長崎・上海間の定期航路の客船として就航していた上海丸（一万屯）は、たまたま、上海からの引き揚げ邦人約八百人を乗せて長崎に向けて航行中であつたが、十月二十九日午前四時頃、五島沖（推定）に

おいて、不運にも、崎戸丸に衝突した。衝突の原因は、暗夜でしかも両船共、灯下管制下に、ジグザグ航法を取っていたことが主因ではなかつたかと思われる。

崎戸丸における対潜見張りは、将校一人、下士官一人が一組となつて、船橋の前部に二組、後部に二組が二時間交替で見張りを続けた。私は、同じ師団司令部付きの軍曹とペアを組んで、初回の立哨（たちみはり）は二十九日午前二時から四時まで前部船橋に立った。私は、皿のように見開いた両眼に双眼鏡の対眼レンズを押し当て、白波を立てて崎戸丸目がけて驀進（ばくしん）する敵潜の魚雷を、万一、見落とした場合のことを考え、瞬時の油断も許されない見張りを続けた。やっと、緊張した二時間の勤務を果たし、次番者に申

し送りを終わり、二段に仕切られた階下の船倉に降り、休養のために横になった途端、大音響と振動が伝わり、同時に停電した。咄嗟(とっさ)に、私は、敵潜水艦の魚雷が崎戸丸に命中し、爆発したものと判断したので、遭難演習時の訓練どおりの動作を、暗黒の中で素早く実行した。まず、救命胴衣を身につけ、軍刀・拳銃・実包・乾パン・鏢節・マラリア予防薬を携行して甲板に駆け上がった。甲板に上がって驚いたことは、崎戸丸に大きな船が横付けしていることであった。

大波が打ち寄せる度に両船は激突し、甲板の手摺りその他の構造物が大きな音を立てて壊れていた。その光景を見た私は、てっきり、崎戸丸が雷撃を受けたので、僚船が救援に来たのに違いないと思った。ところ

が間もなく、現場が護衛駆逐艦から探照灯の照射を受けて明るくなり、両船の船長の拡声器による質疑応答等によつて、次第に状況が明白となった。崎戸丸に衝突した上海丸は船体が真つ二つとなり、後半部は衝突後急速に海没し、その姿を見ることができなかつた。前半部は崎戸丸に凭(もた)れかかるような状態で徐々に海中に没しつつかつた。

近くの海面には、上海丸を脱出した邦人と船員が、荒波に揉まれながら、親は子の、子は親の身を案じて、大声で励まし合っている様を見ながら施す術もなかつた。

崎戸丸の将兵と船員は、上海丸の前半部が接近する度に、船倉の上部を被うための板を両船の間に渡して、上海丸の邦人の救出に当たつた。敏速なこの活動によつて、上海丸の

引き揚げ邦人四百名を崎戸丸に移乗させることができた。しかし、この救出活動中、誠に不幸な椿事(ちんじ)が発生した。引き揚げ邦人の中に、生後間もない乳飲み子を抱いた母親が、船と船との間に渡された板を渡ろうとして、崎戸丸の兵隊が差しのべた手を掴(つか)んだ際、グイと手を引つ張られたため、乳飲み子を海面に落としたのである。母親は、半狂乱状態となり、舷側から海面に飛び込もうとしたが兵隊に抱き止められて船室に連れて行かれた。

崎戸丸に凭(もた)れていた上海丸の後半部は次第に離れ始めた。崎戸丸の船長は上海丸の船長に対して拡声器で「本船を離すぞう」との呼びかけたのに対し、上海丸の船長は、「しばらく待ってくれ」と頼んだ後、「上海丸の船員は直ちに本船か

ら退去せよ」と数回繰り返して放送した。崎戸丸の将兵四千と船員が固唾（かたず）を飲んで見守るうち、上海丸の後半部の沈下の速度は次第に増し、船尾が上向きになると同時に、殉職を決意して一人船内に残っていた船長が鳴らす悲しい汽笛の響きを残して、上海丸は完全に海没したのである。

崎戸丸は、上海丸の海没を見届けた後、直ちに現場を離れ、南下を開始した。崎戸丸に救助された上海丸の船客四百名は、一旦、台湾の高雄港に上陸した後、別便で無事帰国したことが後日判明した。



誤爆を受けた

原住村民村落の救護活動

昭和十九年十月、私は小スタ列島の防衛に任じていた濠北派遣第四六師団軍医部付き衛生准尉として、スンバワ島に駐留していた。スワバワ島の面積は四国とほぼ同じ、人口は約三十万人、島の西部と東部に一人づついるサルタン（回教国の族長）によって治められていた。オランダの植民地時代には、島の西部に司政官一人と一箇分隊程度の軍隊を置いていたようである。島民の文化の程度は低く、暦もなく、正確な年齢も判らないという状態であった。スワバワ島には公立の病院が島の西部に一カ所、東部に一カ所設けられ、医

師が一名づつ勤務していた。

大東亜戦争が勃発（ぼっぱつ）し、オランダが敗退後のスワバワ島には日本海軍が一箇小隊駐屯していた。第四六師団は、スワバワ島に上陸した日本陸軍最初の部隊で、連合軍の進攻に備えて、現地自活の傍ら日夜陣地構築に励んでいた。昭和十九年に入るや南方の制空権も制海権もアメリカに奪われ、スワバワ島上空に偵察のために日課のように飛来する敵機や近海に出没する敵潜水艦も拱手（きょうしゅ）傍観のほか途なしの状態に立ち至った。

昭和十九年十月のある日、四六師団司令部上空にB 29が一機、超低空で飛来、司令部上空を旋回中、近くの丘陵上に陣地を構築していた高射機関銃隊が、撃墜可能と判断し、猛射を加えたが撃墜は不可能であつ

た。翌日正午頃、師団司令部上空に B 29 が十二機編隊で来襲、猛烈な爆撃を受けたが、落とされた爆弾の割には被害軽微で、死傷二人、建物の被害二棟だけであったが、この日、師団司令部の建物を目標として行われた爆撃によって近在の現地人の村落が誤爆を受けて火災が発生したことが望見された。村落においては、死傷者が多発していることが予想されたので、師団司令部から救護班を派遣することになった。救護班長には私が任命された。救護班には、負傷者運搬用トラック二台（海軍部隊差し出し）の使用が許可された。私は、衛生兵二人、運転手二人を指揮して、所要の衛生材料・担架などをトラックに積み、目的の村落に急行した。

急行した村落の火災は既に消され

ていたが、予想どおり、百名近い重軽傷者が村落内に溢（あふ）れていた。私は、まず、重症者から応急手当を施した後、トラックまで運んだ。中には、爆弾の破片で腹部に受けた創（そう）から腸が飛び出している者もあった。スワバワ島は、空襲を受けたことがなかったため、誰一人として空襲に関する知識の持ち合わせがなかった。村落の長老の話によれば、この日、村落の人々は、B 29 に向かって打ち上げられている日本軍の高射砲弾が炸裂する様を、広場に集まって見物していたところ、目標を大きく逸れた爆弾が、近くに落ちたために大惨事となったと証言してくれた。

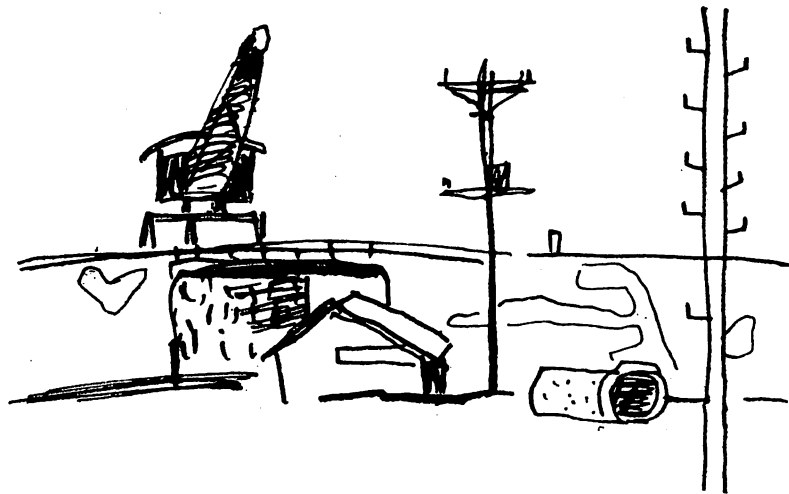
結局、我々救護班が病院までトラックで輸送した負傷者は七三名であった。トラックに乗せられた負傷者

が十名近く逃走したので、その理由を尋ねたところ、病院で治療費を請求されたら困るからと言うのが全ての人の理由であった。私は、病院長とは懇意の中であったので、病院に到着後、直ちに、病院長に、負傷者と共に、手術に必要な包帯・ガゼ・縫合針・縫合糸等は無償であると説明して渡したところ、病院長は手術室の床に跪（ひざまず）いて衷心から感謝の意を表してくれた。救護班長の私は、無事、任務を果たし、所属長の軍医部高級部員・副官部及び参謀部の高級部員にも復命した。

最後に、この日の爆撃について、驚くべき特異な事項があったので、付記することにした。この日、B 29 から投下された爆弾のうち不発弾が一発あったので、翌日、不発弾処理

が行われたが、驚くべきことに、その爆弾に日本語で、「昭和十八年大阪造兵廠製造」という刻印が施されてあったのである。しかし、この疑問は、間もなく解くことができた。

昭和十九年四月、ニューギニア島ホーランドイアに上陸したアメリカ軍は、日本軍が同地に集積していた莫大な爆薬その他の軍需物資を手に入れることができた。スワバワ島でアメリカ軍が投下した爆弾は、ホーランドイアにおいてアメリカ軍が日本軍から鹵獲（ろかく）した爆弾を使用したものと推察される。



凶南丸・笠戸丸

香田 武

昭和十九年八月二十二日午後七時五十分。なんの前触れもなく突然私の腹にずすと響く強烈な爆発音。途端におびただしい海水に呑み込まれ、どのくらい時間がたったのか検討もつかない。気がつくとき暗い洋上に浮いていました。アメリカ軍の魚雷を受けのた。星のまたたく洋上で、ふと母の顔が浮ぶ。その時、はるか遠く、私の乗っていた凶南丸が赤い炎につつまれ、まるで泣いているように見え、悲しく涙が出る。やがて凶南丸は暗く深い海中へ消へていきま

ました。
私と同じような人たちがあちらこ

ちらと泳いでいる姿に気づく。一緒に洋上に漂っていました。時間の感覚がないまま夜明前、日本海軍の海防艦に発見され佐世保へ。上官より凶南丸の沈んだことは口外してはならないとのこと。明るくなって分かったことは、凶南丸につみ込まれた二万トンの重油が流れだし、その中を私たちは浮いていました。そのため、顔から手足まで重油で真っ黒。誰が誰だかまったく判りませんでした。

顔と手足の皮がきれいになるまで、佐世保の勝富町という色町に足止され、九月半ばに、やっと私のふ

る里広島に帰り着きました。母の喜ぶ姿が今でも思い出します。二カ月後の十一月始め、移民船で有名な笠戸丸に因島で乗船。しかし、知らぬ船に乗っているのがイヤで六月に下船、笠戸丸はカラフトに行く予定だった。その後、第十二共同丸に乗船していた八月六日、広島に新型爆弾が投下されたと聞き、広島にいる父母の事が気になり、八月十七日、広島に帰る。赤ちゃんから年寄りまで、ひどすぎると思いました。

私の気にかかるのは笠戸丸の人たち、今でも忘れません。笠戸丸はもともと、ソ連の船で、日口戦争後日本の船となった。

私の被爆体験記

小 楨 尚

昭和二十年八月九日、当日は晴天で空襲警報も発令されておらず、警戒警報中だったと記憶しております。

当時私は軍人として、長崎市土井首小学校に駐屯しておりました。ご承知の通り長崎市は山と海にかこまれたすり鉢の底のような地形で、土井首町は野母半島へ通ずる街道の小高い峠に所在しており爆心地から約八キロ離れておりました。

思い起こせば丁度昼前の休憩時間で、校庭に立っていた時でした。突然上空一杯に閃光（せんこう）が走り、一瞬目が眩んだ直後にドーンと

強烈な爆風が襲い吹き倒されました。その瞬間校舎のすべての窓硝子がナイフのような鋭い破片となつてくだけ散つて校庭に突き刺さつたのを思い出します。

要塞司令部からの命令を受けて私の小隊はすぐに爆心地へ向かいました。街へ近づくにつれて目の前の風景が、昨日までのあの美しい景色、たたずまいが何処へ行ったのか、余りの変貌に息を呑みました。港に面した山腹、向うに見える島々のすべての樹々が燃え上っており、街は瓦礫（がれき）の山と化して目を疑うばかりでした。

茫然としている暇もなく、市中を通り焼けただれた学校、工場、商店街の残骸（ざんがい）の傍を避け乍ら爆心地の浦上地区に入りました。悲惨などと云う言葉を越えた惨状は目を覆うばかりで地獄のありさまでした。

道路は瓦礫で埋まり、人、牛、馬の死体が累々と目鼻も判らぬ状態であつたこと、国鉄浦上駅の横に、十字に積み上げられたレールの中へ吹き飛ばされた人体がいくつかめり込み原形も留めないで肉片がとび散つていた状態や、民家の土台だけが残つていて、その中に猿の黒焼きのように縮んで手首や足先のなくなった遺体が丁度家族のまとまりで重なつていたこと。また頭髮が焼けてなくなり顔もただれた婦人が子どもを抱いたり手を引き乍ら続々避難して行

く様子など痛ましい限りでした。死の街と化した地域で三日間野営し乍ら遺体の収容、道路の修復などに従事しましたが、絶え間のないものすごい悪臭には全く参りました。食事も喉を通らずつらい思いで毎日をごしました。

被爆の翌日、アメリカ軍機が再び飛来し、伝単(宣伝ビラ)を撒(ま)いて行ったのを拾ったところ「被爆のあと、この土地には百年間は草木も生えない。早く今の無謀な戦いをやめなさい」と云った意味のことが書いてあったのを記憶しております。三日間作業のあと四日目に駐屯地へ帰り、その後、九月中旬に復員するまで市内へは入らなかつたのですが、殆んど全員が下痢、発熱に数日悩まされたのを覚えております。

終戦直後、アメリカ軍の航空母艦

など数隻の艦艇が入港し、毎夜電光で満艦飾に飾り立てていたことが電気も水道も無いまま廃墟と化した市内と余りにも対照的だったこと。また復員のため長崎市駅へ集合した時、既に至るところで青い草が芽を出しており、復興に向って人々の立ち働く強い息吹を感じたことなど、複雑な思いを胸にして長崎に別れを告げたことを思い出します。

私も被爆者の一人として、被爆後四十九年を経過した今でも、あの悪夢のような惨状と亡くなられた方々のことを折りにふれては思い出し、このような悲劇を二度と繰り返すことは絶対にあつてはならないと誓い、また祈念いたしております。



被爆体験

佐々木 由政

私は、昭和十九年九月一日、現役兵として広島砲第二九五三部隊に入営しました。

被爆状況

昭和二十年八月六日午前八時ごろ、原爆がさく裂し光とともに兵舎の窓ガラスなどが全壊しました。その時、私は広島県安芸郡坂村の西方、鯛尾の陸軍高射砲陣地にいました。約五分くらい後に広島上空に広がった厚さ十メートルほどの炎の層が左右に広がり、キノコ雲が発生しました。広島街は、火と煙が充満し、

一面、火の海でした。

翌七日早朝、陣地から下を見ると、浜辺に死体が所狭しと並べられていました。我々は食糧を受け取るため、陣地から軍の船艇で宇品港から兵舎に立ち寄りました。兵舎の屋根は吹き飛び、なくなっていました。宇品街道筋などでは、中年の女性や子どもたちが狂ったように泣き叫んでいたのが、強く印象に残っています。街路樹なども白く焼け垂れ下がり、比治山公園下の市電の鉄柱が途中から爆風のために折れ曲がっていました。そのそばで、救援隊の人たちが焼け残りの柱を積み重ねて、そ

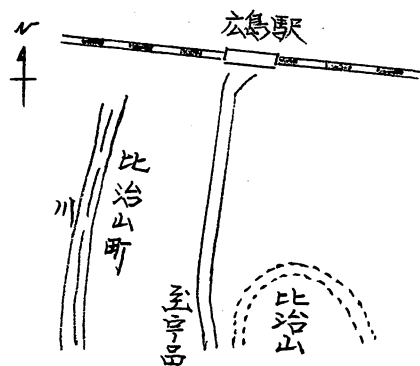
の中へ死体を入れて火葬にしていた。建物はすべてなく、焼けただけ残骸（ごんがい）と灰だけで、生きた人影はまばらです。生き残った人たちも、顔面はもちろん腕や足まで露出部分は全部焼けただれ”とぼとぼ”と歩きながら「兵隊さん、水をくれ」「このかたきを取ってくださいよ」と叫ぶように言っていました。

指示を受けるため比治山の本部に行きました。本部の建物は、爆破され跡形もありませんでした。

本部の指揮下に入った救援隊は、紙屋町の救援班の収容テントに着。前日から来ていた者と交替。一面焼け野原で、爆心地の直下であったと記憶しています。ここで、不眠不休の救援作業が続きました。

江波の陸軍病院が全滅し、本部も

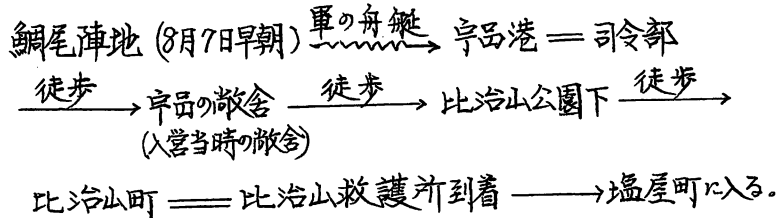
◎ 被爆場所の略図 (入市)



宇品から比治山まで徒歩、
塩屋町の臨時救護所の
警備と患者救援のため
派遣

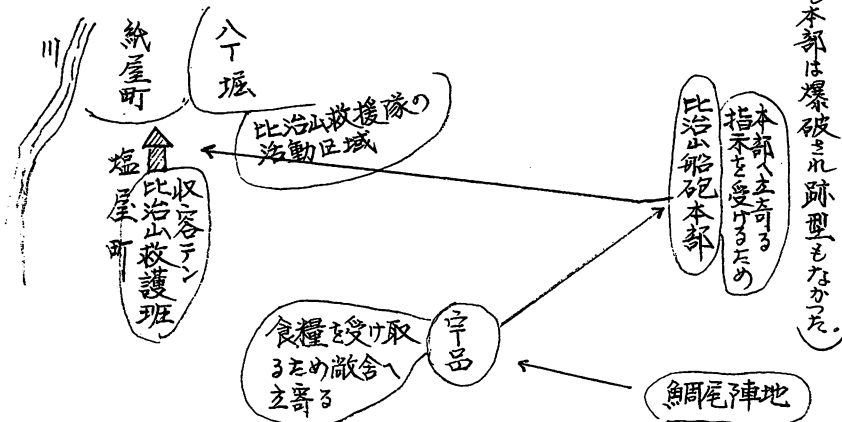
壊滅状態で、病死者の整理に追われ
て眠る暇も、場所(テント)もあり
ませんでした。救護所には死んだ人
や死に直面した人たちがゴロゴロ横
たわっており「水をくれ、水をくれ」
と声も切れ切れに叫んでいました。
原爆の灰と死体の臭いが、真夏の暑
さとともに言いようのない悪臭にな
り、食べ物ものどを通らない状態で、
生き地獄そのものでした。

◎ 爆心地方面に立ち入るまでの行動

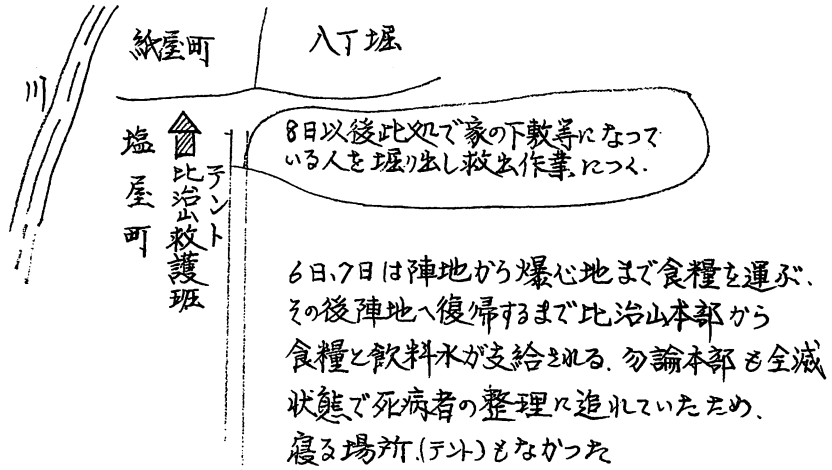


◎ 爆心地に立入った時の状況と略図 (1)

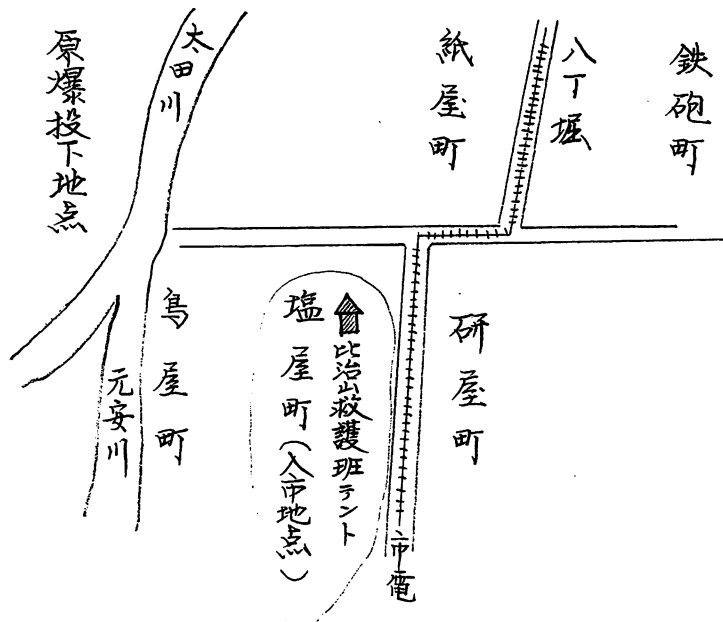
7日早朝網尾陣地を出發、比治山本部の指揮下に這入る。
また塩屋町方面の比治山救護班の収容テントへ向う。
此処で不眠不休の救出作業が続いた。



◎ 爆心地に入つた時の状況 (2)
 (比治山救出班受持区域の略図)



◎ 救援作業に就いた現地の略図



戦後五十年の今

生野智子

半世紀前のあの暑い夏の日の正午、丁度その日は旧盆に当る八月十五日であった。

ラジオから流れた天皇陛下の「玉音」で大東亜戦争で日本が敗れたことを知り、その衝撃で家族の誰れもが言葉も出ず、熱く頬につたわる涙で長い長い暗い一日が終った。

僅（わず）か十歳で体験したこの敗戦の悲しみは、毎年盆の頃に鳴く悲しげな蟬の声を聞くと、私の脳裏に現実として蘇って来るのである……。

子どもも大人も身も心もボロボロになり苦悩と恐怖の地獄絵の様な毎

日であったあの三年八カ月は一体なんの為だったのか。それは十年にも二十年にも思える程の辛酸の連続であり、五十年経った今も消え去る事なく鮮明な映像として焼きついている。

現在日本は表向きには一応平穏で豊かな日々であるかもしれぬが、あの戦争に依って愛する家族を失い、あの恐ろしい原爆での被爆者の永遠の苦しみ、また他国への戦争責任等々戦争の残した傷跡は永遠に引きずられていくのである。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争勃発（ぼっぱつ）、その直後には

まるで戦争を讃えるかの様に旗行列や提灯行列が街中を賑わした。

翌年四月、私は小学校に入学したが、その年より従来の尋常小学校の名称が国民学校と改められ、それと同時に学校生活のカリキュラムの中には戦争中の国民であることの意識づけの為に各学科の中に戦争に関して讃える意味の内容を折り込む授業となっていた。

例えば、国語科では兵隊さんへの感謝の念を深める内容にし、特に作文はその類のテーマにさせ、図画や工作も兵隊、軍艦、飛行機等が描き出される様に、また書道はその頃盛んに暗記させられた。欲しがりません勝つ迄は、撃ちてしまん勝つ迄は、鬼畜米英

興国の荒廃この一戦にあり……等の標語。

また音楽の時間は必ず軍歌もつけ加えて教えられた。三十曲位の軍歌が頭に入った。

またこの時代の私達の遊びは殆んど道具が無いので工夫して、“肉弾” “準戦闘機”等？人に身体を思いつきりぶつけて他人を倒す、まるで特攻隊をイメージした遊びをしていた。

朝礼、終礼には必ず全校生徒を集めて、戦時体制の心得を話し、また学校の年間の多くある式典には教育勅語を拝読し、軍歌“海ゆかば”を歌い、毎日登下校には校門の前の奉安殿（天皇皇后の写真を飾ってある）に最敬礼をしないと罰せられていた。

家庭にあつては国民夫々の義務として奉仕活動をしなければならなかった。

一、興国養兎…兎を家庭内で飼育して増やす

毛皮、食肉用

一、興国養蚕…蚕を飼育し繭をとる

…絹糸

毎年繰り返えし飼育

一、ヒマを植樹…実から油がとれる

ので

一、ラミー採集…麻の繊維

一、いなご…多くとって乾燥する…

食用

一、古鉄…古紙回収

この様な奉仕活動を同時に頑張っていた。

これ等の収穫は総て無償で学校を通じて国に納めた。戦争が激しくなると益々強制させられた。学校の運動場の三分の二は食糧増産の為と農園になった。放課後農作業をした。

私達の学校は二千名ものマンモス

校であり、総ての奉仕活動の成果は並外れていた。

昭和十九年に入ると食糧事情が悪化した為、昼の弁当を持参できぬ子が多くなり、体力は益々低下し、朝礼時や体育時に多くの子が倒れ、長期欠席につながっていた。

生活必需品は総て厳しい配給制度となつて学用品等も甚だしく不足し、ノートや鉛筆は年間一度位の配給であった。消しゴムの代用として車のタイヤの端切れを使った。その頃誰れかが教室内で落し物をする時、直にそれは拾った人の物になるという様に全く子どもの心までが醜いものになっていった。

その頃父親が出征した家庭が多くあつた為、衣食住にこと欠き奉仕活動に疲れ果てた子ども達の心は益々荒廃した姿となつていった。

私の住む大分市は当時、陸軍・海軍の基地があつたので戦争が長引くにつれ敵機の空爆が連日のようになり、学校内にも何箇所かの防空壕が掘られ避難訓練も度々あつた。防空壕といつても、無蓋（むがい）で簡単な構造であり弱い爆風を避けられるだけで強力な爆弾等では避難している者が全滅であつたらう。毎日防空頭巾の三角布を必ず携帯していた。その頃学校が爆撃に遭うことがあり、私の学校にも分散された児童たちが寄宿することになり益々大世帯となつていた。

一クラス八十名近くになり身動き出来ない程の教室内であつた（現在の一学級の二倍以上）

夜になると定まって七時頃から敵機来襲の情報注意報のサイレンが鳴り、各家庭とも電燈に黒い布を被せ

ラジオの情報に耳を傾けた。次に警戒警報、そしていよいよ敵機がこの上空に必ず来るといふ予想で空襲警報となり直に防空壕に入り様子を伺つていた。

毎日このパターンの明け暮れであつたが、時には壕に入る時間もない程のスピードで、爆弾の投下が始まり生きた気持がしなかつた。

その様な時は長い長い時間を感じられた。

家には大小幾つもの防空壕が掘つてあつてその時の状況で壕を選んで避難していった。

夜の爆撃は大体B29型という爆撃機でその高度が高く特徴のある鈍い金属製の轟音を出して飛んでいた。私達はその音を見分けることができ程何回も来襲して来た。

爆弾投下の翌日、知人の安否を気

遣つて現地へ足を運ぶと悲惨な姿となつてゐることがあつて本当に耐えられぬ気持であつた。また家屋は崩壊しているが人が無事であつた時は抱き合つて喜んだ。

昼間の空襲は、その頃太平洋上に敵艦が待機して、その艦上から飛び立つ艦載機という小型攻撃機で、ときには民家の屋根すれすれに飛んでいる時は乗員のアメリカ兵の姿がはつきり見え無気味であつた。小廻りがきく為正確な位置から目的を定め機関銃を乱射するので狙らいつけられたら殺されてしまう。

私も防空壕に入る間がなく物陰に避難していたが、低空飛行の艦載機による近所の人への残虐な光景を目にした事があつた。

主要鉄道の線路等も爆破されてい

敵機の去った後に必ず日用品や学用品等に似せたもので強力で精巧な小型爆弾を投下して去っていく事があった。

子どもたちはそれを本物の学用品と思い拾って手にした瞬間爆発し、その場で即死した子や小さな手や足を切断した子もあった。

また、時限爆弾等も多く投下されて、後々まであちらこちらで恐ろしい爆発があった。爆発した跡には直径二十メートル位の大きな穴があいていてその威力の大きさに驚いた。そして五十年経った今でも爆弾が民家や河川敷等でも爆発している。

総てに飢えた日本人の心を弄（もてあそ）んだ卑劣な手段でどんなに憎んでも憎みきれないと思った。

二十年の初め頃は夜の爆撃に焼夷弾が使われ、投下されると一瞬に広

範囲の空が真赤に焼け、熱風が遠い所まで吹き真昼の様に明るくなるほど家屋が多く焼失していた。

この頃には商店街通りも民家も公共物も無差別に被災地となっていた。

太平洋の方角からいつも同じコースで来襲して来る敵機を何故日本は撃墜しないでいるのだろうかと疑問に思っていた。

しかし、毎日の新聞やラジオの報道では大本営の発表に依ると日本軍は益々戦績を挙げて、各最前線の島（南太平洋上の多くの島を日本軍が占拠してそこを攻撃の基地にしていた）においてアメリカ軍に多大なる損害を与えている…と具体的に数字を発表した。戦艦、巡洋艦、駆逐艦、戦闘機、爆撃機、軍用基地…と。

私達は日本は必らず勝利に向って

いるのだと信じていたが、大本営は虚偽を伝えていた。

私の父は日本は決して勝ってはいない。負け戦になっているといつも小声で云っていた。

実際は戦うにも戦えないほど逼迫（ひっぱく）し追い詰められていて風前の灯であったのだった。

その頃戦争に対して不満や不安な事などを口にすると非国民と烙印が押され処罰された。

憲兵が街中に目を光らせ取り締まりが厳しく私の家に住民の様子を探りに来ていた。

最前線の兵隊に送る慰問袋を一般の家庭に強制して私の家に集められていた。物資の不足の折で大変だったが戦地の兵隊さんへの感謝の気持ちから必らず作って中に手紙も添えた。その手紙の内容も全部検閲され

ていた。父も昔、日清戦争で出征し、慰問袋のありがたさをよく知っていた。父は五十歳前であったのでその頃は在郷軍人として在宅活動をしてきた。兄は志願兵として満州に行った。

その頃の出征兵士の家庭は母親や年寄りが一家を支えていた。育ち盛りの子どもに少しでも食糧を確保する為に農家に大切な着物をもつていき主食や野菜などと物々交換し、その買い出し部隊は列車の中で犇（ひし）めいて帰った。ところがその頃は食糧の受理統制が厳しく一般に正規の配給以外は総てやみ物資となり見つけられると容赦なく全部取りあげられた。

それでも食べる為には、また買い出しに行くしかなかった。その非情な取り締りにみんなどれだけ恨みを

もったかしのれない。今日一日どうして生きてゆけばよいのかと誰れもが悩んだ。

この様に総てを閉ざされた状況下の中での毎日の生活は想像を絶するものがあり各家庭の子どもの数も多く益々窮迫していくのだった。

栄養失調により失明したり、食に不適な物で中毒死したり、家族の為に盗みをしたりした人もあったがこの様な人をみても同情してあげる余裕もなかった。

空爆と食糧難とを重視して小学校では疎開を命じたが、行く先のない人も多くあった。

また疎開先でも苦労が多くあり、危険を承知で家に舞い戻った子もあつた。

私も短期間県内の親戚に寄宿した。子どもの疎開中に家に残った家

族が爆死してしまい、子どもが孤児となった家庭があつた……

私達より二年上の学童から学徒動員として、勤労奉仕を義務づけられ、当時の軍需工場や土木作業の現場等に授業時間を裂いてまで行かされていた。十歳をすぎたばかりの男の子は、茶色の国民服に、頭には戦闘帽を被り、足にはゲートルを巻いていたがまるで小さな兵隊さんだった。親の不安はどんなだったろうか……女子は被服縫製工場等に行かされていた。

ある日、その工場が爆撃に遭い多くの犠牲者が出た。空爆の最中であつたので、遺体は各家庭で葬送されず、近くの川原の隅に運び真昼に重油をかけて火葬したそうである。

信じられないが事実であつた。家族の悲しみはどんなに深かつたであ

ろうか……

確か終戦の少し前だったか私の家の前の男の子が近くに落ちた爆弾の真管の部分を持ち遊んでいるうちに爆発し、大きな破片が身体の腹部に突き刺さり、内蔵が青い火焰で燃えただけ、人が多く駆けつけて必死に消火にあたったが、益々燃えるばかりでどうすることもできず、その子の七転八倒の地獄の叫び声が続いたが救助隊が来た時には既に絶命していた。

それでも黄燐が肉を焦がして燃え続けた。

私は傍近くで遊んでいて目の前で見た。そしてかなり遠い所を歩いていた二人の女の人も飛んで来た破片が当り即死した。

子どもの母親が外から帰って来て狂い叫んだ。

救助隊が担架に載せて運ぶその子

の上に母親が覆い被って燃える黄燐を消そうとして着ている服に燃え移っていた。

あの時の惨い残酷な光景、肉片は焦げる匂いと黄燐の臭気……五十年経った今でも絶対忘れることが出来ない。今こうして生きていられることも不思議に思える。

また私にはもう一つ心に深く残っている想い出がある。

私の生家の裏庭から土地続きで広い大きな修行道場の禅寺があった。十九年頃からそこに度度陸軍兵士達が寄宿していた。その広い境内の松林の中には何台もの高射砲が隠されて置いてあった。空爆の激しい日には時々高射砲が火をふいた。が敵機は一度も撃墜したことはなかった。(街の真中だから撃ち落しては危険)

勿論威嚇であったと思う。

その頃その寺は外部から出入厳禁となっていたので軍人の宿泊等は秘密にしていた様だ。

兵士達は昼間は行動せず、夜になったら皆動き始めていた。私の家から総て見えた。

そしていつの頃からか私の家の離れの部屋に未だ二十歳前の若い空軍の兵士達が寄宿することになった。彼等は五人グループ位で、五日間泊っては次の新しいグループと交代して夜にそっと寺の方へ帰って行った。市内の他の寺でも兵士が寄宿していたそうである。(私の父がその寺の総代であり区長を勤めていたので兵士のことは絶対に口外しなかった)

母は祖母と一緒に三度の食事をつくってあげ彼等を心よく賄ってあげ

ていた。

後日解つたが彼等こそ特別攻撃隊員（特攻隊）であつたのだ。彼等は特攻機に乗り出動する前の最後の数日間家族的なぬくもりの中で過ごさせてあげる配慮からの寄宿であつたと思う。そんな運命にいる人達とは予想も出来ぬほどの明るく楽しい人達に見えた。

私が特に気付いて印象に残つたのは彼等が大切そうに持っていた白い長いマフラーであつた。彼等の説明に依ると万一海に落ちた時にサメに喰い殺されない様にマフラーを巻いた身体を長く見せるとサメの習性で自分より大きい物には絶対に向つて来ないので助かるんだと笑いながら話してくれた。

しかし、彼等の特攻機は片道のがソリンのみで目的は敵艦に体当たりす

るのだから生還することは全くない。私には面白く答えてくれただけであつた。頂度同じ年頃の私の兄も出征中であつたので兄を想い出し悲しくなつた。

いろんな方言が交つて優しい眼をしていた未だ少年の顔の幼い感じを残す人達ばかりであつたので小さな私と話してくれたのだろう。それ以来、ニュース映画や報道等で見る特攻隊員のあの飛行服と首に巻いた白い絹のマフラーの格好良さに憧れをもつていた。

我が家で毎日世話している蚕の繭もやがてあの白い絹のマフラーになるだろうと張り切つて飼つた。それ以後あの兵士達は二度と帰らぬ人となつてしまつたが、私の家に数日間づつ泊つて私に素晴らしい想い出を残こしてくれたあの人達に感謝し、

お世話出来たことを家族全員が我が家の自慢として喜こんでいた。

いよいよ敗戦の二十年八月

総てをこの戦いで日本の主要都市は焦土と化し廃墟と化した。

家族を失い、帰る家もなく身も心も荒廃し今日一日をどう生きるかも解らない人々が、巷に溢れていた。

戦災孤児 病人 怪我人 失業者

……

この状態から果して日本の再建があり得るのだろうか。無から有が生まれるだろうか。しかし残酷な戦いに耐え貫いて来た日本人には想像も出来ないほどの生命力が潜んでいた。

焼け跡の煙の消えない内に最早復興の兆が見え始め日本全体に槌音（つちおと）がなり響き始めた。

私の住む大分市も焼け跡に建つ間

(やみ) 市から始まって徐々に活発な動きが全体に波動を起こし大分市の原動力になり生活の基盤が築きあげられるまでには五年の月日は要さなかつた。

この後、日本全体にも順調に経済が延びてゆき失業者も減少してゆくが完全な復興にも未だ未だ時間が懸つた。

アメリカの援助もあつて食生活も少しづつ改善し、二十一年から学校給食が始まり私達はその第一号の恩恵を被つた。

私の家庭にはソ連で抑留生活を長く強いられ辛苦をこの上ない味わつた兄も無事帰還し、姉夫婦も憔悴(しょうすい)し切つた姿ではあつたが満洲から引き揚げて来た。

それまでは毎日毎日京都の舞鶴に着く引き揚げ船の名簿の中に家族の

名前を見つけようとラジオの発表に父母も私も嘯じりついていた事だつた。

私の家庭は幸運であつたが、戦地で戦死して生還しなかつた家庭や未帰還のため何年も待っている家族の方も多くあつた。

またあの残酷な広島、長崎の原爆で一瞬の内に多くの人々が猛火の中で焼けただれ、もがき苦しんで炭化して死んでいったことを思うと、私達はこうして生きて平和を願える喜びにどれだけ感謝してもしきれぬことである。

現在、世界のあちこちで大小の戦火があがつて罪もない多くの人々が犠牲になつているのをテレビが放映し私達はそれを目の前にしている。

湾岸戦争のあの背筋に氷を感じる様な残酷で悲惨な映像も同じ人間で

ある私達が目を伏せることなく茶の間で見えていたのである。

戦争は終つても永遠に苦悩が続き、永遠にその爪跡が地球上に残り、人々の恨みは地球の果てにまで届くほど大きなものである。

戦争の罪の重さを私達は子々孫々に語り継ぎ伝え継ぎ、遠き過去の事と風化してはならず、歴史の中に埋没させては断じてならぬ。

このようにして戦争を体験して来た私達はこれを布石としてやがて来る二十一世紀に向つて世界平和を叫び続けることが私達一人一人の戦争責任ではなからうか。

私の戦争体験記

其田 清

一九三一年（昭6）に小学校入学以来、大学中途で学徒出陣、一九四

五年（昭20）の終戦までの十五年戦

争は、私の学校生活の全てであり、まさに戦争の申し子みたいに、一九二四年（大13）に生を享けた私の戦争体験にペンを走らせてみる。

戦争が背景にあったので、幼年期、少年期、青年期は全て戦争一色に彩られていた。暗い灰色の時代などと伝えられているが、国全体がそのような空気の中にあつたのだし、私共は決して「暗い」「つらい」「苦しい」等とは毛頭思っていなかった。

小学校入学の年に満州事変がおき

た。この頃の遊びは殆ど戦争ごっこであった。

中学校入学が日中戦争勃発（ぼつぱつ）の年に当る。学内では葡萄（ぶどう）が奨励され、軍事教練が強化され、最終学年時には夜間戦闘の訓練まで受けていた。二、三年の頃、夏の甲子園球場で野球観戦中のこと、回の入替時場内放送で「〇〇さん至急お宅へお帰り下さい。軍務公用でございます」軍隊への召集の知らせである。観客全員が万雷の拍手でこれを送る。兵役を一旦終え予備役として社会で働いている大人を必要に応じて軍は召集して行った。

この召集令状が赤色をしていたので、世間一般で「赤紙」と呼んでいた。この召集を受けた者の職場、町内では目出度い事として盛大に送り出していた。

一九四一年（昭和16）日米開戦、中学校最上級学年の時である。東南アジアに戦線は拡大して行くが当初の勢いは次第に衰え、苦戦の容相が、きびしい報道管制の中から伝わってくる。私は既に進学していたが、進学の年、学生に与えられていた卒業までの徴兵猶予措置が文科系学生に對し打切られ、兵役に就くよう命じられた。時に一九四三年（昭18）、世に謂（い）う学徒出陣である。出陣学徒第一陣の先輩方々を送った私共には通年勤労働員が待ち構えていた。川西航空機会社、淡路島での陸軍飛行機場建設作業、住友鋼管等、

ペン持つ手にスコップ、ハンマーを、そして次にその手に銃を、の時代に入って行く。学校での講義を受ける時間は全くなかった。

飛行場建設の時の事である。某日、帰途のトラックが路肩を踏み外し一番下の畑に転落、荷台にすっぽりと覆いかぶせられる形となった。ぐらっと感じた次の瞬間土煙りの中이었다。まさにパニック状態であった。どうして外に這い出したか全く不明、肩をはさまれトラックの下敷きになり身動きのとれない友がいる。どうやって助け出したのか思い出せない。とにかく救出した。骨折の重傷を負った友は、幸か不幸か兵役は免除された。しかしその友はこの世に今はいない。

軍は次々と学徒の志願制度を打出し発表していった。海軍予備学生、

陸軍特別甲種幹部候補生等、「どうせ軍隊に入るなら幹部コースを早めに」、「いや最後まで待つ」、二つの嵐が学生の間吹き荒れていた。私も陸軍特別甲種幹部候補生を受験したが、陸軍現役徴兵が先に決まり、一九四五年（昭20）一月二日香川県善通寺師団の砲兵隊に入営した。出発は十二月三十一日深夜、出発時隣組、町内会の方々に送って頂き、大阪駅では中学、大学の学友の歓送を受けた。「国の為だ。元気で頑張れよ」「あとは頼んだぞ」。ぐつとくるものを感じたが、涙は見せられない。万歳の声を背に列車に乗り込む。「断つに忍びざる絆を切って我は征く」。当時の心境である。車中の老婆に「ご奉公ご苦労様です」この一言が耳に残っている。駅頭で見送ってくれた友も次々と出征して行っ

た。その中の何人かが戦争のいたましい犠牲者となり散華した。悔み切れない。

陸軍二等兵（一番下の階級）の生活が始まる。砲兵隊には馬がつきもの、馬の世話に始まり、馬の世話に終る。その間三度の食事の準備、あと片づけ、部屋の掃除、古参兵の靴の手入れ、身の廻り一切の世話、演習、兵器の手入れ、一時の休みもない激務が続く。緊張の初日が終わったあと、食事後何か物足りなさを覚える。初年兵誰しもが体験させられる空腹感である。一日四合半の割当では満腹感など及びもつかない。そんな或る日、馬の食糧の一部の高梁（こうりょう）の煮かすを深夜部屋を抜け出して食べた者がおり、夜間巡察士官に見つかり、営倉（軍の刑務所）入りの処罰を受けた。着衣の

紐、ボタンは全て切り外された。自殺予防のためである。軍律のきびしさをまざまざと見せつけられた一面である。翌日同期兵全員は連帯責任をとる為、朝食を与えられなかった。歯を食いしばって午前の勤務に耐えた。一方、馬は念入りに手入れを受けピカピカに磨き上げられて行く。物を尋ねられて答えられない時は軍隊手帖を見て答える事は許されている。人格、教養、ユーモア等一切を無視した軍隊の中で唯一ホッとするところである。しかし「知りません」は絶対に許されない。「バカ者。忘れましたと答えろ」と一喝。すぐ軍隊が顔を出す。初年兵の一期の検閲が終り、二段階の試験に合格、陸軍甲種幹部候補生（伍長、下士官の最下位の階級）として千葉県の野戦砲兵学校に転属命令が出る。陸軍将校

としての訓練を受ける為である。移動中、神戸、大阪の一面の焼野原を目にし、空襲の恐ろしさを知る。大阪駅の一分間の停車中の面会を期待したが、私の移動通知のはがきは実家に届いてなかった。移動は既に極秘裏に進められていたのである。

野戦砲兵学校でも、馬から馬への勤務は変わらない。若干異なるのは、同室者が同階級の幹部候補生だった事、夕食後砲術学習のカリキュラムが組まれていた事である。演習内容が、至近距離からの対戦車攻撃訓練に変更されて行く。その為の蛸壺（たこつぼ）状の空堀りが連日続けられて行く。真夏に入った頃から連日連夜空襲警報が鳴り響いた。その都度、馬を引いて近くの山に退避、これが何日続いたか。ある日突然日中の空襲警報である。突如として空

からの轟音（ごうおん）、敵機？味方機？続いてバリバリと炸裂音、一瞬どう対処したのか覚えはない。無我夢中であった。気がついた時は既に敵機の機銃掃射は終わっていた。営兵（守衛）一名の戦死が伝えられた。地上軍の対空攻撃も、空軍の迎撃も一切なかった。千葉の大空襲を目にした。例によって空襲警報のサインと共に馬の避難場所に移った時、ある方向が赫（あか）く燃え上った。「あの方向は千葉だ」の声がきこえて来る。敵機による焼夷弾攻撃である。執拗な焼夷弾投下が続く。夜明けまで続く空襲にも、日本軍の応戦は全く無かった。何日か後広島に、そして長崎に大型の新型爆弾の投下ニュースがどこからか伝わってきた。公式発表は一切ない。後日原子爆弾投下と知る。「こんな状態で、

この戦争は大丈夫なのか」誰にも口に出さない不安が徐々に首を持ち上げてきていた。

八月十五日朝、「正午から重大放送がある」との通達、営外の所定場所ですべて全員整列、直立不動の姿勢で天皇陛下の玉音放送に耳を傾けた。ラジオは雑音で殆んど聞き取れない。しかし雰囲気は察知できた。周囲の動揺が伝わってくる。帰途の行進は乱れた。帰営後直ちに「貴様らはたるんでいる。それでも帝国軍人か。今から気合を入れる」練兵場の駆け足が続いた。夕刻馬の世話一切が終り、夕食後の学習時間もうつろな気分ですべて終始した。連日鳴り響いた空襲警報はやはり鳴らなかつた。「戦争は確かに終わったんだ」ホツとした気分ですべて翌日まで寝りこけた。

翌日から演習は中止。兵器類は全

て返還。書籍、書類等は次々と焼却、暗闇（やみ）の火の粉に「魂が飛んで行くようだ」の声なきこえてくる。

感傷的気合が入隊以来初めて体に流れる。大事に手入れしてきた馬が民間に払い下げられて行く。心なしか悲しげな嘶（いなな）きが見送る我々の心をえぐる。「あの馬たちはどうなるんだろうか」「俺たちはこれからどうなるのか」「何処かへ連行されるのだろうか」「いや帰郷できる筈だ」：依然上層部からの伝達は何も無い。不安の連日である。幹部将校が自決したとの報が飛ぶ。真相は不明のままだ。私はこのすこし前、右足首を痛め治療を受けていた。ある日治療室で軍医が、「貴様の病気は長びく。軍隊で治療する時間はない。地方（軍隊以外は全て地方と呼んでいた）へ帰つたら気長に治せ」。

この一声で帰郷出来る事が明らかになつた。

別れに際し、野砲校で夫々名簿を残す事になった。母親の名を連れ、我々の氏名は保護者欄に記載、小隊長の姓を頭に〇〇高等女学校名簿とした。後日再動員の際の連絡のよすがにするとする。この段階でまだ稚気にも劣る愚考に、怒りを通り越し苦笑を禁じ得なかつた。

九月上旬に除隊、復員列車で西下。貨物車であつたが誰からも文句が出なかつたのは幸であつた。後日海外からの引揚船の惨状をきくに付け、見るにつけ、文句を言へば罰があたると言うものだ。

復員後復学手続きに登校。無事帰還を歓迎合う一方戦没者の報、生死不明の友のニュースも伝わり、悲喜交々の中、復学手続きをとる。ここ

でトラブル発生。出陣帰還の早い遅いで繰り上げ卒業、留年する者の開きが発生、大混乱となった。そして他方では学校武道の廃止問題である。特攻精神、玉碎精神は全て学校武道の教育に端を発するものとされ、アメリカの占領政策として、剣道、柔道が廃止されるに至ったのである。中学、大学と一貫して剣道に取り組んできた私共剣道部員は途方に暮れた。これも戦争体験の一つである。

年が改まると戦後五十年の大きな節目を迎える。戦争は二度と再び起こしてはならない。この面から戦争体験記が募集された。大いに結構である。しかしその前に、この戦いの真の姿を正しく認識し、正しく後世に伝えて行かなければならぬ。

一九九四年（平6）十二月

一九二四年（大13）生満七十歳



戦争体験

高野 富美子

昭和五年、私は朝鮮の京城（現在のソウル）で生まれました。現在も海外進出は目覚ましいものですが、当時は日本も海外に植民地を多く持っていたようです。

父は国鉄の食堂車勤務のコックだったのです。支那や満州の方まで日本の国鉄は走っていたのです。その頃は、官舎に住み、寮の管理、賄いをしたりで、父も母も忙しく働き、大陸の広々とした空気の中で育ちました。

当時、京城は朝鮮の中心地だったので、アメリカ、イギリス、中国、満州などあらゆる国の人たちが住ん

でいました。やはり日本人がいちばん強く、私たちも日本人学校に通い、校門を入ると、まず奉安殿に最敬礼して通学したものでした。

だんだん戦時色が濃くなってきました、日本陸軍の兵隊の横暴が目に見えるものになってきました。人の命を何と思っていたのでしょうか。昔も今も、命を何とも思わず捨てる人も多くいますが、当時も変わりなく、尊く若い生命を射殺したり、処刑したり、むごい傾向が多くあったようです。

日本国内でも食料は不足し、女性には軍人や軍属の慰めものとして扱わ

れるようになったのです。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争へ突入。今まで、幸せに暮らしていた私たちはどうすればいいのか戸惑いました。仲良くしていた友人、知人と別れ別れになり、それぞれ日本国内に帰ることになったのです。家や土地を持っていた人はそれぞれ未練もあり、そのままとどまつたり、いろいろな人生だったと思います。私は、何も持っていなかった両親とともに帰国することができ、戦争孤児にならずにすみました。

着の身着のまま、関釜連絡船に乗り、生まれて初めて日本本土の汽車の旅をしました。大きな大陸で育った私の第一印象は、何とせせこましい国だと感じました。そして父の仕事の關係上、東京に住むことになり、弟と両親の四人家族での生活が始ま

りました。

東京も次第に食料難になり、当時、国民学校五年生だった私は運動場を畑にし、さつまいもを植えたり、菜っ葉をつくったり、勉強どころではありません。兵隊さんに慰問袋をつくり、街角に立って千人針を頼んだり、銃後の婦人、子どもたちは「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、とにかく天皇陛下に命を捧げて頑張りました。

日本軍も初めは、連戦連勝で「大日本帝国陸海軍は……」というラジオ放送を楽しみに頑張ったものです。しかし、ノートが無い、鉛筆も無い、ズック靴はすり切れたものを履きました。母親の着物を縫い直してモンペ、防空頭巾、救急袋に、また、母の着物は物々交換で食料に替わるありさまです。何もかも、配給でしか

手に入りません。

昭和十八年だったと思います。東京でも疎開が始まりました。ようやく東京での生活にも慣れ、私が女学校に入学した年、我が家も疎開しなければならなくなり、母方の叔父のいる広島へ行くことになったのです。

東京と違い瀬戸内海の見えるよい所だからと、父も東京の仕事を退職して、叔父に準備してもらって着いた所は、南観音町の三菱造船所の社宅でした。そして私は、千田町の山中高等女学校に転校できました。

せっかく女学校に転校できたのに、英語はダメ、ドレミはダメという東京の女学校に通っていたため、本当に苦労しました。しかし、ゆっくり勉強どころではなくなり、やがて学徒動員です。

兵器廠、被服廠、食品廠、専売局

などに行きました。兵隊さんのボロボロになった軍服の修繕や兵器の修理です。私たちの場合、配給のたばこや食糧も、兵隊にはどんだん立派な物を送っていました。戦争に勝つためですから。

いよいよ戦局は厳しくなり、本土決戦のため、女性の私たちにも防空演習やなぎなたの訓練がありました。食べ物もろくに無い時代によく生きていたものだ、今では懐かしく思い出されます。気力で生きていたのでしよう。

昭和二十年八月六日、月曜日、朝から太陽が照りつける暑い日でした。弟も学童疎開から帰っており、私も何だかその日は出かける気にならず、休むつもりだったのです。午前八時十五分、何か強い光りにびっ

くりし、次に轟音（ごうおん）と爆風。母が押入れから布団を出して、三人でかぶりました。おかげで、何のケガもなく爆風の被害だけで助かりました。

爆心地から逃れてきた人たちの姿を見て、原爆の恐ろしさ、戦争が地獄であることを知りました。原爆の詳しい状況は省略しますが、学校も焼け、友人も死に、一瞬にして市街地を地獄にした核爆弾を許すことはできません。まぶたの奥に焼き付いた、この世の地獄を忘れることはできません。

戦争さえおきなければ、私の人生も変っていたと思うのです。これが運命というものでしょう。



戦争体験記

高橋民夫

私は現在、八十歳。第二次世界大戦を経験致しました。

皆さん、戦争は最終的に人と人の殺し合いです。平和な時に殺人がおきますと大変な事になります。戦争になりますと一番困る事は食料、衣類です。国内で働き盛りの男子は軍隊へ、女子は挺身隊日本赤十字社従軍看護婦として戦地に行きます。家族とも別れ、親友とも別れ、命の保障はありません。沖縄県では女学生も従軍し、ひめゆりの塔は従軍された若き乙女の墓です。戦争は大変悲しい出来事です。沖縄県の子どもたちは船で父母のもとをはなれ日本本

土に逃れる途中、アメリカ軍により轟沈（ごうちん）され、多くの命は海のも草となつた悲しい出来事もありました。

大阪で焼けた区を紹介いたします。天王寺区、浪速区、西区、南区、東区、大正区、港区、八十%位焼け、見るも無残な街になりました。私たちは焼けあとの整理ですが、何分初めての出来事ですので、ごく一部位しか出来ず煙りや火に巻かれて多くの方々が死にました。この所はその後爆撃され二回死体の収容と整理、主に道路ですがこれまた被害が大きいので充分な奉仕が出来ず皆た

だぼう然として（この場所は大正築港です）言葉が出ないぐらい無残な被害を被りました。三月十三日夜明け頃から翌朝までB-29という爆撃機約二百機位来ました。当時上空一万メートル位から焼夷弾という爆発物を落します。これは無数です。今のプラスチック材と思いますが長さ三十七センチメートルに経六角で十七センチメートル位の口から花火の様な火を吹き、当時の家屋は木造で先づ障子、唐紙に火が移り簡単に燃えます。

B-29はサイパンから飛んで来るとの事です。話は後になりましたが警防団という団体が出来、平素は当務と言つて受持地区各町会内を、昼夜通しで巡回し警察の仕事をしました。戦争は六月頃には負け戦になりました。毎日という位日本のどこか

で空襲があり、家は焼け多大の被害を被っております。昼は艦載機が地上すれすれに飛んできて無差別空襲です。これは紀州沖から航空母艦で発着いたしたとの事です。

六月の半だと思いますが、大阪都島地区が再び空襲です。私達警防団は関係のある警察からの指令で情操という名の下に朝早く現地に行きました。

都島片町の駅近くに「藤田」と言う大きな家附近一帯が私達警備防団の受持地区です。私達は防空壕から死体の収容を始めました。中で記憶に残るのは、三十歳位の女性の方がモンペイをはいて二歳位の子どもを抱き締めて煙りに巻かれて死んでいました。本当に悲しい思いです。この死体を班員の方々と共に焼跡との都島警察の焼跡まで運びました。人の

死体は重いです。その頃になりますと警防団員の集合は少なくなりまして。皆軍隊兵隊に行ったからです。

防空壕は当時大阪全市各隣組一単位で作ったものです。

当時一単位十軒世帯です。

空襲を受けた地区は屋根瓦だけがちらばり見るも哀れな町の眺めです。私達作業中に敵機が偵察に飛んできます。市電は止まり電気はつきません。なんとも言い表す事が出来ません。八日、十四日の昼は主に爆弾でした。現在の大阪城公園京橋が爆撃に合い、ここでも土に埋められ多くの方々が亡くなりました。この地には陸軍の兵器工場があった所です。翌日の十五日、同じく警防団が出勤して清掃と言うよりどこから手をつけて良いかわからない様な事です。午前中の休憩中に天皇さんから

終戦の言葉がラジオで放送され私達は重い足をひきずり警察署にたどりつき、ここで腰をぬかした様な気がいたしました。

(文の中に警防団と書いてありますのは当時警察消防署のもとで働いた天皇の勅令団体)

昭和二十年八月六日広島、八月九日長崎にアメリカ軍の原子爆弾が落とされました。私は原水禁世界大会に長崎に行きました。ここでも涙あつたな事がありました。各被爆地の三堂様の世話人も皆涙ながらに、どうぞ拜んで下さいと言われます。長崎大会の時、一人の婦人が立ちながら我々に訴えました。戦争しないほしいと言うことです。町内には所々、み霊さまを祭られた小さな御堂が建てられ、私達は線香、ろうそく、供花をお供させてもらいました。心か

らの呼び掛けを聞く事が出来ました。

広島原爆は落とされた日、翌日位まではなんの爆弾かわかりませんでした。ただ大変恐ろしい爆弾と言われ、想像も出来ない思いを全国民はした事と思います。

現在政府の方々、特に社会福祉関係の方々、年々老人がふえ消費税と言う悪税で目先をかえよとしております。老人は戦争の生き残りです。現在、日本中の議員と名のつく方々も近いうちに老人になります。私が高齢にするのではありません。自然神様の節理です。その時にその方々も悪税をきつと悲しみます。一日も早く戦争と言う言葉がこの世界から無くなる様皆努力しなければなりません。戦争に現在老人（当時青年）が生き残りました事をおぼえて下さ

い。そして今日の日本がある事です。私達老人が生きているから、日本の現在があります。日本の将来は平和な経済大国として繁栄して残す事、それは若き日の現老人が居ると言う事をわすれてはなりません。これはいわゆる我々が子孫に伝える大事な任命です。それと戦争と言う言葉が此の世から聞なくてすむ国になる事を望みます。言い伝えます。そして福祉行政の行き届いた国でありたい。

交野市星田の駅から北へ千メートル位と思いますが線路側西に現在美しい鎮魂碑が建っております。

この碑は昭和二十年七月九日、交野山の方で空中戦が始まり、アメリカ軍機（グラマン）と空中戦をし、武運つたなくこの地で戦死された青年将校のために建てられたものです。勝までは欲しがりません。食料

物にたいするスローガンです。後、一億玉碎と言うスローガンが流行しました。今頃は日本国民が一人もいなくなると言う実になしスローガンがあつた事を付け加え戦争をした事です。

私の被爆体験記

武田邦雄

昭和十五年四月一日、石川県金沢市の第九師団輜重（しじゅう）兵第九連隊第三中隊（自動車中隊）の四班に入営しました。

同年六月に一期の検閲を終わり、戦友とともに広島市の宇品港をあとにして、待望の中国大陸の上海に到着しました。それからが大変でした。第二十一兵站（へいたん）自動車隊に転属になり、七月に編成替えがあり、華中派遣軍の自動車第二十九連隊材料廠（しょう）に編入になり、幾多の作戦に参加しました。

十七年二月、技術下士官に任官して一個隊の修理班長となり、連隊の

参加作戦に従い華中の各地を転々として武器の整備をしておりました。

二十年六月一日、突然命令があり、本土防衛のため広島市の宇品港にある陸軍船舶隊本部にわれわれ戦友四人が転属になり、早急に出発せよとのことでありました。六月三日、上海を後にして列車で南京、華北、韓国、ソウルを経由し、六月六日に広島市の陸軍船舶本部に無事到着しました。

ただちに向かい側の金輪島の船舶修理部に行くよう命ぜられ、小型船舶に乗り、戦友と日本本土は大変な状況になっていると話しながら、約

五十分の乗船で目的地に到着しました。

私は第三中隊付になり、ほかの三人の戦友は第一中隊、第四中隊、第五中隊とばらばらになり、翌日から連日、地下の工場で船舶の修理と部品の製作をしていました。この工場にも若い女子挺身（ていしん）隊員として学生さんがたくさん勤務しておりました。

内地勤務になり二カ月がすぎ、大分仕事のことも分かってきたと思う暇もなく、八月六日早朝、空襲警報のサイレンが鳴り、すぐに警報解除になり、居室で休憩していると、広島市の街の方向から地響きのように大きな爆音が聞こえると同時に、窓ガラス戸が表に吹き飛んでしまいました。

びっくりして表に飛び出すと、広

島市の兵器廠あたりに真つ黄色い大きな雲がモクモクと大きくなって上がっており、何か兵器廠で爆弾が破裂したのではと付近の兵隊と話し合っていました。

午前十時ごろ、広島市内に敵の特殊爆弾が落とされて街中が大変なことになっているので、ただちに出動せよ、との命令があり、われわれは小船に分乗して宇品港に向かい、午前十一時に到着しました。建物は全部破壊されており、その中をわれわれ小隊は広島市内の中心部に向かって前進しました。

その途中、破壊された家の中から小さな子どもの声で「兵隊さん！助けてちょうだい」と言っていたのが、今でも耳の底に残っているような感じがします。

午後零時四十分ごろ、小隊は目的

地に到着。それからが大変でした。

八月十三日まで、この地で野宿をしながら、まず八月六日は、街の中で重傷で苦しんでいる人を救出するのが第一の任務でした。あまりにも悲惨な状況でした。頭が割れてザクロのようになった人、双眼鏡のように眼球が飛び出している人などが、たくさん救いを求めており、どの人から救ってよいか分からないくらいでした。

街中の建物は全部というほど破壊され、一部では火災を起こし大火事になっていました。消火するにも、水もなければ、通る道路もないという惨状です。

まず、生きている人を優先して救出作業を進めました。付近の神社やお寺の広場、また、川の中、橋のたもとに大けがをした人が救いを求め

て集まっております、これが本当の生き地獄だと思いました。

人間は死の寸前でも、自分が死ぬと分かっている人も、他人より長く生きていたいと思うのでしょうか。全員が一斉に「自分の方を早く助けてくれ」と口々に叫んでおられた声が、今も耳元に残っています。

八月七日の朝は、真夏ではあるが午前三時半ごろからぼつぼつ明るくなりました。われわれも昨夜は救出作業のため一睡もせず、本当に目の回るような忙しさでした。その場で死んで行く人、救出されて担架で運ばれる人で入り乱れていました。死亡した人は、われわれが野宿している後ろに、ひとまず山のように積み重ねてありました。

街のあちこちでは、一命を取り止めた人が、丸裸に炭俵のような物を

身に巻きつけ、自暴自棄になったようにさまよい歩く姿も見られました。

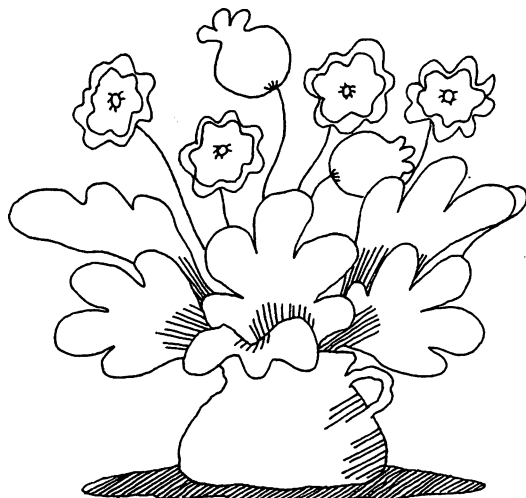
八月十三日までの間、毎日の昼間の作業は集めてある死体を一体ずつ調べ、名札のある人については住所、氏名、年齢を帳簿に記入し、氏名の分からない人は所持品や推定年齢を記入して、一人ずつ火葬に付して遺骨箱に入れました。また、付近の破壊した建物の整理をしながら死体の搜索もしました。

夜間の作業は、光と煙を出すと敵の空襲の目標になるため、午後五時をすぎると、けが人や遺体を収容していました。

本当にこれだけ大きな被害を出したのは、アメリカが造った新型原子爆弾が初めてで、広島市に試験的に投下したものでした。

私も、原爆が投下された時に現地にいて被爆しています。

多くの犠牲になられた方のことを思うと、今でも胸が痛みます。心からご冥福をお祈りするとともに、あのように悲惨な生き地獄のようなことが二度と起こらないよう、われわれ被爆者は世界中の人々に、また自分の子孫にも生きた教訓として言い伝えていきたいと思い、つたない文ではありますが、一筆書かせてもらいました。



あの日を繰り返さないで

樽 床 静 子

運命の日八月六日、私は二十八歳、額に白鉢巻、もんぺ姿で被服廠（しように）の下請工場である。軍服の縫

製工場で働いていた。午前八時過ぎ、窓の外が一面に白くピカッと光った途端に工場の天井がドサツと落ちてきた。動力ミシンの騒音で音は判らなかつた。一瞬私は爆弾が工場に落ちたと思つた。大きな戸棚の前にいたので、天井の梁（はり）の直撃はまぬがれたが、外に出ることが出来ない。僅かな隙間を見つけて壊れた窓枠の金網を広げてくぐり抜けようと頑張つた。早く出ねば火が廻つて焼死する。手はガラスの破片で血だ

らけ、その時誰か外から引張り出してくれた。札を言おうと立上つたがその人は急いで走つた。

私も人の後に続いて走り出した。その道も、ガラスや瓦礫（がれき）、血の滴りで生々しい。皆、頭や手足から血を吹出しながら逃げる。比治山に軍隊が掘つた大きな地下壕があつた。その前で比較的けがの軽い人達が、助け合つて手当を始めた。ま

集まる負傷者をどうすることも出来ない。その時空襲と言う声に慌てて穴に飛び込む。中は人で一杯。

傷の痛みを訴える声、水を求める重傷者、子ども。別れ別れになつた肉親の安否を気遣つて泣き叫ぶ声、悲鳴に近い悲痛な叫びはこの世の生地獄だ。あまりのことに死を覚悟で外に出た。空地や広い道路の両側に重傷で歩けない人や、死んだ人の遺体が運び出され並んでいる。市街地は方々から火が出て煙がもうもうと上がっている。どこにも行けない。また壕の中。六日午前十時頃から七日午前三時頃まで、十七時間あまり座り続け、ぎつしり詰めでお尻の下は地下水でびっしり濡れている。燈一つない壕の中は真つ暗闇（やみ）。少しあたりが静かになつた。心身共に疲れ切つたのだろう。痛み

のうめき声と水を求める声は絶えない。外に出たら天を焦がす様な煙と炎が悪臭と共に凄い。呆然として悪い夢を見ている様。昨日の朝から何も食べていないが、空腹は感じない。夏の夜は明けた。茄子畑の中で蚊にさされた。負傷者の体も服も血がこびり付いたまま黒ずんでいる。

薄いワンピースが破れて半裸体の娘さん。着る物もない身寄りのない幼児等、顔も体も汚れて真っ黒。放心した様な表情であまり口をきく元気もないらしい。人のことより今の自分をどうすれば良いのか、行くあての無い者、歩く元気も失った人々。気の毒だけどう仕様もない。私も坐ってばかりはいられぬ。時々アメリカ軍の飛行機が低空で来る。悔しいけれど見守るだけで焼野原に座ったまま。十時頃救援物資の乾パンを一袋

もらって、洩れる水道の水を飲んで少し落つく。早く市内脱出をしなければ、また日が暮れると歩き始めた。

八月の日盛り、焼け跡の残り火のほてりで焼けつく様だ。途中の防空壕、防火水槽、川の流れなどに死んだ人がごろごろしている。地獄図絵の道を夕方芸備線の戸坂駅に着いた。その汽車も被災者で車輛の屋根の上まで満員。車内はすし詰で焼けた体の部分は大きく膨れ上り、さけた傷口は膿が湧いてぼろぼろ蛆（うじ）が落ちていた。汗と油と血と膿のすえた様な臭を忘れることが出来ない。まして自分の体に受けた傷の痛みと心の痛手は何十年経た今も消え去りません。こんな事は二度とあってはならない。体験者の私達は核反対を強く叫び続ける。悲願達成の日まで。

ドームは語る

暑い陽差のドームの下を
黙して通る人の群

何を期するか祈るのか

判って欲しい平和への道

自分もその群にいる

黒い自分の影を見つめる

囁の中から聞える叫びを

心はじっと聞いている

やはりドームは何かを語る

被爆者に取りべき道を

俳句

夏草の繁みに悲願の鐘響く

真夏日に彼の日のようにカンナ咲く

原爆忌テレビで参加我も老ゆ

短歌

原爆と知らずに逝きし友偲び

想は遙けき広島島の空

戦争体験記

広畑花世

▽戦火は足もとまで

大東亜（太平洋）戦争は、ますます熾烈（しれつ）になりました。内地から満州へ来られる人が多くなりました。しかし、内地へは帰れないと聞かされ不思議でした。急に、満州人の古着買が増えてきたのも不思議でした。昭和二十年八月七日、日ソ不可侵条約を一方的に破棄してソ連が宣戦を布告してきました。

状況でした。預金を引き出そうと思って行つてみれば、郵便局も、銀行も閉鎖されておろり、がっかりして帰り、悔しい思いをしました。数え年十二歳の長女、十歳の長男、七歳の次男、三歳の次女、一歳の三男の五人の子どもを連れて途方に暮れました。警察、軍人、満鉄（満州鉄道）の家族は、毎日、避難列車で疎開して行き、一般人だけが取り残されてしまいました。まだ、主人の行き先の連絡もありません。社員や家族の方々が次々と

頼って来られますが、私自身、何の方針も立ちません。子どもたちと死を覚悟しましたら、案外気持ちは落ち着いて、疎開して行かれる方たちのおにぎり弁当を作つては送り出していました。

国境から牡丹江までの距離はわずかです。空襲警報の鳴った時には、もう爆弾が落ちています。初めはパラパラとして、きれいだなど眺めていると、爆弾と分かりびっくりしました。

そんな中、八月十二日、ソ連の戦車が轟音（ごうおん）を立てて侵攻して来ました。生きた心地もなく途方に暮れていた時、主人が「解散」になつて帰つて来ました。

聞けば武器もなく、小学校に待機させられていたとか。主人は早速、社員と現地で召集された社員の家族

など（全員で七十人）を引き連れての避難行を決めました。牡丹江からの列車はもうありません。

牧場と乳製品の工場がある海林（ハイリン）の工場まで行くことに決めました。（荷物はまとめて会社に置いたままです）

主人は一行を送り出し、残務整理のために会社に残り、私たちは、三歳の次女を背負い、一歳の三男を抱いて、胃潰瘍でやっとおかゆ食になつたばかりの長男の足を気遣いながら、昼ごろに出発しました。

途中、開拓団の女性たちに出会いました。奥地から牡丹江へ出るまでに頭は丸坊主にされ、衣服をはぎ取られて、アンペラ（ゴザの一種）一枚を身体に巻いただけの気の毒な姿でした。男性も子どもも見当たりませんでした。

広い道一杯、避難民の列で埋め尽くされています。

上空には真つ黒い飛行機が、轟音を響かせながら低空で旋回しています。まるで映画の一シーンのように思えました。日本兵は一人も見かけませんでした。白系ロシアの騎馬兵多数に守られながら、人波に押されて歩いていました。見兼ねたのか、どこからか馬車を調達してきて、私たちを乗せてくれました。

夜八時ごろ、やっどハイリン到着。主人は先に到着していて安心しました。ハイリンの社員三人と、その家族十三人が待っていて下さいました。

早速、ご厚意のおにぎりを頂いてホッとする間もなく「これが最後の避難列車ですよ」と、せかさされて全員貨車に乗り込み、吉林（キツリン）

へ向かうことになりました。

朝からの緊張と過労から主人が卒倒、しばらくして意識を回復し、安心しました。

食糧はもちろん、手荷物も途中で一つ、また一つと捨てて、何もありません。ハイリンで頂いた毛布は、雨のためビショビショで、重いので捨ててしまいました。

列車の両側は、火を放って逃げたとかで、火の海でした。興奮したのか、発作的に赤ん坊を火の中に投げ捨てる母親も次々いて、地獄さながらでした。

飲まず食わずで貨物列車に揺られ、途中で日本の「敗戦」を知らされて驚きました。主人はやむなくハルピンの工場まで引き返すことを決意して皆に告げました。

▽ああ敗戦！

ちょうどハルピン駅では、ソ連に抑留されて行く日本兵の長い長い貨車が入っていました。

赤紙一枚で召集され、「お国のため」の合言葉で戦ってきた人たちです。武装解除された兵隊さんは、てんでに財布、米など持ち物を皆、投げ捨てていました。

「皆さん、みんな持って行って下さい。元気で内地に帰って下さいよ。自分たちはソ連に連行されて行きます」と口々に絶叫していました。

欲しいものは、誰も同じです。しかし、ぼう然として、見つめたまま、誰も拾いに行く人はいませんでした。

貨車が走り去って、やっと我れに帰り、拾いに行くありさまでした。私たちも、お米を五升（約九リットル）分ありがたく頂き、貨車の後ろ

姿を見送っていました。

ハルピンの工場までの道を八十三人が、主人の先導で出かけることになりました。十二日に牡丹江を出て、何も食わず、飲まずですから、やつとの思いで足を運んでいました。十六日まで、飲まず食わずです。工場の入口で一人の中国人に出会いました。

「シーサン、広畑さん」と声をかけられました。主人は神戸在学中（旧神戸高等商業学校）に一人の留学生と知り合ったそうです。その留学生と二十数年ぶりの再会だったのですが、主人の方はすっかり忘れていました。

「シーサン、神戸でお世話になった〇〇ですよ」と、声をかけられました。あの戦争のさ中、まったく奇跡の出会いでした。

「あのお礼をさせてもらいます」と、その日から八十三人の食糧を、わが身も顧みず、大八車で運んでくれました。

久し振りの豪華な食事でした。

コーリヤン、野菜など、大人は食べられますが、三歳の次女ののどを通りません。私の乳も出なくなりました。次女が「ごはん、ごはん」と欲しがっても、ハルピン駅で頂いたお米も、八十三人の胃袋に入ってしまったて、水ばかり飲んで一か月をすごしました。次女は、八月十二日に牡丹江を出てから、飢餓の末に短い生涯を九月十二日に終わりました。

苦しい息の下でも、「悟郎は、悟郎は」と一歳の弟の心配をしながらの永眠でした。主人は、苦しそうに「自分の子どもが一番に死んでよかった」とポツリと言っていました。

工場の外は、「ハルピン駅から逃亡した日本兵がいる」との情報で「日本兵狩り」が強行されていて、一步も外へ出られません。お葬式も、埋葬も出来ません。お経が出来る方に枕経を読んで頂き、中国人に頼んで連れて行ってもらったのです。

毎日、ソ連兵が銃を構えて押し入ってきます。みんなの時計は、兵隊の両腕にぐるぐると巻かれています。万年筆は、初めて見るのか、恐る恐る指で転がしては眺めています。

「爆弾と間違えているのかしら」とか「囚人部隊かしら」などと話題を提供してくれました。

男の人は、パンツの中まで調べられました。女、子どもには手を出しません。が、おしめカバーの中に日本円札を縫い込んでいました。

▽避難生活

私たち家族は、二畳の部屋に親子七人、足と頭を互い違いに寝ていました。次女を失って六人になりましたが……。ほかの人たちは、板敷きの部屋に雑魚寝をしていました。

工場の敷地内には寮があり、衣類や布団類もそのままになっていました。布団類を皆で頂いて薄い敷布団を作り、掛け布団の綿で冬の綿入れを作りました。冬の準備もしなければ、八月に着て出た夏物一枚で、心細いものでした。

十一月になり、お世話して下さいいた中国人が（日本人の世話をしている）と通報されて、銃殺されてしまいました。食糧の道も絶たれてしまい、不安は募るばかりでした。急にソ連兵が入って来て、私たちは身体検査をされました。主人は、

慣れぬ土地のため地図を持っていたのを、スパイと間違われ、軽機関銃を構えたソ連兵に前後左右を取り囲まれて、連れて行かれました。

皆、生きた心地もなく、途方に暮れてしまいました。来るべき時が来たと思っても、手のほどこしようもありません。男の人は六人だけで、地理にも不案内でオロオロされるだけです。不安で眠れません。

ところが夜中の二時ごろに主人が、ひよっこり帰って来ました。

「銃殺の前に『小便をさせて欲しい』と頼んで外に出たところへ、日本語の分かる中国人が通りかかり、事情を話して通訳してもらい、釈放された」とのことでした。

食糧の道も絶たれ、逃げた日本兵を追って毎日「日本兵狩り」が激しくなる一方でした。このまま冬を迎

えるのも恐ろしく、相談の結果、新京の工場を頼りに出発することに決まりました。

危険を犯して、主人が連絡を取りに出かけました。ひとまず、避難民と行動をとものにさせて頂くことを決めて戻ってきました。

避難列車を待つ間、小学校に集合することになりました。

それぞれの教室には、大勢の人々が何列もきちんと仰向けになって休んでおられます。「行儀よく休んでおられる」とつぶやいたところ「皆、死人ですよ」と言われて驚き、牡丹江で出会った開拓団の方たちの姿が浮かびました。いつあんな姿になるのかと、恐ろしくなり、子どもたちには見せないように気を遣いました。

▽新京へ

いよいよ出発の合図がありました。平素は石炭を運ぶ無蓋車（むがいしゃ）がほとんどです。順番に並んで乗るので、注文や文句はつけられません。私たちの貨車は、輸送指揮官と一緒に屋根のある箱型の貨車で安心しました。

輸送指揮官から「密閉して全員窒息死しないように、扉は五分くらい開けておくこと。また、銃身を突っ込まれて乱射されないように」と細かい注意がありました。みんな指揮官の指示に従うことを誓いました。ここもまた、ぎゅーぎゅー詰めで、用便の始末をどうしたかも覚えていません。

途中、何度も何度も匪賊（ひぞく）の襲撃があり、その度に列車が停められ、指揮官の言った意味がよく分かりました。銃身を突っ込もうとし

ます。「扉は五分以上開けないように」と言った意味もよく分かりました。何日乗ったのか覚えていません。銃声が絶え間なく聞こえています。やっと新京に到着です。

無蓋車の男性たちは縛られ、婦人たちは目の前で乱暴されたのだと、新京に着いてから知らされ、被害のひどさを見せつけられました。

十一月の中ごろはもう寒さが厳しく、工場には寝泊まり出来ません。またまた工場近くの料理店の中国人の好意で、二階を提供してもらいました。無料です。電気、水道も使えます。手洗いが大変でした。用便はすぐに凍り、次々と柱のように延びていきます。ハンマーで手の届く限り打ち砕きますが、大人数なので毎日の仕事でした。

私たち六人は、奥の四畳半一間、

ほかの七十七人は三部屋に雑居です。その日から、主人の苦労がまた始まりました。男手はたった六人（二人死亡）。あとは女、子どもばかり。自分の金を出したくない人ばかりです。家族だけならどんなに楽か、と何度思ったかしれません。

責任感の強い主人は、毎日、慣れぬ土地で、あちこち金策に歩き、調達しては皆の食糧を確保してきました。

寒さは零下三十度を越し、着る物もありません。またまた中国人からもらった敷布団の綿を着物の間にに入れて冬の着物にし、薄くした敷布団の上に“メザシ”のように、頭と足を六つ並べて寝ます。かけ布団はありません。毛布が一枚あるだけ。

零下三十五度の極寒でも生きられるものです。朝、毛布の上は吐く息

で凍っています。牡丹江を出て一度も風呂に入っていないません。シラミは手でなでて落とすほどです。中国人は、衣服を石の上に置いて、石で叩くのが、朝の日課のようでした。

皆、発疹チフスにかかりました。私も発病し、気がつくとい枚しかない毛布をかけられています。慌てて三男にかけてやります。また：と同じことを繰り返して主人に叱られました。

「子どもはあきらめろ。母親は一人しかいないんだぞ」と（男の人はすごいナ）。うれしいよりも、腹が立ちました。（主人の気持ちも分からずに）

十二月末に、過労と発疹チフスで主人が倒れてしまいました。

皆さんは、やっと自分のお金で生活されるようになりました。今まで、

お世話した私たちには知らん顔です。私たちには、何にもありません。毎朝、八台くらいずつ、凍死した人の遺体か、衣服をはがされ“丸太”のように積み上げられ、捨てに行きます。（コダマ公園の池だと聞かされました）

長女が牡丹江で教えて頂いた担任の先生に出会い、問われるままに実情をお話したところ、「造花を作って売っているから一緒に作りましょう」と誘われ、その日から通うことになりました。初めはお粗末な物だったでしょうが、毎日三十円ずつ頂いてきました。

十円で封筒一杯のお米を買って、主人と三男の食糧にしました。あと十円で薪を、残り十円で塩などを買います。野菜などは、拾ってきます。オカラも食べないで捨ててあります。

す。豚の骨も捨ててあります。結構
どうにかなるものです。

そんな時、牡丹江でおにぎりを作
って送り出した一人に出会いまし
た。「今、兵隊さんの洗濯をしてい
るのよ。あなたもどうですか」と誘
われて行ってみました。洗濯は洗濯
でも「命の洗濯」と分かって戸惑い、
お断りして、その日から残飯を頂く
約束をしてもらいました。

また、西本願寺で難民の手続き方
法を教えて頂き、わずかですがお金
も頂けることになりました。
まだ、主人は熱が高く脳症を起こ
し、前後不覚の中でうわごとばかり
の毎日です。自分がどこにいるかも
分かりません。子どもたちのことも
分かりません。不思議と私だけが分
かるのです。夫婦とは不思議なもの
です。

数え年二歳の三男も、どうにか息
をしています。

頂いたお金も、すぐなくなります。
わずかな資金の活用法として、食糧
難時代なので「代用食品でも」と考
えつきました。

早速、キビとあずき、水あめを買
って来ました。鍋は金物の火鉢で代
用。薪ストーブに拾ってきた薪で、
まず、あずきとキビを炊き、一晚か
けておはぎを作りました。砂糖は高
いので、塩あめにして、上に水あめ
を塗って、一個百円で売りました。
入れ物ありません。机の引き出し
に入れ、ゲートルを首からかけて前
で持ちます。これが、飛ぶように売
れました。
売ったお金で、材料を仕入れては
作り、毎日疲れも忘れ、ありがたい
ことでした。

そのうちに少しずつ温かくなり、
食中毒を起こされては困るし、と考
えながら売り歩いていた時、一軒の
きびだんご屋さんに出会いました。

岡山出身なので懐かしく「卸もし
て頂けませんか」とお願いし、早速、
翌日から仕入れて売ることになりま
した。片道一里（約四キロメートル）
以上の道を、仕入れに行き、売り切
れては引き返します。何度も、何度
も仕入れては売り歩きました。やは
り、一個百円でした。

当時、三十六歳の私は、いつの間
にか「代用食のおばさん」と呼ばれ、
待っていて下さる人もいたほどで
す。

主人の病状は、ますます悪化して
きました。「四斗樽（だる）が壊れ
てビジョビショだ」と言う主人の言
葉に、見ると床ずれで背骨が出るほ

どになっています。薄い敷布団一枚で六人が寝て、身動きも出来ないのですから無理ありません。牧場の獣医に薬を買ってきてもらい、処置して頂きました。

体もはれてきて「あと二、三日でしよう」と言われても、どうにもなりません。

そんな時、家を間違えて日本人医師がひょっこり入って来ました。それも牡丹江で、長男が胃潰瘍にかかり、お世話になった日赤の医師でした。

これはこれと言う話から「大変ですね。どうして医師に診てもらわないのですか」と聞かれ、事情を話しました。背骨の出るほどの床ずれの治療法も教えて頂き、長女がお薬を頂いて来てくれました。

あと二、三日かと思っていた病氣

も、脳症の高熱も一週間で回復しました。

▽引き揚げ開始

半年の長い病氣にも、やっと笑顔が戻りました。

七月ごろから引き揚げの話もチラホラ聞こえてきます。もう、きびだんごも売れなくなりました。引き揚げ準備で皆さん、道中食のカンパンを注文してこられます。

ほつほつ、主人の歩行練習もさせなければなりません。二階からおりする練習、一段、一段がやっとなり半年も寝ていたのですから大変です。八月末にやっとなり外へ出られるまでになりました。

九月初め、いよいよ難民の「内地送還」の日程が知らされました。ほかの皆さんは「難民登録」を拒否さ

れていたもので、仕方ありません。私たち六人だけが帰ることになりました。

大病のあとですから、歩けるといっても、やっとなりヨチヨチ歩けるだけで、耳も聞こえません。

道中の食糧のカンパン、お弁当のお米を買いました。(それまでは国民軍の残飯をもらってきて、空き缶を食器にして食べていました。長い道中ですし、蓄えも出来たので思い切りました)

慌ただしい日がすぎ、当日になりました。腐らない用心に梅干しを入れて炊いた御飯を五日分おにぎりにして包み、いよいよ新京からコロ島へ出発です。

栄養失調でやせ細った三男を背負ったの出発でした。代用食を買って下さった方たちがビックリして「赤

ちゃんがおられたのですか」と声をかけられました。

何日も汽車に揺られ、病後の主人はヘトヘトになって、コロ島に到着しました。何日費やしたか忘れてしまいました。

声も出なくなり、骨と皮だけの三男を見て、乗船係の人に「この子は置いていって下さいよ。どうせ駄目なんだから。もう一人乗せられますからね」と言われたが「私たちの食糧、一人分減らしてもらっても結構ですから」と何度も頼んで、やっと了解してもらい、乗せてもらえました。生きている子どもを置いて行けるものですか。これが“敗戦”というものでしょうか。

何日、船に乗っていたのかも忘れてしまいました。やっと、佐世保に到着しました。検疫の人たちが入っ

て来て、検温器のようなもので肛門から便の検査です。三日間たった後、やっと私たちに許可が下りて下船しました。まだ、半数の方たちが残されていました。

あまりの感激に、主人は卒倒してしまいました。

上陸地点では、何列にも並んで座らされ、頭からDDTを真っ白になるまで振りかけられました。やっと頂いた食事は、麦飯にいのつるの入った雑炊。その、おいしかったこと、今でも忘れられません。

銀行預金通帳、郵便貯金通帳、簡易保険証書、生命保険証書などは、ハルピンで失って何もありません。

「上陸したら一人千円もらえる」と船の中でうわさされていましたが、実際は一銭も頂けませんでしたが、わずかに日本円をおしめカバーに縫

い込んでいましたので、新田と換えでもらいました。のちに生命保険は、調べて解約して頂きました。そのほかのものは駄目でした。

▽再スタート

昭和二十九年九月二十九日、私たちの再出発の日です。

息子の出世を夢見ていた両親の元へ、ポロポロの服を着て、空き缶をぶら下げて帰ったのですから、両親の驚き、嘆きは大変だったと思います。

主人は、早速、会社へ報告。学校の手続きも必要です。長女はもう一度六年生に、長男も四年生に編入、次男は遅ればせながら一年生に編入させて頂きました。三男は、衰弱が激しいものの、御飯を喜んで食べていました。

過去一年間の習慣で、一組ずつの

布団に寝かせても、朝目覚めてみると、やはり一つの布団に、頭と足を互い違いに寝ているのです。

また、雷が大変でした。「戦車が来た！」と言って、三人で押し入れに逃げ込むのです。恐ろしかった記憶が消えないのでしょうか。当分続きました。

逃げ歩いた一年間は、お風呂にも入っていません。お風呂で、三男が少し太ったと思います。片方が、片方の腕は細いのです。片方が太く、はれているのだと分かって驚きました。無医村で、医者がいまません。

無一文で帰ったのですから、姑（しゅうとめ）に嫌みを言われても我慢しなければ仕方ありません。持って行き場のない怒りを私たちにぶつけているのだと思って、耐えまし

た。明日も分からない三男を、寝かせて看病してやることも出来ません。背負ってのお百姓仕事です。

十二月八日、満一歳ちよつとの短い命を閉じました。栄養失調でますます声も出なくなっていたので、次女も三男も寿命と思わなければ：と、自分自身に思い込ませるようにしていました。弟思いの次女と、せめてあの世とやらで仲良く暮らして欲しいなどと、複雑な思いでした。主人は「満州のものは、皆失ってしまった」とポツリと言っていました。

主人の体調も、まだ今一つという時に会社からの通知が入り、東京への復職が決まりました。舅（しゅうと）に作って頂いた背広一着が「全財産」で、一人東京へ出発しました。

私は幼い時、母の実家で習い覚えた表わらの内職が役立ち、私たちの収入源になりました。子どもの教育費、衣料費、食費の全てに役立ちました。

朝は四時に起きて内職。子どもたちを送り出してからは、お百姓仕事の毎日です。究極に立つと涙は出ません。長女が「母さんはいつ寝るの」と聞いていました。

履物のわら草履作りも覚えまして。作り方が下手なので、一日で破れてしまいます。靴下も「スフ」ですぐ破れて、毎日、繕いばかりです。義父母のところへ大勢帰ったので、すから、食糧もありません。村中のカボチャを買ってきてくれました。「家の嫁は、何でも食べるから困る」と、こぼしていたそうです。皆が出かけた後で、二人で白米を食べ

ておられるのも知っていました。が、「お気の毒だな」と見て見ない振りをしていました。

「奇跡、奇跡」で帰れたのが不思議に思えてなりません。「先祖の信仰の力が奇跡となり、偶然となつて危険から救われたのかも知れない」と思うようになりました。本当に、帰れたことが不思議でした。

四年生の長男が村の付き合いから、農作業、もちまきまで、一手に引き受けてくれました。主人からの仕送りは、もちろん無理な話です。自分の身の回りの物を整えるだけでも大変だつたと思います。主人の体のことも心配ですが、私は行くことも出来ません。

そのころから、姑の目が緑内障で見えなくなり、耳も聞こえない、足も昔の捻挫（ねんざ）が再発したの

か、歩けないという三重苦の生活になりました。

女の「性」の悲しさか。恥ずかしさだけが残っていて、大小便が出ても隠すので大変でした。お百姓仕事で疲れて帰つても、お湯を沸かして手足を拭き、布団を拭き、畳を拭いてから、お昼の食事の支度です。ガスもなく、水道もなく、洗濯機もなく、川で洗濯です。

どうしたら、この姑のお世話ができるのか必死でした。朝はやはり四時に起きていました。

苦労を考えるより、子どもたちの成長だけが楽しみでした。でも、時には「もう嫌！」とボンヤリすることも度々ありました。

そんな時に「母さんも老人になるんだよね」と言われてハツとし、子どもの声は「天の声」と反省させら

れました。

「靖国神社で再会しよう」と散華せられた英霊たちの御魂に…、そして血塗られた軍靴の上に築かれた今日の繁栄であることを忘れてはなりません。

英霊たちのご冥福を心からお祈りいたします。

感謝 合掌

悲惨な体験

古澤 早百合

私は、昭和十八年四月、大阪城内の大阪陸軍兵器補給廠（しょう）にお国のためと就職しました。第二次

世界大戦は日本が勝つと洗脳され、神風とやらが吹くと固く信じて疑いませんでした。昨今、騒ぎとなっているマインドコントロールの恐ろしさを体験していたのです。

当時は、最近の通勤と違い朝霜を踏みしめ、霜焼けに苦しみながら、防空頭巾（ずきん）にモンペ姿です。モンペのひもに毛糸でつくった藁（わら）人形の形をした身代わり人形とやらを母につけてもらい、大豆を炒ったものを一握り持って、生死

の保障も全く無い状態で家を出て通勤していました。「欲しがりません勝つまでは」の標語を念頭に耐え忍び、空襲警報が発令され鉄道が止まると鴻池新田から大阪城まで歩け、歩けです。途中で馬車に会って、親切なおじさんに乗せてもらったこともありました。

三日間、理由無く休むと“営倉”に入れられると言われていたので、恐ろしくて休むこともかありませんでした。

今でも忘れられないのは、あの鳴野と京橋の間の長い鉄橋を渡ったことです。鉄橋には板をしいていまし

たが、すき間のあるところがあり、下を見ると怖くて足がすくみ、気を失いそうになり、前の人に手を差し延べてもらって、やっと渡り切りました。それから、鉄道が止まっても、どんなに遠回りしてでも、二度と鉄橋を渡ることが出来ませんでした。空襲が激しくなるにつれ、私たちは南を転々と集団で移動しました。大江橋、本町、造幣廠がやられたとき、本町の大倉洋紙店の地下室に逃げ込みました。地下室が波の高い日の船に乗っているように左右に揺れ、もう死ぬかと思いました。急に母が恋しくなり、人知れず心の中で泣きました。

いつも片町駅から帰っていました。ある日、天満橋の柳の下で、爆撃機に打たれ下駄の前半分と足の指が焼けて無くなった男の人が仰向け

で苦しそうな形相で死んでいました。その時分は、ふいに音がすると百雷が落ちるがごとく、爆撃機が飛んでくるのがあったのです。きつと、隠れるチャンスを失った人なんでしょう。

私も一度、もうすぐ片町駅に着く寸前にバリバリという音を聞きドアが開いた途端、腰が抜け、気が付くと皆がゾロゾロとはい出して、それぞれ列車の下や鉄道荷物の陰とかに隠れてしゃがみ込んでいました。運転手がどこへ行ったか分からず、何時間も列車は動きませんでした。

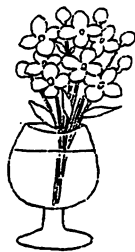
京橋駅が爆撃されたときは、死体の山に焼けたトタンを被せて数日そのままでした。線路はアメのように曲がっていました。また、ある日は、馬が倒れ、馬方が真っ青な顔で座り込んでいました。さらに、片町駅近

くの倉の前で男の人がぶどう色にバン腫れあがって倒れ、蛆虫（うじむし）が出たり、入ったりしている光景を見ました。でも、明日は我が身かとも思っていたので、お気の毒に、との感慨しかわきませんでした。思えば、本当に恐ろしいことです。

食料もますます無くなり、これも忘れられない一つの思い出です。雨のシトシト降る日、小さな庭のグミの木に絡まっているナンキンの蔓（つる）をたぐって「腹へった」と泣いている兄。可愛い孫がひもじがる姿を見なければならなかったお祖母さんの気持、どんなに辛かったことでしょうか。今、自分が孫を持つようになり、痛切に胸が痛みます。自分の孫が…と思うだけでも慄然としてきます。

母は、長時間並んでやっと手に入れたサバをカンテキで焼いていました。そのサバから、蛆虫がポトポト落ちます。この魚を母が食べるのを見ました。

もう二度と戦争は嫌です。ここに書き尽くせない悲惨な出来事が一杯ありました。心の底から平和を願ってやまない一人です。



被爆の記憶 “水” “水” “水”

古谷益雄

昭和二十年八月、私は旧制第六高等學校の生徒で、校友とともに勤労動員のため「日本製鋼所広島製作所」に派遣され、手りゅう弾の鑄造作業に従事していた。

八月六日早朝より空襲警報が発令されていたが、月一回の工場休みの日であったので、寮で朝食を済ませ、さらに支給された昼食用の弁当も一緒に食べ、少々腹の虫を治めて、木製の弁当箱を一階の洗面所で洗っていた。八時十分過ぎであったと思う。空襲警報は解除になったが、微かに爆音が聞えるので西の空を見上げる

して一五度位の遙か彼方に見えた。

そして後方に仰角三十度位の所、高度約五百米位だろうか、落下傘が三つ宙に浮いてゆっくり降りて来るのが見えていた。（実際の数は違っていたかもしれないが、目に入ったのは三つであった）

何か珍しいので眺めていると、数秒後、閃光（せんこう）がピンク色にピカッと光ると同時に、垂直に何かが走ったように見えた。熱さを感じた瞬間、轟音（ごうおん）。そして爆風で正面のガラスが全部飛び散った。屋根の瓦は魚のウロコをはいだように飛散した。

我にかえると、顔面と右足の甲より血が流れている。二階から梅田君ら数人が「熱い」と叫び乍ら駆け降りて来た。

立てかけていた弁当箱の蓋は、廊下を越えて部屋の柱に当たって二つに割れていた。

血が止まらないので同僚の久山君と一緒に会社の診療所へ行くため外に出ると、西の空には「もくもく」と雲が上っている。真夏の太陽なのに一面は真っ白く、一面は影になって黒く、今までに見たことのない光景である。後ろを振り返ると寮は木の骨と、むき出しの屋根の板のみである。自分は爆発の瞬間を真正面から見ていた。なのに、ガラスの破片が二つ直撃した程度なのは、窓の外に一本の背丈より少し高い植木があったからだ。そのために助かった。

診療所に行ってみると、火傷をおった人たちが、続々と顔にたかれた皮をぶら下げて、焼け破れた服をまとい、髪は焼けて丸坊主の人、耳の皮をぶら下げている人、そして殆ど裸足であるように見えた。それでもここまで来た人は自力で歩ける人々であった。

医師に傷を見せると「切れて出血はしているが、こんなの怪我(けが)ではないよ」と言われガーゼを少々もらった。寮に帰って指示を待てること。そのまま寮へ引上げて見ると、足の踏み場のないガラスの海。幸い夏で蚊帳を吊ったままだったので、布団と畳は中まで破片に見舞われずにすんだ。

しばらくして、「元気で、広島市

内に親戚縁者のない者は、全員会社に集合、市内に救援に行く」との指令。

時刻は判らないが昼前後であったか。会社に集合してみると「市内には、防空壕の中に相当生存者がいるらしい、会社の要人も西の方の防空壕の中にいる模様なので、蟹屋町の旧疎開跡工場を拠点に負傷者、罹災者を収容し救済すること」との指令。

爆心地(当時は知らなかった)付近から紙屋町、相生橋東側の近くを次々に大八車で救出に当たったが、思うように道は通れない。工場の床には筵(むしろ)を敷き、生存者と思われる人は寝かせた。中にはコンクリートに直接のものも可成いた。

「水」「水」と力の無い声で呼ぶ。火傷者に水を飲ませることは禁物と指示あり。脱脂綿に水を含ませて唇

を拭いたり、水を塗る程度。中には拭いていると綿から指まで噛みつく者もいた。体は身動きしない。「水」がほしいのだ。顔は焼けて目のみが開いている。皮はベラベラにまくれている。次々に拭いているとその内「水」とも言われないが出てくる。死んだのだ。どうすることも出来ない。

夜になる頃、薄暗い所に、次々と身内を探しに人々がやって来る。「これも違う」「これも違う」と声を落として去って行く。恐らく五十人位収容していたと思うが、一人、二人と声を出さなくなっていく。脱脂綿を唇に当てても動かない。死んでしまった。

その日は、真夜中に、大八車に三人を乗せて寮の方へ帰った。空は真暗、冷たいものがほおをうつ、雨

だ。何所からとなく悪臭が鼻をつく。微かに飛行機の爆音らしい音が聞えるも空襲警報は出ない。全てが麻痺しているのだ。風向きが、茶毘（だび）の臭気を遠慮なく鼻に押し込む。

収容した三人は、寮の裏の横穴壕に寝かせた。そこには、後輩で同郷の坂倉君が顔面白布で覆われ、目、鼻、口の所だけ穴を開けて貰って、同僚につき添われ横たわっていた。「何か言うことはないか」と聞いたから

「水蜜桃が食べたい」と一言。相当重症であった。（彼は昭和四十七年入退院を繰返し、顔と胸に大きなケロイドを持ったままこの世を去った）

翌七日（実際は六日は眠っていないので何日か判らない）本格的に救援物資を運ぶ。

大豆かすと米の少々入った握り飯、切削用に使っていた種油（火傷の傷に塗る薬がないため）、十円札東十束「一万円」を腰にタオル二本で巻き、罹災者にオート三輪で運ぶ。蟹屋町までは何んとか道が走れた。途中バウンドで握り飯は荷台にころんだが、そのまま箱に入れていく。

とにかく食べられる物であれば何でもよい。幸い破壊された水道栓から水が少しづつ出ていたので助かった。運んだ物と金は、誰にどう分配したのか記憶にない。昨日収容した負傷者は殆んど死んでいたが、探し求めて来る人が次々とあるので動かさない。

薬はなく、「水」を飲ませることも出来ず、死んでいくのを見ているだけだった。外の防火用水には、一杯にふくれた死体も入ったまま。火傷

で熱かったため熱湯と思わずに飛び込んだのであろう。うつぶせになって髪は焼け、腰に一本の紐だけ。男か女かも判らない。

ふやけているので引出せない。そのまま放置するしかない。

防暑帽を着用された仁科先生と（旧）広島高等学校の校舎に入る。倒壊はまぬがれたが、傾いていた。

「原子爆弾です」と先生の一声。六高の先輩だったので一言だけ聞かせて頂いた。

（旧）広島文理大の辺りでは、奉安殿の鉄の扉が、まるでトタン板を曲げた様に凹んでいた。

帰る途中、トラックに憲兵が乗り込んで来た。このトラックを軍に貸せとのこと。会社の物だから渡せないと言うと軍刀の鞘で尻を撲られ、そのまま強引に乗って行かれた。四、

五日後、ドラム缶一本のガソリンを積んでトラックは帰って来た。

どう歩いたのか分からぬが、寮に帰ると同僚の三浦君の死を知らされた。彼は五日の夜より広島市内の親戚に行っていて被爆のため焼死、全く誰だか判らないほど、焼けていて、神戸に在住の歯科医師である父親が歯形で確認された。

爆心地付近ではまだ立木がくすぶっていた。ドームの屋根は鉄骨が今にも崩れ落ちんばかりに、くにゃくにゃに曲がっていた。現在の様な円形ではない。目の粗い竹かごを、半分足で踏みつぶした様だった。

七十年は生物が生息出来ないと言ふ噂が流れたが、蟬の声が煙を吐いている立木の間から聞こえたように耳に残っている。死体を焼く臭気か、異様に悪臭が鼻をつく。

太田川には、死体を載せた浮き舟が何隻もあり、岸辺に集められ、砂の上には市場のマグロのように死体が並べられ、所々で茶毘(だび)の煙が上っている。先程の臭気はこのためだったのだ。

被爆直後より十日間近く救援作業に従事したが、何人を救護できただろう。横穴壕に収容した生存者の耳や顔の傷口には蛆虫(うじむし)がうごめいていた。この間何を食べ、何所で眠ったのか定かな記憶は残っていない。

恐らく我々が救護した人たちは全てこの世を去っているだろう。当時、自力で動けなかった人たちばかりだからだ。

「水」それは「末期の水」になっってしまった。当時死者は七万人と言われたが、現在では十四万人とも言

われている。

一人として助けられなかったことを心からわび、放射能の後遺症に苦しむ多くの方々の回復と、死者の冥福を祈る。そして二度と、核兵器による惨事の起らないことを心より願う。

(後記)

昭和六十年広島平和公園を訪ね、記念碑に死没者の冥福を祈つてきた。原爆資料館には当時の姿を見て感無量であったが、当時の実情は、今見る資料の数十倍、数百倍の悲惨なものであったことを、見学される人々にも、後世の人々にも伝えたい。毎年八月六日午前八時十五分に広島の方に向い手を合わせて黙禱を忘れたことはない。

思い起こすニューギニア戦線

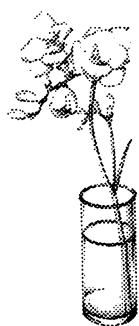
細谷 一

私は、昭和十七年一月現役兵として在南支の第一〇八連隊に現地入隊する。一月二十七日、広島県宇品港を出発、広東虎門上陸。第一機関銃中隊に入隊する。一期教育を終わる十七年五月ベトナムハイフォン港上陸。独立混成旅団山県兵团第一大隊第一機関銃中隊に配属される。

十七年九月ハイフォンから転戦した山県旅団の一兵士として、ラバウルから三度目の敵前上陸。夜が明けて舟艇での上陸作戦と同時に敵機ノースアメリカンの猛攻で上官や何名かの戦友も敵地に上陸する事もなく海の藻屑と消えさった。上陸した一

部の将兵も、絶え間ない敵機の猛攻に次々と跡形もなく消えさる。上陸しても一歩も進む事も出来ない。日が暮れてやっと敵機も去り夜になり、上官の命により行動する。その後生き残った者でブナ作戦に参加する。上陸後、食料もなく戦いに負け撤退作戦。昼間敵機が飛んでくる。見つければ雨あられのごとく爆撃と機銃掃射の毎日。戦友達は栄養失調とマラリアと負傷で命を落として行く。生き残った兵達は、毎日死体の処置をする者も明日は我身かと思うとまったく地獄そのものである。こんなむごい戦争があるだろうか。そ

んな体験をしながら負傷と栄養失調で骨と皮になり九死に一生を得て、一年後悪運強く内地の土を踏んで今日まで生き延びた。誰一人の戦友もなく、毎年終戦の日を迎えると、当時をしのび、亡き戦友の冥福を祈る今日この頃である。二度と、このような悲惨な戦争を起こさない事を願って、現在社会の一員として協力している毎日である。



朝鮮の方々のこと

松下 いし

私は、現在（平成四年六月）七十
三歳です。終戦当時、北朝鮮（朝鮮
民主主義人民共和国）や韓国の方々
にお世話になったことを皆さんに知
って頂きたく書きました。

◇

昭和二十年八月、今年は、亡き姉
の十七周忌だなどと思いながら、いつ
ものように近道をして病院に向かっ
ていた時のことです。私は、左肺
（結核）を患い、毎日、元山の病院
に通院していました。

すると、向こうから主人と同じ会
社に努める谷川さんが足早にこられ
「どこへ行かれますか」と尋ねられ

るので「病院へ」と私は答えました。

谷川さんは「今日は、行っても診
てくれないから、早く自宅に帰りな
さい」と言われました。

訳も分からないまま帰宅しまし
た。そこには、社宅の人たちが皆で
集まって泣いていましたので、「何
かあったのですか」と私は聞きまし
た。

「日本が戦争に負けたのですよ」
と社宅の人たちの答えが返ってきま
した。

私はラジオを聴いていなかったの
で、訳の分からぬまま谷川さんの話
を聞いていましたが、その時、やっ

と理解することができました。

社宅の皆さんは、全員が涙を流し
ておられました。病気を患ってい
て、そんなに長生きもできないと、
当時思っていた私は泣きませんでした。

夜、主人が帰宅して「今晚、零時
に最後の送還列車を出すから、子ど
もたちを連れて京城まで逃げなさい」と言いましたが、私が「死ぬ時
は家族全員が一緒にしましょう」と
言って残ることにしました。

結局、会社の役員の子七家族だけが
残ることにし、社員とその家族は全
員引き揚げました。これが、最後の
別れとなりました。

二日後に残留した人が全員で集ま
り話し合いました。そこへたくさん
のソ連兵士がやって来ました。ほと
んどは囚人兵らしく丸坊主頭で、四

人だけが正規の兵士のように思われました。

兵士たちは、井戸の中に板切れなどを投げ込みながら主人と何か話していました。あとで主人に聞くと「引き揚げ船が来るまでいるように」と言つて帰つて行つたとのことです。

翌朝早く囚人兵二人がやつて来て、私を若い娘さんと思ひ込み「連れていく」と言い出しました。私は、主人に「十四歳以上の若い娘さんは、どこかに隠れるように言つて下さい。私、死ぬ覚悟はできています」と言い残し、兵士に従いました。実際は、前後に小銃を突きつけられ、生きた心地もしませんでした。連れて行かれるうちに、何とか逃げられないだろうかと思ひ、三村さんの鶏小屋の前に差し掛かった時で

す。私は、大きな声で「あー！」と叫びました。兵士は、驚いて飛び散りました。その一瞬のすきに、鶏小屋に飛び込み、髪をほどき、ワンピースを裏側にして着、草の汁を顔に塗り、手足に土をつけ、裸足になりました。

周辺に人影がないのを確かめ、先ほど来た道を歩き出しました。死ぬ覚悟はできているとはいへ、「あつ、ソ連兵に見つかった」冷汗でびっしょり。ところが、あまりのきたない格好に、銃で追い払われました。兵士の姿が見えなくなると、一目散で皆さんが集まっている所に駆け込み、顔を隠して座り込みました。

すぐそばで、私の二歳になる息子は「お母さん、お母さん」と呼び、主人は「お母さんはすぐに帰つてく

るから」となだめています。しばらくしてから、やっと主人は私に気付きました。家に入って鏡で自分の姿を見て、あまりのきたなさに、我れながら情けなく思いました。

その夜から、三カ所でフライパンを持って見張ることになりました。女性たちは、天井に隠れていることになりました。塗り天井なので、梁（はり）の上になければなりません。

ある日、娘と二人で梁の上に隠れていると、目の前に銃剣が突き出てきました。娘が声を出しそうになつたので、思わず口をふさぎました。二人とも生きた心地がしませんでした。

いつも、できるだけきたない顔にしていなければなりません。そこで、なべ底の墨を塗るのですが、夏のた

め汗ですぐに流れてしまします。いろいろ工夫し、墨の中に油を入れて練って顔に塗っていました。主人は「まるで、お芝居のお岩さんのようだ」と言っていました。そんな日が、何日も続きました。

その日は雨で、少し油断していましたがしてきました。主人がソ連兵と大きな声で話をしながらやってきました。私は、とつさに仕切り板にしがみつきました。主人は、トイレの戸を開け、中を見せているようです。「ハラショー、ハラショー」と言つてソ連兵は帰って行きました。

「もう、出てきなさい」と主人に言われ、慌てて娘を探しました。私たちの心配をよそに、娘は押入れのカヤにくるまり汗びっしょりでスヤスヤ寝息をかいていました。

やがて冬が近づき、全員が集まつて暮らすことになり、長屋に移りました。

娘は才さんという朝鮮の人に預かつてもらい、私は床下に隠れ住むことにしました。目の前をソ連兵の足音が通りすぎます。外に出るのも時間を決められました。

お金も使えません。品物を持って行き、ソ連の女性兵士に買ってもらいます。朝鮮の人に見つけられて取り上げられたり、やつと買ってもらったお金の半分を同じ日本人に取られたりと、人が信用できなくなり、毎日、泣き暮らしていました。

そのような中でも、優しい女性兵士がいて「娘のみやげに」とブローチ一つを、一週間も食べられるお金で買ってくれました。また、若い男性兵士が、ネックレスを「これは、

世界を丸く仲良くつなぐ輪だ」と言つて高く買ってくれたこともありました。

ある日、私は「日本人、日本に帰れ」と幼い朝鮮の子どもに石を投げられ、頭を抱えて道路に座り込みました。

「何をするか」と怒鳴る声に、おそるおそる頭を上げ「あつ、父さんと、私は大きな声を上げました。そこに、あごひげの長い父の優しい姿を見たような錯覚をしました。

実際は、年をとった朝鮮の男性でした。肩を優しく叩き「一緒にいてきなさい」と言われ、私は無気力に従いました。

ふと我にかえると、立ち止まりました。男性は、私が恐れていると思つたようで「安心しなさい。私はあなたに心配するような者ではありません

せん。保安隊に力を入れ、街中を見回っているのです」と、道々話してくれました。

若い時は、国民学校の校長をされ、「子どもたちがしたことは許して下さい」と謝ってくれました。

そして「ここです。上がりなさい」と言つて、お寺のような立派なお宅の戸を開けてくれました。広い庭の向こう側には、同じような部屋がたくさん並んでいます。中で一番広い部屋の戸を開け「お入りなさい」と言われたその中では、上品なおばあさんが糸を紡いでおられました。

男性は「私の母（オモニ）です。日本語は少しも話せませんが、氣遣いはいいですね」と、そして「あなたは、私を見て、お父さんと言いましたね」と言われました。

「私には子どもが二人いて、亡く

なった姉の子どもが五人います。七人の子どもの女親です」と、終戦から、その日までのことを話し、「私は、この子たちを日本に連れて帰るまでは、死ぬことができません」と言いながら軽いせきをしました。

「どこが悪いのですか」

「胸が悪いのです」と答えました。

「ちよつと待っていていなさい」と言

つて部屋を出ていきました。

戻つて来ると、大きなどんぶりに青汁を一杯入れ「これは、胸の悪い人に効果があるから全部飲みなさい」と言い「今日から、私を父さん（アボジ）と思つて、何でも話さない」とまで言つてくれました。オモニは、私の話をいろいろ聞いてくれました。「アイゴー」と泣き「子ブタよ」と言うのです。私にたくさん子どもがいるのでブタのよう

だ、と言つたと思ひました。

「また、何かあるといけないから」と言つて、わざわざ私の住む長屋まで送つてくれ、お米まで置いて行かれました。

夜、主人に昼間の出来事を話しました。それまで涙など見せたことのない人が男泣きしていました。

四、五日して、またアボジが来ました。家の中を見回しても何もありません。部屋の片隅に小さな火鉢を見つけ「これは使っていないか」と聞くので「炭がなくて、使えません」と答えました。「では、持つてついで来なさい」

私は「オモニが私のことを子ブタと言つてましたが、子どもがたくさんいるからですか」と尋ねてみました。

「可愛いということだよ」と笑つ

ていました。

家に行くとオモニが待っていて、いろいろとごちそうしてくれました。会話ができないことを寂しく思いました。「長男が学校の先生で、これが嫁さんだよ」と、若い娘さんを紹介してくれました。この女性日本語が上手で、私によくしてくれました。

「私は本妻ですが、主人には三人のお嫁さんがいます。私には子どもができないので寂しい思いをします。でも、お母さんが優しいので辛抱しています。あなたは、子どもがたくさんいるので生きて行けます。頑張りなさい」と、美しい日本語で話してくれました。

いろいろとお土産をくれ、また送ってきて「もう売るものがないので来れないね。でも、私がまた来てあ

げますよ」と言ってくれました。さらに「これから、私の知人の家に連れて行くからついて来なさい」と言い食堂へ連れて行かれました。

金波楼という食堂でした。ここのご主人は、学校の先生でアボジの教え子とのことです。家人は全員が日本語が分かり助かりました。「あなたのことは全て話してあるから、一日に一度食べさせてくれる。自分ができる仕事をして、青汁を飲んで栄養を取りなさい」と言って帰って行きました。

私は、アボジの後ろ姿に涙を流しながら深く頭を下げました。

金波楼には、日本人女性が一人いました。今井三津子さんと言ひ、皆から三津ちゃんと呼ばれ、東京の美術大学の学生さんでした。お父さんと満州に親子三人で住んでいて、夏

休みに来ている間に終戦になったとのこと。満州から元山まで逃げて来て、お母さんが病で倒れ、アボジの世話で働いていたのです。三津ちゃんが、お店で私の名前を何と呼ぼうかということになり、「好きな名前を付けて下さい」と言いました。

この店の弟さんは、東京の大学に行っていたが、空襲が激しくなり戻っていたのです。下宿の娘さんがつや子さんと言ったので、私の呼び名は「つやちゃん」になりました。弟さんは、東京では「広さん」と呼ばれていたとのことでした。

お店の奥さん（お母さん）が、毎日、青汁を作ってくれ、私は次第に元気になり、幸せでした。

時々、アボジが自宅までお米を持って来てくれ、子どもたちも「おじいちゃん」と呼び、喜んでいました。

お土産を持って見回りに来てくれる度に「元氣になったね」と慰めてくれました。

お正月が過ぎ、いつ帰国できるかも知れないし、いつまでも人に頼ってばかりいられません。何とか現金収入を得ようと考えていたころのことです。

お店で、三津ちゃんがお客さんから「歌を歌え」と言われ「絵は描けても、歌は歌えないわ」と断りました。

すると、今度は私に「歌ってみなさい」と言うのです。

「私は下手よ」と答えると、お母さんから「歌ってみなさいよ」と言われて、恥ずかしさをこらえて日本の民謡を歌いました。お母さんが「お金をもらってあげる」と、いくばくかのお金を頂きました。

そこで、私の歌でお金がもらえるならと恥を忍んで歌うことにし、何か月かが過ぎました。日本の女性が歌うとの風評を聞いて、次第にお客さんも増え、お母さんも喜んでお金をもらってきてくれました。

長屋に戻ると、子どもが「今日も、おじいちゃんがお土産を持ってやって来て、一度、お母さんに会いたいと言っていた」と言うのです。すでに七月になり、青汁のおかげで夏負けもせず、終戦後一年を迎えようとしていました。そのころになって、初めて生きていてよかったと思えるようになっていました。

わざわざ、オボジが会いに来て「日本人はシベリアに連れて行くとうわさがある。南（韓国）の方へ逃げなさい」と知らせてくれました。逃避行の決行日に金波楼へ、その

ことを告げに行くと、いろいろと食べ物を作って持たせてくれました。とうとう、オボジに会う時間もなくなり、お母さんに「よくお礼を言っておいて下さい」と頼んで、お別れしました。

その日、私は主人に長い髪を切ってもらいました。耳をふさいでいても、ハサミの音に泣けてたまりませんでした。

預けていた娘を迎えに行く主人には「汚い帽子と上着をもらってきて下さい」と頼みました。主人がいなくなつてから、アカシアの根元を深く掘り、髪の毛を埋めました。

娘を連れ戻った主人は「才さんの妹さんが、娘にチョゴリを着せ、帰したくないと泣いていた」と聞かされました。皆さんに可愛がられて暮らしていたとのこと。私は、お

会いすることもなかったのですが、才さんは学校の先生だとのことでした。心からお礼を申しました。

娘は、私の頭を見て「切ったのね。誰にも負けない美しい髪だったのに。私も、切って」と言うのです。

「あなたの髪は、母さんが守ってあげます」と言って、細い三つあみをいくつもつくり、頭の上につきちりと止めて帽子をかぶせました。可愛い少年のようでした。

韓国まで何日かかるか知れませんが、煎（い）り米を作り、ビスケットを焼き、一人一人のリュックに詰めてから、夜になるのを待ちました。

午前零時、七家族で脱出を開始。昼は山中で寝て、夜中に歩くのです。子どもたちとは、はぐれないよう口トプでつなぎ、引きずるように進みます。

私は、熱が出てもうふらふらでした。三日目の夜、主人が「あの山を越えたら三十八度線だよ。頑張りなさい」と力づけてくれました。どんなことがあっても、子どもたちを内地へ連れて帰らなければとの思いで、亡き姉に祈りながら歩きました。

午後十時ごろでした。四人の朝鮮人が来て「子どもたちがかわいそうだ」と複線のトンネルに連れて行き「ここで寝なさい」と言うので従いました。

何時ごろだったか分かりませんが、入口の方にたいまつが灯が見えました。お金を奪いに来たのです。主人は「だまされた」と言いました。私は、とっさに地面を手で掘って所持金全部を埋め、その上に座りました。

主人と二人の子どもは、金を全部

奪われました。私にも「出せ」と言いましたが「ない」と言うと、ほおをぶたれました。主人が「妻は病気だから許してくれ」と頼み、その場を逃れました。私の手は、血だらけでした。

夜が明けたので、早く山を越そうと歩き始めました。血だらけの私の手を見て、主人が「どうしたのだ」と、小さな声で聞きます。「お金を土の中に埋めておいたのよ」と取り出して見せました。「お前は」とあきれていました。

ほかの人たちも全員、お金を奪われていました。南（韓国）へ行けば使えなくなるからとあきらめていたようです。

山を登ると、主人は「あれがトウセンという川だよ。三十八度線だ。もう、安心だ」と言います。私

は、もうくたくたで、泣けてきました。亡姉に「ありがとう」とお礼を言っていました。

その途端、空砲が鳴りソ連兵のやってくるのが見えました。見張り兵に発見されたのです。皆、その場に座り込んでしまいました。

主人がソ連兵と何か話していました。私の娘の頭をなで「可愛いね」と言つて、返つて行つたとのことです。

川の浅瀬を見つげ、やっと向こう岸にたどりつきました。ふと、後ろを振り返ると、山の中腹に大きな穴が三つ空いていて、大砲のようなものが見えます。「危ない」からと夜まで草むらに隠れていました。

暗闇（やみ）になり、小さな村に着き、一晩泊めてもらいました。皆さん親切な人でした。私は所持金全

てを出し「翌朝、五時半に出発しますので、子どもたちにおにぎりを作つてやって下さい」と頼んで横になりました。明朝六時に村の入口で皆と出会うことになっていました。

疲れていた私は、すぐにうつらうつらし始めました。そこへ、五歳の時に別れたきりの姉が現れたのです。

私は「疲れました。もうここまでくれば安心だから、連れて行つて下さい」と手を差し出しました。

しかし、姉は何も言わず首を振つて「行きなさい」というように追いつ返します。「お姉さん、連れて行って」と大声で叫びましたが、「お帰りなさい」というふうには手を振って、姿が消えました。

主人に揺り起こされ、私は目を覚ましました。「うなされていたよ」

「姉さんに会ったけど、連れて行つてくれなかったわ」「守つてくれているのだよ」と言われました。

朝になると、おにぎりと、おかずまでたくさん作つてくれ「奥さん、元気で行きなさいね」と泣きながら励ましてくれました。私は、お礼の言葉も出ませんでした。

韓国に入ると昼中も歩けます。石を投げられることもありません。

歩きながら、川面を見ると何か浮かんでいきます。主人に引き上げてもらうと、四歳くらいのおぼろしい女の子でした。川岸に深く穴を掘り、葬つてきました。

また、歩き出すと、ポプラの木の下に八十歳くらいのおばあさんが、座り込み、うつむいていました。主人が「どうしたのですか」と尋ねると「孫にここまで連れて来てもらい

ました。でも、もう駄目。日本に少しでも近づき死ねたら……」と言われ
ても、何もしてあげることができま
せんでした。

やっこの思いで京城に着きました。
た。何百人の人で、駅はごった返し
ていました。会社の人たちとは、こ
こで一生の別れとなりました。

長女の髪を元に直し、娘の姿に戻
してやりました。空になったリュッ
クを捨てようとしたが、「ここまで、
皆を守ってくれたのだから持って帰
りましょう」と、一つにまとめて主
人が背負い、その上に娘を乗せ、ま
たはぐれないよう全員ロープで結ん
でいました。

一人のアメリカ兵が近づき、娘の
手に何かを握らせました。娘のほお
を優しくなでながら、主人と何か話
しています。私も娘も、言葉が分か

らず、頭を下げるだけでした。

送還用の貨車の扉が締まるまで、
何か言って手を振っておられまし
た。主人に何を話していたのか尋ね
ました。

「自分にも本国に十六歳の娘がお
り、思い出して思わず手を出した。
こんなことなら、たくさんキャンデ
イーを持ってくればよかった。少し
だけど、仲良く食べなさい。元気で
ね」と言っていたとのこと。

貨車の中は、何事もなかったよう
に疲れて寝入っています。貨車が止
まり、主人が外をのぞき「釜山だ」。
京城から釜山まで寝てしまっていた
のです。

大きなお寺に連れて行かれ、おか
ゆをもらいました。目の前に大きな
船が停泊していました。「あれに乗
るのかな」と思っていたら、また、

貨車に乗せられ木浦（モッポ）に連
れて行かれました。

アメリカの大きな船に乗船し、よ
うやく帰国の途につくことができま
した。

出航して、しばらくして周辺が
騒々しいので、近くの人に「何かあ
ったのですか」と聞くと、「青年が
死んだので、水葬にする」とのこと。
皆が甲板に上がり見送りました。船
は、三回汽笛を鳴らし、遺体のまわ
りをひと回りしました。

私のような弱い者が生き残り、若
い人が死んだのが辛く泣きました。
どうか、よい所へ行ってくださいと
祈らずにはいられませんでした。

船内におりると、二人の女の人が
泣いていました。「どうしたのです
か」と聞くと「自分の罪の重さにお
見送り出来ませんでした」と、また

泣き出しました。横で寝ていた女の子が目覚まし、私を見つめていました。その愛らしい顔は、どこかで見覚えがあります。「あつ」びっくりしました。川岸に埋めてきた少女によく似ているのです。

「あなた、ほかに子どもさんはいませんか」と聞くと、女性は「実は、双子の姉の方が旅の途中で亡くなり、冷たくなるまで抱いていました。しかし、心を鬼にして川に捨てて来ました。主人も外地で死にました。私も死のうと思いましたが、この子を死なすことは出来ませんし……」と泣かれます。

「安心して下さい。子どもさんは、私たちが葬って来ました」と告げると「ありがとうございます」と何度もお礼を言われました。

もう一人の女性は「逃避の途中、

我が手で子どもを死なせた。年若い母に一度会ってから、子どもの元へ行きます」と話され、私には慰める言葉もありませんでした。

やっと、博多港に着きました。さらに三日間、船内に足止めされました。

私は、子どもたちを内地まで連れて帰ったので、役目が終わったと思いました。北朝鮮を出発して二十一日目に、本土の土を踏みました。



軍隊教育の裏側

道旗正夫

私は戦争終盤時候補生として新しく設置された情報兵として入隊した。

歩兵を初めとする各兵科と異り全く新しい兵科だったが、先任の隊長以下全員が旧兵科のため、内容はあまり差はなかったのだろう。

教育と訓練には心身とも疲労の連続であった。吾々候補生は今に逆転する階級を夢見て伍長や班長の上等兵に毎日がなぐられの日々であった。

若い吾々は食料の不足をなげき乍ら毎日満腹の夢を見つ、訓練を続けさせられた。ある晩吾々は食料庫に

千切大根の俵詰めがあることを発見した。深夜のくじ引きでこの千切大根を盗む計画を立てた。

ポケット一杯に詰め込み、戦友と少量づつであったが分けあい毛布の中でムニヤムチャとやった。少し甘味があり喰みごだえがありその美味なこと忘れられなかった。

ところが翌朝食料班長から班全員集合と呼出された。サテはバレたか？「なぜ大根干しを盗んだか」「腹がへって辛抱出来なかった」「よしそれなら今晚ごちそうをしてやろう」何だそんな事かヨシヨシと。

一同安心したのは言うまでもな

い。アアよかった。命令通り夕食を取りに行く場面は一転した。洗面器一杯山盛りになった残飯のかずかず、各自一個の洗面器の残飯を「十分間以内に食べる」と相成った。とてもじゃないが食えるものではない。涙の方が先に出た。それからがなぐるけるの大ピンタを受け、鼻血を出す友、歯を折られる友、耳鳴りする友など散々な目であった。こんな事が平然と行われる日本の軍隊の教育方法であった。

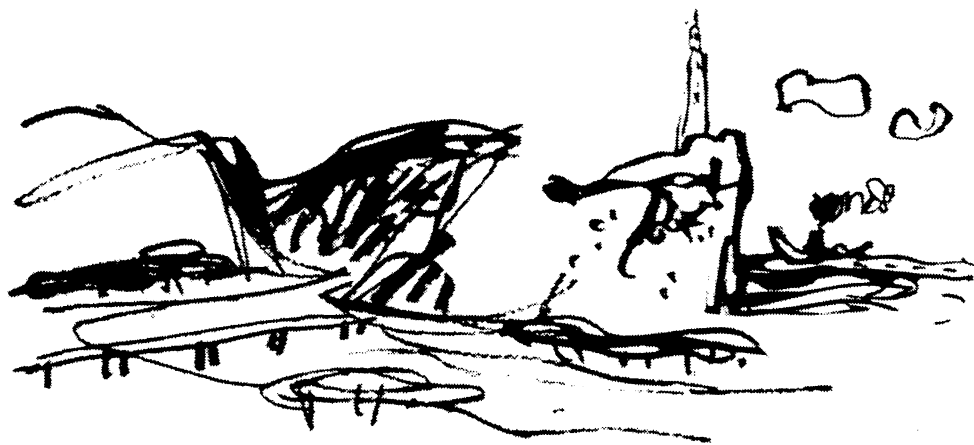
吾々が候補生として任命された時は既に食料係の古兵はいらなかつた。吾々は必ず仕返しをする約束が空振りの三振になり残念であった。

日本軍隊の教育はこんな教育であった。軍隊は軍隊。要領を以て本分とすべきだとしみじみ感じた。

戦争体験と言えば必ず勝った勝つ

た話が多い。私はあえてこんな体験
を裏話として投稿する事にした。

国を守ることは国民の義務である
と思うが戦争は大反対だ。将来とも
平和な人間同志の世の中を作るのが
政治家の責任と思われる。



広島平和大道（百メートル防火道路建設の悲劇）

村上喜代治

昭和二十年四月、広島市立商業学校に新規入学した一年生は、広島市南観音町にあった旧広島市立商業学校（現在の観音高校）の広い校舎で入学したが、二年生以上の上級生は学徒動員を受け、大半は三菱重工業の広島造船所と広島機械製作所に分散配置されていたので殆どの新規入学の一年生は上級生と顔を合わせていない。

学徒動員解除により学校に残留していた上級生は二十人程度で、私と大門及び浜田君が最上級生であった。昭和十六年十二月八日、アメリカ、

ハワイ真珠湾にあるアメリカ海軍基地への空襲で開始された大東亜戦争（後太平洋戦争と呼ばれる）も連合軍の総反撃を受け、既に日本本土の諸都市に対するB-29による爆撃が開始され東京は甚大な損害を受けていた。三月中旬アメリカ海軍艦載機グラマンF6F三百機が呉海軍基地と在泊の連合艦隊に対して空襲を行い、陸及び艦船対航空機の熾烈な戦闘が行われ呉海軍基地は大損害を受けた。また四月早々にはアメリカ五十八機動部隊が沖縄に上陸作戦を敢行するなど戦局は悪化の一途をたどった。

四月以降も空襲は激化し多くの都市が灰燼（かいじん）に帰す状態であった。

新入生に与えられた作業は「天地返し」と呼ばれる作業で、校庭の掘り返しによる「いも」畑の造成と「さつまいも」の植え付け作業であった。これは昭和二十年の暮れの食料確保の為に行われた緊急の処置である。当時の広島は食料配給も充分でなく食料は危機的状況であった。

やっと、「天地返し」の作業が済んだ時、広島市内全中等学校生徒で学徒動員を受けていない全生徒（殆どの学校は二年生以上が動員を受けていた）に対して白神社境内に集合が命ぜられた。

白神社の広い境内に集結した広島市内全中等学校は、広島一中・広島二中・県商・県工・市中・市商

(市立造船工業)・市工・修道・宗徳・山陽・広陵・松商・電学の男子校と、広島一県女・広島二県女・市女・女子商・比治山・安田・山中高等師範付属・進徳・安芸等の高等女学校である。集結した学校二十二校、生徒全員で六千二百名であつた。全員が整列し陸軍将校の訓示を受ける。

『戦局は急を告げている。敵機は本土無差別絨(じゅうたん)毯爆撃を開始した。木造の家屋は火災に弱い。「軍都広島」も木造の建物が多いため火災に弱い。軍都広島を空襲の火災より守る為、防火道路の建設を諸君に要請する。』

防災は、国家百年の大計である。防火道路の規模は、白神神社境内南を中心とした南北百メートル・東西五キロメートルである。

非常に大きな作業であるが早急に完成させてほしい。

この地は「神武天皇」が日向より東征の時、まだ岩礁で白い波を立てていた。(その岩礁は現在も存在している)そこで舟の難破を避けるための社が「白神神社」と呼ばれる。神武天皇上陸地は「鏡津神社」である。

『「神武の東征」は此の地より始まり『君達の偉業』も此の地より始まる』と。

如何に非常時と言えども、突然非常に大きな作業が命ぜられ「学徒」一同啞然(あぜん)とした。

しかし具体的な展開方法についての指示は無い。各学校より先生も参加しておられたが、これもまた突然の事で具体的指示が示されなかつた。

時間が経過して行く。具体的な展開を決めなければ解散も出来ない。

私は「各学校の最上級生集合してほしい」と各学校の代表者を集める。市立造船工業には三年生はいたが、三年生のいる学校は少なく二年生・一年生が代表として、白神神社本殿の南西の角にあつた神社の由緒書きの前で討議を開始した。

余りの大事業であるので、何処からどのように展開するか、各学校は何処からどのようにするのか、何時まで討議しても結論が出ない。

私が「何時まで討議しても、結論は出ない。作業範囲を決めよう」と提案。

「どうやって決めるのか」と各校代表が質問する。

私は「この電車で東西に区分する。更に南北の中心で区分。建物強

制疎開の範囲を四つに区分し担当の学校を定める」ことを提案。この事は割合容易に決まった。

「何処の学校が何処を担当するか」で討議が続き、また堂々巡りである。

私は「何時まで討議しても結論は出ない。この道路より東の学校はこより東に向かって鶴見橋の方向へ。西の学校は西本川方向へ向かうではないか、皆どうか」と、意見を求めた。

「この様に分担し、南北はそのグループで決めたら良いのではないか」と提案して決定された。

翌日より真夏の炎天の下、学徒全員は空腹を耐え汗をかき、家を壊し、材石を運び、百メートルの防火道路の建設に着手した。

家を壊す作業の中、瓦の取り外し

は、大人が担当。壁を打ち抜く。最後まで残す柱は切断禁止のマークが付けられる。柱は斜めに切断する。準備が出来たら、上棟に数本のロープを掛けて五、六十人で引つ張る。「ヨイショ、ヨイショ」の掛け声で。土煙を上げて家は倒壊する。材木と石を区分して整理する。

連日この様な建物疎開が続けられていた。沖縄戦局は急を告げ、その上空を日本本土より沖縄救援の特別攻撃機が、護衛戦闘機に導かれて一路沖縄へ。続いて六月にはB-29の呉夜間大空襲があり炎上の明かりが広島より見える。数日して呉を通る。呉駅から見て平地部は完全に消失、周辺の小高き山の中腹まで延焼している。

また沖縄の戦闘もアメリカ五十八機動部隊の物量戦に対抗出来ず、沖

繩守備隊玉砕となり我が国は南方との海上交通も絶たれ、戦局は急速に悪化。

私は七月に、学徒再動員を受けてこの作業より離れたが、後輩が進行状況を毎日報告してくれた。

「東に進んだ学校は、鶴見橋の河畔に迫っている。西に進んだ学校も元安川を越え本川河畔に到達しつつある」と。

白神社境内で建物疎開の範囲決定に当たり私の提案が採用されて作業に着手したが、私のこの提案が、建物疎開に従事した広島市内全中等学校の生徒六千二百人の半数以上の生徒に対し、世界最初の原爆被爆の犠牲者となる時間が、刻々と迫っていることを知らなかった。

昭和二十年七月末、アメリカ機は広島市に伝単（宣伝ビラ）を投下。

その内容は「新型爆弾を投下する。非戦闘員は直ちに広島より退去せよ」と。

官憲直ちにこれを回収「所持する者は銃殺に処す」（これは鷹の橋周辺に大量に散布された）と。

昭和二十年八月六日午前八時十五分、賀茂郡西条（今の東広島市）上空を通過したB-29二機が広島に世界最初の「原子爆弾」を投下した。

強烈な閃光（せんこう）が約十秒、続いて猛烈な爆風、半径五百メートルの大火球となり、表面温度摂氏四千度と言われ広島市の大半は一瞬にして灰燼に帰した。

その時、西に向かって建物疎開に従事していた広島西部の中等学校の生徒は爆心地五百メートル以内の地点で被爆、大半は被爆死した。

私の学校である広島市立商業学校

の学徒は、現在の平和公園南の路上で被爆死した。被害内容は、先生五名と生徒一年生在校生二百十九名のうち、当日出席者二百十五名中二百十四名が原爆被爆死した。また二年生もこれと運命を共にした。この内容は八月十一日、原爆被爆で灰燼と帰した広島市内に、被爆後二度目の学校訪問時正門入り口に向かって左角の武器庫前で、関係者と連絡事務を行っていた先生に直接聞いた話である。

偶然か神の采配か、建物疎開より再動員に切り替えられた私と大門・浜田両君が工場動員で指定された場所は、三菱重工業株式会社広島機械製作所部品工場己斐第一分工場であり、ここには二百五十名程度の学徒が配属されていた。この分工場ではドイツのメッサーシュミットに用い

られているロケットエンジンと同種のロケットエンジン（今のジェットエンジンに類似）や、特種潜航艇のトランスミッションが製作されていた。私は山崎組に配属されて特種潜航艇のトランスミッション（改H6）の軸受部加工の横ぐりボーリングマシンの加工助手として配置され、先手（さきて）と呼ばれる。

特種潜航艇とは敵の港の中に入り魚雷攻撃をする小形攻撃潜水艦のことである。

ここは爆心地より二千五百メートルの地点であったが、強烈な閃光が約十秒続き、その間に強烈な爆風に襲われ「照明弾だ」「停電だ」の絶叫のうちに簡易の工場は倒壊した。

私たちは、全員下敷きとなるも大きな機械が並んで配置されていたので、学徒には大した負傷者も出なか

ったが工員一名が即死した。

工場近くの小高き丘に登って広島市内を見渡せば天満町、土橋の方向に黒煙上がり猛烈な勢いで広がっていた。被害確認のため己斐橋（太田川改修のため現在はありません）、己斐駅周辺を確認、家屋は半壊の状態で火災の心配はないように見うけられた。

九時過ぎより多くの被災者が負傷して避難してくる。十時より後の被災者の負傷の程度は言語に絶し、衣服は焼け、皮膚は焼け落ち顎（あご）や手先に「ぼろぎれ」の様にをぶら下がり、老若男女の区別もつきにくく、胸の当たりのふくらみでやっと男女の区別が出来る。このような負傷の人たちが己斐橋を渡り、己斐小学校前を通って山道を登る。「薬をくれ」「薬をくれ」その数約五、六

千人。救護の活動何処にも無し。

表現は不適當であるが、「衣服は燃え裸身となり、髪は焼け落ち、顔は外れ顎下にぶらさげ、顔は腫れ、目は閉ざされて見えず。腕皮も焼け落ちて指先にぶらさげた、その手で片目を大きく開き、指先にぶらさげた腕皮が視界を妨げるので、顔を傾けてやっと視界を確保。体の皮は焼けてぼろぼろ、あちこちでぶらさげて」「助けてくれ」と呼べども救援する組織（消防・警察・県職員・市職員）も無く。唯火の無い山の方に向かって、被災者は二、三列に並んで行列を作り、のろのろと行進している。その数五、六千人。

「これが本当の地獄だ」私は被害の強烈さに驚いた。

十一時憲兵隊より「一時工場退出、家族の安否を確認し工場に帰還し

ろ」の指示で学徒は工場を退出。家族の安否を気遣いながら一路我が家へ。

広島市立商業学校生徒五十名は、己斐橋を渡り天満町の方向に進むと言う。山崎君と私は左折を薦めたが大多数の生徒は家への近道だと言って直進。私と山崎君二人が左折して北に向い、横川方向に進んだ。その頃より稲妻の走る大雨となる。これが後に話題になる「黒い雨」である。

安芸女学校の南の畑に何時の間にか七十ミリ程度の高射砲陣地が出来ていた。数名の高射砲兵が動いていたが高射砲を発射する動きはしていなかった。私の知識で判断すると、射程は五、六千メートルでB-29の飛行高度一万メートルには届かない。艦載機の迎撃がせいぜいである。

このとき、己斐橋より直進した市

立商業の生徒が走って私たちの後を追って来た。

「天満町が火災で通れない君たちに付いて行く」と。私は先ほど小高き丘に登りて状況を偵察していた。市立商業の生徒は、また一団となり横川に向かう。

途中、己斐駅と横川駅間の鉄路の障害を確認する。蒸気機関車で徐行すれば通行可能か不可能かの確認。生徒一同は三滝鉄橋東側の鉄路に上がる。

三滝鉄橋東側より四方を眺めれば、付近の半壊した多くの家屋より自然発火で火災が発生し始めている。東に進み横川駅を通る。横川駅舎は倒壊しているが火災はまだ発生していない。八月六日の午前十一時二十分である。私の下宿先は横川駅南西の打越町であったが完全に燃え

尽きていた。今隣のレンタン倉庫周辺が盛んに燃えている。私の大事な物品は完全に灰となる。

私の確実に見た火災の範囲は天満町土橋周辺と広瀬町・打越町・横川町・三篠町である。

これらの町は殆ど火災に包まれており、全焼と判断出来た。

更に東に進む。横川駅東の可部街道の踏切を越えると、市内から避難して来た負傷者が進路を絶たれ多くの人々が鉄路に倒れて死んでいた。衣服は余り痛んでいない。更に東に進む。現在の五十四号線上の鉄路より見れば、当時の十二間道路は道幅が広く火災の範囲が良く見える。両側の町並みは火災に包まれているが中央部は通行可能の状態。人影は無い。三篠の三丁目当たりまでが今盛んにもえている。三篠の消防署の消防

自動車二台が並んで燃えており、隣の国鉄横川自動車区の車庫が自動車と共に炎上中である。更に東に進み三篠鉄橋西側に到着。寺町の山崎君は右折、南下して寺町に向かうと言う。寺町方向を見れば今盛んに別院が燃えている。煙間に横川鉄橋（普通の橋）が見える。楠木・寺町・広瀬と川の東側の白島町が今盛んに燃えている。

私は山崎君に「太田川を背にして火災より身を守り焼死を防止しなさい」と言っ別れ、彼は猛烈な火災に包まれた寺町に向かう。煙間に彼の姿が見えなくなるまで見送る。

橋の袂（たもと）にいた青年が「君たちは何処からきたのか」。私は「市立商業の生徒で己斐から来た」と被害の情報交換を行う。その青年は言う「これは分子の爆弾である」

と「え、分子の爆弾で何ですか」「君たち学校で分子記号を習っているでしょう」「あ、H₂Oの分子ですか」「そうだ」富士山も吹っ飛ばすと言われているあの爆弾だよ」これは大事。

鉄橋を渡って東に進めば、白島町は全域が火炎に包まれている。鉄路の両側は今盛んに炎上している。可部方面に迂回して進むか、火災の中を強行突破するか。道案内になった私の心は迷う。

迂回の道程が余りにも大きいので強行突破に踏み切り三篠鉄橋を渡る。鉄橋の枕木は所々燃えて無い所がある。用心して進み橋の中央に到る。

ここは風通しが良いためか四方が良く見える。火災の現在の北限は大芝当たり。東・西・南は今盛んに炎

上している。寺町・佐官町・相生橋周辺の火災は物凄い。「ああ、広島も呉と同じようになった」呉の焼け跡は見えていた。

更に東に進み鏡津鉄橋に向かう。鏡津鉄橋と三篠鉄橋の中心位置に進んでいる時は両側の火煙物凄く猛烈な熱気と猛烈な煙で前進困難となる。進むべきか、引き返すべきか。我が心が迷う。目を開ければ痛く、息をすれば体が熱くなる。先程の大雨は三滝橋までで、服はずぶ濡れで雨水は素肌を流れていたが、この熱気で乾燥、カラカラとなる。このままでは服に火が着くどころかに決めて急げ。その時一陣の風、南を見れば福屋と中国新聞社（現在は姿を変えている）の四階から六階の窓から盛んに火が吹いている。社屋の最上部の細い塔の部分は燃えていない。

見た角度は福屋の西側の窓から火を上げているのが少し見える位置である。

鏡津鉄橋に急げ。鏡津鉄橋に急げ。安全な鏡津神社境内まで後五、六百メートル。急げ、急げ。やっと鏡津鉄橋西側に着く。ああ「助かった」と前方を見れば、下り列車が蒸気機関車を先頭にして鏡津神社側に約四十五度の傾きで倒れ盛んに蒸気を吹上っており、上りの鉄路を完全に塞いでいる。私と一年生の山口君で、空襲で火災に包まれた場合の退路は広島市全域の道路・橋（橋梁）川筋・海と完全に調査していたが、その道筋に障害物があることを計算していなかった。今日は避難の道案内である。熱気を避けて鉄橋寄りに集まる。神田橋か工兵橋に進むか、常盤橋に進むか、己斐に帰るか。鉄路の両

側は今盛んに燃えている。熱気の中
考える時間が無い。決断を急ぐ。

私は「背の高い順に並べ」と言っ
て鉄路に整列させ背の高いグルーブ
を両端に配置。背の低い方に回った
背の高いグルーブに対し「君たちが
全員の先導を行え。君たちが急ぎ過
ぎると後がついて行けない。あまり
速度を上げず後の人が付いて来れる
速度で常盤橋に向かえ。倒れる者が
出ても引き返すな。服に火が付いて
も慌てるな。常盤橋の下は水が流れ
ている。服に火が付いたら常盤橋よ
り川に飛び込め。倒れた者は俺たち
が連れて行く。外の人は先導した人
の通った所を通れ。出発」
号令一下。ここより常盤橋まで約
三百メートル。猛烈な火炎の中へ急
ぎ足で整然と突入。一人の落伍（ら
くご）者も無く全員常盤の橋上へ。

常盤橋の欄干南側は橋上に並んで倒
れ、北側の欄干は川の中に並んで落
ちている。これで爆心の方向が推定
出来る。爆心地は福屋・紙屋町方向。
橋上には先に避難してきた人が三
十人程立っている。時計を見る。丁
度正午。原爆被爆より三時間四十五
分後の事である。

牛田には未だ火が回っていない
が、白島全域・栄橋方向大須賀全域
と栄橋の向側の広島駅前猿猴橋周辺
が炎上中。

被害の状況を総合すれば、広島駅
より市電のコースで荒神・稻荷・八
丁堀・紙屋町・佐官町・十日市・土
橋・天満町・福島以北で火炎に包ま
れていないのは、三滝周辺・大芝周
辺と牛田である。（牛田はこの後炎
上）南東と南部は確認出来ないが被
害は市内全域に及ぶと推定できた。

建物疎開の生徒たちは元安川と本
川の間で作業しているはずであ
る。避難者に聞いた被爆の位置より
推定すると、かなり重大な被害を受
けたであろう。気に掛かってしよ
うがない。

橋下の川州は丁度干潮で川州が大
きく三百人程度の避難者がいたが全
員かなりの重傷で約半数の人は死ん
でいる様である。衣服はあまり傷ん
でいない。突如浅野の泉邸（縮景園）
で大爆発発生。破片は橋上に落下す
る。破片は大きな音を立てて落ちて
くる。ここも非常に危険だ。常盤橋の
両岸の家屋は盛んに炎上中。安全地
帯と選んでいた饒津神社境内まで後
百メートル、山陽線のガード下まで
五十メートル。炎上中の南側の大き
な旅館が道路を塞ぎ炎上している。
橋の東南側にある川に降りる石段

を通ることとし、全員火炎を潜り強行突破。川州は先程橋上から見て知っていたが近寄ると川辺で幼い子どもが「お母さん、助けてくれ」と叫び力尽きてかバタンと顔を水面に落とす。息苦しいのか、また顔を挙げて、「お母さん、助けてくれ」と繰り返しているが、幼い子どもが死力を尽くして呼べども、求める母の姿見当たらず。

爆発の破片はここにも大きな音を立てて落ちてくる。全員を常盤橋の下に誘導する。

常盤橋より川下は今猛烈な火炎で燃えているので避難の方向は自然に定まる。川上の鏡津鉄橋の下を通り川上に進む事とした。橋より川上の川州は小さく何故か多くの人が重なって死んでおり足を踏み入れる場所もない。破片は落下してくる。

手を合わせ死者に許しを請い、死体を踏み越えて進む。鏡津鉄橋の下に来れば、機関車と貨車が三台橋上で脱線転覆しており、貨車に積んであった玉ねぎが落下して山となっている。食料不足でモツタイナイ。ここを通り約三百メートル北の目積みしてない石垣で三段の人槽（やぐら）を組み、後続の生徒は靴のまま続けて私達の背中を踏んで堤防の上へ。最後に残った人槽の人も上から順に上り、人槽の一番下の土台となった人は非常に苦勞してやっと堤上に上がる事が出来た。この地は山に続く安全地帯である。

この地には火災が及んでいない。「助かった」これで案内の仕事の大半は完了した。

全員まとまって鏡津神社境内に入る。社殿は北側に向かって倒壊して

いた。火炎から逃れていた。全員境内で小休息。更に東に向い東照宮の下を通って東練兵場に入る。草原草深く背の高さ位である。草踏み分けて進む。突然視界が開ける。今まどうす暗かった視界に突然白昼の姿を見せる。向洋西端の岩山（今は姿を消している）が白昼に輝いている。これでやっと完全な安全地帯に出た事を実感させた。

生徒一同を集め「南約一キロメートルが広島駅前。今盛んに広島駅周辺が燃えている。君たちが市内に安全に入れるのは、東大橋か宇品線の鉄橋の二つの橋しか無い。大正橋は通行不能と考えなさい。比治山橋に出るか、丹那を回って御幸橋に出るか、安全な方法を選んで家に向かつて欲しい。ここで解散、元気で学校でまた会おう」で解散した。

建物疎開中の生徒は爆心地付近で被爆。その時生徒一人が防空壕内で小用中強烈な閃光が走り、壕より出て見たら先生、生徒全員が爆死していた。驚いたその生徒は今の平和公園前より、原爆被爆で炎上中の火炎を潜り南観音町の学校に「先生、生徒全員爆死。場所は瀬川倉庫の付近」この報告により幸いにも市立商業学校の先生、生徒の被爆死の地点が特定出来た。

広島西部の学校の建物疎開は白神社より西に向い、作業の進行が爆心地点に近寄る方向となり被爆時は爆心地より距離が五百メートルで原爆被爆により壊滅的損害となった。広島東部の学校の建物疎開は東に向い、作業の進行が爆心地点より遠ざかる方向となり被爆時は爆心地よりの距離が千五百メートルぐらいで

あり、西に向かった学校の生徒犠牲者約九十パーセント以上に対し、東に向かった学校の生徒の犠牲はすくなかった。

この様にして広島平和公園前の百メートル道路・平和大通りの基礎は、広島市内の中等学校生徒の一年生を主力とする血による建設作業で出来上がったのであり、私の集計では被爆による学徒の死者総数は四千五百名程度と推察している。

尚当時防火道路として南北三本の四十メートルの道路は、百メートル道路建設開始後広島近郊の中等学校の生徒が動員され建設されたのであります。

防火道路建設に当たって原爆被爆死した学徒の総数は七千名以上と記録されている。

建物疎開作業着手時、指導的立場

にありながら国の命令と言え、君たちと最後まで共に作業する事が出来ず、十二歳と十三歳の君たち約四千五百名の犠牲者を出した事を謹んでお詫び致します。

原爆被爆で大半の先生、生徒を失った為、広島は平和大通「百メートル防火道路」の建設経過を知る人は少なく、人々の記憶から完全に消え去ろうとしている。この「百メートル防火道路」は原爆被爆の破壊力が想像を絶する火炎の規模であった為火災の延焼防止には役立たなかったが、原爆の被爆即死以外で負傷した多くの人達が、この防火道路で火炎を避けここを通り、比治山に避難出来たのは周知の事実である。

原爆被爆の半径は三キロメートルに及び半径二キロメートル以内は完全に消失し、広島は完全に廃墟と化

し、終戦当時の警察発表では、犠牲者三十二万人と言われ、現在確認されている犠牲者数でも十五万人を越す大惨事となった。

広島原爆被爆より五十年が過ぎようとしている。「君たちの犠牲」により、国はその被害の大きさに驚嘆し、旬日（十日）を経ず戦争集結（ポツダム宣言受諾）となり、戦後の平和国家建設が始まり、国民は現在の繁栄する「日本」を手にする事が出来ました。

「百メートル防火道路」建設に当たっての犠牲者の「慰霊碑」は、この百メートル道路に沿って学校毎に建立され、「君たちの犠牲」を永遠に伝える様に多くの人々が努力している。

また私たちの母校広島市立商業学校と広島市立造船工業学校の原爆被

爆者「慰霊碑」は平和公園南の本川河畔に建立され、被爆の犠牲者全員の名前が刻まれている。

君たちの建設した「百メートル防火道路」は、現在広島市の「平和大通」として、防火及び人や車の通行に用いられている。

私は、君たちの偉業を後世に申し送ると共に「平和国家維持の為、全力を傾注する」決心です。

広島原子爆弾被爆五十周年を迎えるに当たって

「原爆被爆犠牲者諸君の冥福を祈る」

平成五年十月二日

建物疎開時の生存上級生

広島市立造船工業学校 三年生

著者 追記

この文章は、原爆被爆後四十九年経過して記憶で作成したものであ

りません。

昭和二十年八月六日広島市において、私は世界最初の原子爆弾に被爆。被爆当日の言語に絶す悲劇を目撃。私の生涯における最大の悲劇と考え、悲惨な悲劇の実態を後世に伝えるべく出来る限り正確に記録しており、それを整理したものです。

この文章は百メートル道路建設に関する学徒の功績を記したものです。文中の名称は全て実名です。

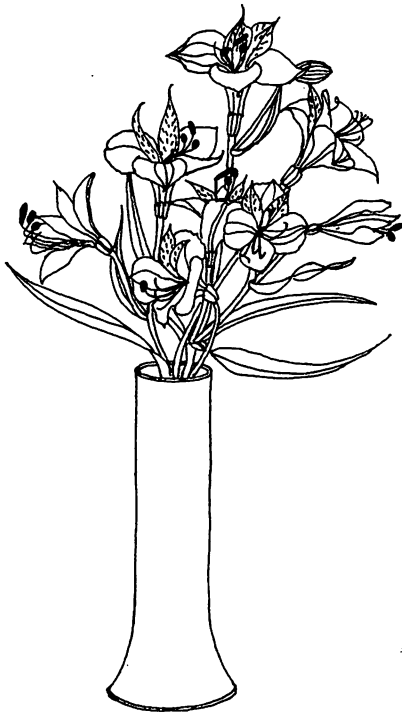
敵の動き、作戦名称等は戦後発表されたものを一部使用しています。被爆より終戦まで数度広島市に行く。終戦後九月半ばまでに数度。

翌年八月一ヵ月広島に滞在。広島市内の原爆被爆の内容調査を行った。

この調査途中、中島の最北部、相

生橋T字袂で第一回原爆慰霊祭が行われておりこれに参列。電柱のような質素な木製の慰霊碑（碑は石作り？）でした。

原爆被爆を目撃した十五の少年の手記にしては纏（まと）まり過ぎて
いるが、実際の出来事である。



兵 役

山 野 米 蔵

戦前は成人式なんて無かった。それに代わる徴兵制度があり、男子たるものは必ず受験して合格の可否を決めたものだ。そして甲種、乙種は、皆兵役についた。

私は、視力弱く丙種であったが、昭和二十年三月に召集され、和歌山中部第二十四部隊に入隊。五月に新部隊編成となり、二回目選ばれ、橘隊に入り、千葉、茨城両県の各地を転々とした。後で聞いた話だが、一回目、三回目選ばれた人は、外地に回され、その途中で撃沈されたとのこと。

ある日、伝令で用務についた時、

池のそばあたりで機銃掃射の音が聞こえてきた。神経を使いながら歩いていた。ふと池の近くまで来るとB29が下降しながらバンバンと湖水目掛けて掃射している。瞬間、思わず伏せて様子を見た。小さな舟に乗っている若夫婦目掛けての発射だ。B29が飛び去り、池のふちまで来ると、夫は鮮血にまみれて顔面血だらけ、妻は幸いケガが少なかったのか「兵隊さん、助けて下さい」と哀願されるも、私とて公用中の身、何ともならず、あの声に後ろ髪を引かれながら任地へ向かった。あの主人は助かっただろうか、気にはなるがどうに

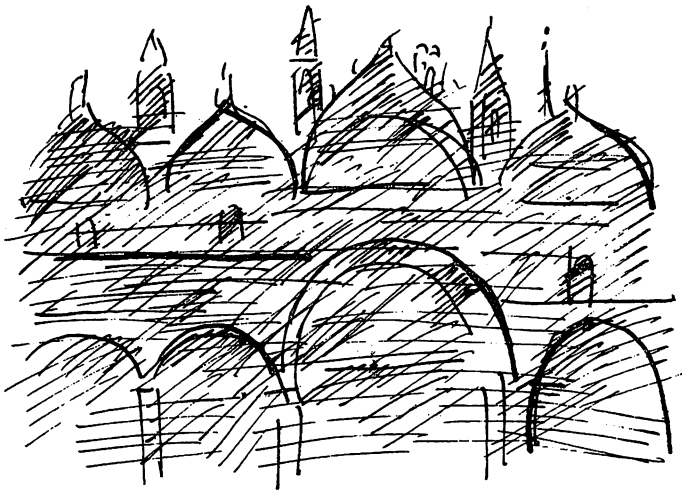
もならない。

戦争は、兵隊同士の生死をかけるだけではない。銃後の日本を守っていて下さる人々にも危害を加える。戦争には情けなどかけらも無い。人を見たら殺す。また、そのように自分たちも訓練されてきた。しかも日本は必ず最後に勝利を勝ち取るんだと肝に銘じられていた。

勝負の世界は勝たねば意味がない。しかし、戦争は人殺しだ。絶対にするものではない。今日こうして平和に過ごせるのも、幾多の同胞の犠牲によるところが大きい。

日本の建物を破壊するなら焼夷(しょうい)弾で十分あることを、アメリカはしっかり調べていた。広島、長崎の原爆で、まだ日本が降伏しなければ、九十九里浜から上陸していたとの情報も入っていた。もし、

そうであれば私の駐在していた千葉県では、どうなっていたか。思い出してみても背筋が寒くなる思いだ。
平和な日本で、成人式を迎えられる人は幸福である。これからの日本を守るために大いに頑張ってもらいたい。



墓番号第一〇九号

矢部忠雄

終戦後シベリアに抑留された日本軍人は約六十万、内死亡した者約五万五千名と発表されている。その中に、墓番号第一〇九号、埋葬者氏名、下山 堅（岡山）の名簿がある。

私はこの名簿を見たとき、四十九年前の昭和二十一年一月十日頃、下山氏の遺体を担架に乗せて三名の兵士と共に埋葬に行った日のことが思い出される。

場所は現在のウズベキスタン共和国アングレンである。アングレンは首都タシケントの東百二十キロ程のパミール高原の山裾にある標高千五百メートルの荒野であった。戦後ソ

連軍に捕虜としてアングレンに抑留された日本兵約六千名は、昭和二十五年迄の五年間を苛酷な条件の中で石炭の露天掘り、鉄道、道路、運河、建築などの重労働を強いられ多くの死亡者が出た。アングレンに到着してから三ヵ月後、昭和二十一年の正月を迎えて間もなくのことであった。六時起床になっても下山は起きてこない。隣りの兵士が起こしたが疲れ果てて寝ているのか反応がなかった。驚いた兵が分隊長に伝えて調べたところ既に息を引き取っていた。戸田小隊長は近藤梯団長に報告したあと下山を幕舎に残して作業出

発のため広場に集合した。雪が降り積もる中を先頭から作業場へ出発して行った。私達の第二中隊第三小队は続いて正門を出た時、ソ連兵が不意に「止まれ」と合図して「四名を残せ」と言った。小隊の一番後列に居た私と三名は残り、小隊は作業場へ進んで行った。下山氏の遺体はソ連軍医の検死が済んだあと私達四名が担架に乗せて裏山の埋葬地へ運んだ。埋葬地は五センチ程の雪が降り積って、先に埋葬された多くの墓は雪に埋れていた。私達はスコップで穴を掘り遺体を毛布に包んで安置し、遺品を並べて土盛りした上に墓標がわりの石を置いた。雪に埋れた墓地に埋葬したばかりの赤土の土盛りには雪は降り積った。私達は下山氏の墓標に別れの敬礼をして丘を降りた。

思えば満洲国境にソ連軍が侵攻してきた昭和二十年八月七日、新京防衛軍は市街北方寛城子に展開してソ連軍と決戦の時を待機していた。十四日朝、友軍砲兵陣地の角型眼鏡はソ連戦車部隊をとらえたと情報が入った。

決戦の時刻は十四日夕刻から十五日朝にかけての戦闘が想定された。この時、防衛軍司令官より「全軍特攻となり悠久の大義に生きんとす。軍は富嶽特別攻撃隊と呼称する」と命令が全部隊に伝達された。

ソ連軍戦車部隊は新京攻略を目指して蒙古草原を東へ進み新京を目前にして体勢を整え、一気に攻撃してくるものと予測された。

両軍決戦の時は刻々と迫っていた。十五日朝、敵戦車部隊は第一線陣地の前に姿を見せなかった。

新京防衛軍一万の将兵が、特別攻撃隊となって敵戦車軍団に突入し玉砕を敢行せんとした昭和二十年八月十五日は終戦となった。

終戦後、部隊は新京編成第四梯団となりソ連に渡った。二十年九月二十三日仲秋満月の夜、ウスリー河を渡ってブラゴエに上陸、シベリ鉄道を西に進んでバイカル湖を通過イルクーツク・ノボシベリスク・更に南下してアルマアタ・タシケントを経て終着駅アングレンに到着した。その夜パミール高原の山に満月がかかっていたことからウスリー河を渡ってから三十日間の貨車輸送であった。

この間、食糧の支給は無く長途の疲れから多くの病人が出ていた。下山氏は開拓団として満洲に渡り召集されて始めて兵隊となった者で三五

歳位であった。戦乱の満洲に残した家族に想いを馳せ痛恨の涙を飲んで異国の山奥に永眠したのである。

日本帰還の夢も空しくアングレンの荒野に露と消えた多くの兵士達は戦後四十九年の星霜を経た今もパミール高原アングレンの山奥に、訪づれる者もなく眠っている。

パミールにかかる月は今夜も日本兵墓地を照らしているであろう。

平成六年七月八日記す

お父さんがこんなになつた!!

山本弘子

空襲当夜、父は防空班長をしておりました。

「高知からB29の大編隊が来ているようやから、高松も危ないと思う。無駄になつてもいいからお母さんと一緒に安全な所に行きなさい」「いやや明日学校に遅れるし、また空襲警報解除になったら、疲れるだけやもん」「とにかく今夜は危ない予感がするから、屋島の方に行った方がいい」と問答を繰返した後、母と妹、弟二人と乳母車で、着替え一枚持たず、散歩の気持ちで出掛けたのです。

高松市と屋島の途中でザーッと言

う音に振返ると、栗林公園の辺りが火の海でした。

夢中で走り出し近くの農業用水路に飛び込みました。

私達は防空頭巾と言って綿入りの帽子をかぶっておりましたが、私は何度も何度も水をかけるのですが、熱気の為にそれがすぐにカラカラになるのです。

朝まで水に浸っておりまして。喉が乾くとその泥水を飲んで乾きを癒すのです。

その内、火の粉が水の中にどんどん落ちてくるのです。母達と一緒に隣りの奥さんも一緒に逃げて来たの

ですが、生後一年に満たない子どもを抱いて一緒に用水路に飛び込んだ隣りの奥さんは段々熱くなつていく水に、恐怖から母に「奥さんもう私達死ぬのやから、この子を殺します」とその子を水に押し込もうとしました。母は「何を言うてんの、出来るだけ生き延びる事を考えんと」と隣

の子どもも母が抱き、当時三歳だった弟を私が抱き、片腕で皆んなの頭巾の上から水をかけ続けました。

ようやく空が白く見えかける頃、焼夷弾、爆弾の攻撃がやんだよう、私達は用水路から這い上がり、のろのろと歩き出しました。

周囲の家から焼ける火の粉と焦げた匂いの熱気の道を素足で、水と泥まみれの服で屋島まで歩いたので、途中焼夷弾が牛の横腹に突っ立っているが、生きています。

昭和二十年七月四日、四キロの道程を母子は乳母車を押し、よろけるように歩いて屋島に辿り着いたのです。母の姉の所に行ったのです。

「お父さん来てますか？」

「いいやまだ着いてないよ」

母は父の安否を気遣い、三歳の弟を置いて未だ燃えさかっている高松へ再び四キロの道を引き返したのです。

玄米飯の炊きだし飯を食べて、ゆっくりとする間もなく、夜には、また空襲に会うので叔母共々、川の堤防で野宿です。蚊と暑さで寝ることも出来ず、父母の事が心配で妹弟達が泣くのをなだめつつ待ち続けました。

夜半に母が帰ってきました、一人だけで帰って来ました。私達の顔を見るなり「お父さんがこんなになっ

たよ」と小さな包みを手渡すのです。

半紙に包んだ骨をガーゼにくるんでいるのです。「お父さんがこんなに小さくなった。こんなに小さくなった」

半紙の中で骨がカサカサと小さな音をたてました。

私は父の死顔を見ていません。ただ小さな包紙で父の死を知らされたのです。

小さくなった、あの包みの感触は今でも忘れる事が出来ません。

母の話では、高松の中心にあるロータリーの貯水槽の中で死んでいたそうです。焼夷弾の直撃をうけて。

未だ焼けくすぶっている火の中で父を捜し求めて、未だ焼けくすぶっている火の中で真っ黒に焼けただけ死体を見つけてロータリーに着いたそうです。

父の死んでいた場所は一番死者が多く、トラックに収容して火葬場に移送したそうですが、母はその死体の中に一緒に入って、父と共に火葬場に行ったそうです。火葬場では、あまりに多い死体の為、一体づつ焼却出来ず、一カ所にまとめて重油をかけて焼いたそうです。母はお金を包んで、焼けたトタン板の上で、父一人を焼いてもらったと言っていました。

一夜で家を焼かれ、父をなくし、四人の子どもを抱えた母の、その後の苦しみは大変でした。食糧もなく、疎開していたわずかな衣類が次々とお米と物々交換で消えていきました。

今日八月十五日、正午に戦没慰霊者に黙祷。罹災当時の、あの暑さの中での悲惨な姿を思い起こします。

今思い起こせば全く悪夢の様な出来事であった、あの一夜の出来事を。

人間が人間として尊厳ある死を得ることが出来なかったあの時を。

今日もあの時の蝉の聲がしてま
す。

戦争は絶対に二度とあってはいけ
ませんね！



核廃絶を訴える

與賀田 英 男

隣で妹たちが「落下傘だ、落下傘だ」と騒いでいました。私も見上げたものの、何も見えません。間もなく、ピカッと閃光（せんこう）が走り、何事かと思う暇もなく、物すごい音響とともに、その場へ押し倒されるように伏せました。

挟まれていました。隣の人と協力して妹たちを助け出し、防空壕に送り込みました。

それから近所を見回ると、おばさんたちが押入れに頭を突っ込んで腰を抜かしていたり、昼食の準備で七輪に鍋（なべ）をかけたまま逃げ出していました。

それから近所を見回ると、おばさんたちが押入れに頭を突っ込んで腰を抜かしていたり、昼食の準備で七輪に鍋（なべ）をかけたまま逃げ出していました。

頭を上げると、まわりに瓦が散乱しており、びっくりして家に駆け込むと、母が一番下の妹と甥（おい）を両脇に抱えて、ぼうぜんと立ちすくんでいました。すぐに防空壕へ連れて行くと、隣で妹たちが何か叫んでいるのが聞こえました。

先年、父が亡くなり、その時の人たちがお悔みにきてくれ、当時をしのび、思い出話に生きている喜びを分かち合いました。

急いで引き返すと、妹たちは壁に

夜になり、お隣のおじさんが、背

中一面に火傷を負い、ところどころにシャツの破片がこびりついた悲惨な姿で、やっと帰り着きました。そのまま、寝込んでしまいました。

おばさんの必死の看病のかいもなく、一度も元気にならず、数年後に亡くなられたそうです。

父が帰宅し家族がそろってから、自宅の周囲を板片で打ちつけ、とりあえず父の田舎へ帰ることにしました。父を先頭に家族八人がはぐれないうよう一本の帯を握りしめ、稲佐橋を渡り、不安と怖さで押し黙ったまま歩きました。

途中、行き交う人々は、走るように急いでいる人、けがや火傷で洋服がボロボロになったまま、今にも倒れそうに歩いていましたが、私は声をかけることも出来ませんでした。

浦上の方向を見ると、あちこちで

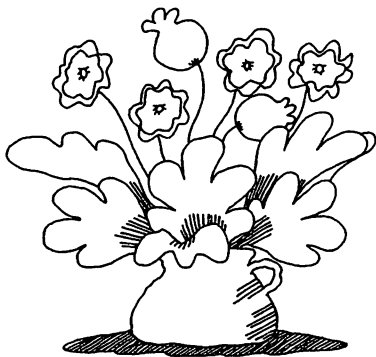
火の手が上がり、何でこうなったのか、この先どうなるのか、不安と疲労で足も思うように進みませんでした。

戸町までたどり着くと、佐藤さんという父の知り合いが「このまま直行するのは無理だ」と、防空壕に泊めてもらいました。元氣を取り戻した私たちは、翌朝早く出発し、無事目的地に着くことが出来ました。

翌日から私と、すぐ下の妹は夜明けとともに起き、おにぎりと水筒を肩にかけ、片道四里（約十六キロメートル）余りの道を毎日歩いて通いました。自宅から所帯道具や着替えなどを持てるだけ運んで、帰り着くのは日暮れになってからでした。父と母は、食糧の買い出しに走り回る生活でした。

あれから四十七年、本当に我が国

は平和で豊かになりました。一方、世界に目を向けると貧困や争いが絶えることなく続いています。全世界が豊かで、平和になるよう祈るとともに、皆さんとご一緒に核廃絶を訴え続けて行きたいと思えます。



乳飲み子を抱いて

吉田 トモヨ

原爆が落ちた時、私は愛媛県西条市大町福武甲1642-2番地の、夫吉田虎夫の父母の家で、一歳の長男を抱え農業を手伝いながら夫の帰りを楽しみにしていました。八月六日、広島に新型爆弾が落ち、広島は全滅とかの噂を聞きビツクリしました。夫の虎夫は広島兵器補給廠に勤務（四国善通寺に入隊後に広島へ転勤）。広島市が、全滅状態の噂。報道もあるが、夫からは何日待っても何の連絡も無く、亡くなってしまったと、乳飲み子を抱いて毎日毎日を嘆きおりました。日本がとうとう負けた。私の実家、下朝倉の近くの、み

あがさき“で男の老人に夫の安否を拜んでもらいますと、死んでしまったと思っていました。占い師は大きな怪我（けが）はしているが、生きています。一度妻のトモヨと息子の勝太郎に会いたいと言っている、と言われました。何事も人に頼りがりの乳飲み子を抱える私では、どうも出来ないので親族相談の結果、実姉、岡田トラヨが連れて行ってやると言ってくれることになり、三人で広島を夫を捜しに行くことになりました。戦争に負けた日の次の日でしたので、多分敗戦の日に拜んでもらったのだと思います（わらをもつ

かむ思いからでした）。今治港から船に乗り尾道港へ、港にへばり付いている様な尾道駅で随分待つてから、やつとこさ超満員の汽車で広島に入りました。

着いた広島市は見渡す限り、一面の焼け野原で、何処が何処かさっぱり分かりません（私は娘時代、家事見習いで広島市の牛田で、中隊長さんの家にいた事があり、大隊長で転勤となり神戸に移ってから、しばらくして嫁に行きましたので、休みに八丁堀とか、紙屋町付近は少しは知っていました）。姉が兵器補給廠の場所を聞き尋ねました。姉に頼りきりどのようにして行ったか定かではありません。

私が行ったのは敗戦の三日目で駅付近はかなり整理され、死体等は見ませんでしたが異様な人が多くて、

独特の臭気で吐き気を覚えた。大きな門を入り尋ねましたら、建物から中隊長（上官）が出て来て挨拶したら“お気の毒でした”と言われて、やっぱり死んだのだと思いました。次に“かなりの怪我をして、青ざめているが生きています”とのことでホッといたしました。しばらくして夫と会えました。夫に連れられて板の間の部屋に案内された兵舎の一室に座り込み無事を確かめ合い、私は腹の調子が悪く下痢をして食事も出来ない状態でしたが、夫から原爆が落ちるのを見ていて、被爆したとか、爆風で一時失神したとか状況を聞きました。飛行機の飛んでいるのを見ていて、ピカッと光ったのや、手、手首、腕、背中にガラスの破片が突き刺さったとか、色々語り合い、袖をまくり手首が腫れ上がっている

のを見せてくれました。夫は泊まっていた様になりますが、どうしたか定かでないが、帰りも、夫を残して、広島、尾道、今治と同じ経路で帰り、夫の父母、私の父母に夫虎夫の無事を報告して、疲れと安心感で数日寝込んだ様に思います。

夫は二、三ヶ月して帰って来ました。私の記憶では蜜柑が色付き始めた頃で、夫が蜜柑を割っているのを見て、まだ青いのにと言った記憶がありますので、九月の下旬か十月の初めの除隊と思います。

吉田虎夫の原爆手帳は区分1号被爆場所霞町2・7キロ二十一歳番号0155697で私トモヨのは区分2号入市、比治山町 二十一歳番号0155689となっています。

私と一緒に入市した実姉岡田トラヨは申請当時は、既に四国にいな

ったので、一緒に申請せずじまいでガンで四十二歳で死亡しています。この様に被爆者でありながら、生活の忙しさと、放射能の恐ろしさを隠しての政策のためか、被爆者としての扱いのない人達が沢山おられる様です。私は夫に教えられて、西条保健所で手続きしましたが、姉は、もうその時は西条にいませんでしたので、手続きをしようとした時には、ガンで亡くなっていました。悲しいことです。もっと早く制度が出来たらと歯がゆく悲しいです。

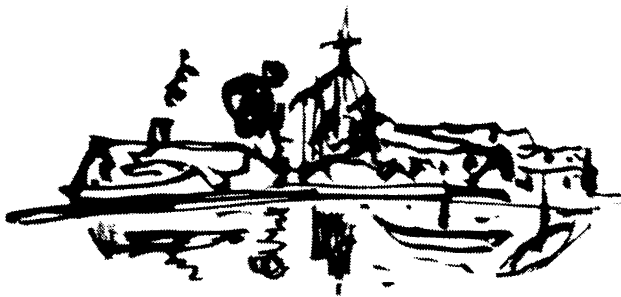
私と子どもは、幸いにしてどうか元気でしたが、夫の虎夫は勤めを何度も病気の為に代わりながらも、私達を守り、育ててくれましたが、ガンで亡くなりました。数年前からやっとなんか検診が、被爆者の検診に取り入れられましたが、春秋の検診

には必ず受けていた夫を見ると、もう少し早くガン検診の制度が出来ていたら、初期発見で助かったかもしれないと、悔やまれてなりません。ガンになってからも香里病院に検診に行った人です。

しかし、夫が広島から帰ってから、貧しいながらも、西条時代、新居浜時代、それから大阪に出て来て、守口市、寝屋川市でささやかながらも、親子同じ屋根の下で楽しい日々も過ごせました。あの乳飲み子を抱え、夫の安否を、これからどうしたら良いのかさえ、考える事も出来ない程の嘆きの日々から考えると、戦争の無いこの五十年近くたちましたが、戦争の無い平和が、本当の平和だと実感しています。これからの人達は私達のような、悲しい人生を受けないうように、戦争などしないよう願います。

します。戦争をしたから、原爆が落ちたのだと思います。戦争は人間だけでなく、人間の心までなくさせるのですから。夫の虎夫は大切に保管するのだよと、私が頼りないので自分の体験記と私と子どもの事も書き残していてくれたのですが、大切に大切にと思って、逆に何処にしまったのか、分かりませんので、十分に伝える事が出来ませんでした……

一九九三年三月十日



本当の平和

磯貝麻美

ゴーンゴーンという鐘の音がテレビの中から聞こえてくる。私は半分眠ったまま、黙禱をする……。これが今年の八月六日、八時十五分だ。

母の故郷が広島であるということもあって私の家では、八月六日原爆記念日の黙禱を、わりと熱心にする方だと思う。でも、私自身は年々いっかげになつてきている。

平和を願っていないわけではない。ただ、平和の尊さ、ありがたさがだんだん分からなくなつてきている。

戦争を実際に体験した語り部の人達も、いつかはみんな亡くなつて誰

もいなくなつてしまふだろう。そう
なつた時、みんなが戦争のことを忘れてしまひはしないだろうか。

私は六年生と中学三年生の修学旅行での語り部さん、そして私のおばあちゃん。という三人の被爆体験を聞いてきた。話は三人ともちがうけれど、どこかに共通点がある。戦争への憎しみ、平和への願いをどうにかして私達に伝えようとしている想い、そして話している時の目が同じだと感じた。悲しみ、憎しみ、つらい気持ち、そして喜び、希望など人間の感情が全て込められているようなそんな目だ。話したいはずがない

けど、話してくれたその想いに私は、応えなければならぬ。私だけが応えてもしかたがない。みんなが応えなければ意味がないのだ。戦争をして死にたくてしようがないなんていう人は、世界中を探しても、きっといないだろう。口で何を言つたつて、死ぬのが怖くない人なんていないんだ。死ぬのがいやだから核爆弾を造り実験する。そして、それを見た人はまた怖くなつて死ぬのがいやだから同じことをする。自分を死なせないためにしていることが、自分を殺そうとしていることに、なぜ分らないのだろう。どうして自分は偉いと思えるのだろう。何もせず他の人に喧嘩をしてもらつて弱虫のどこがえらいというのだろう。

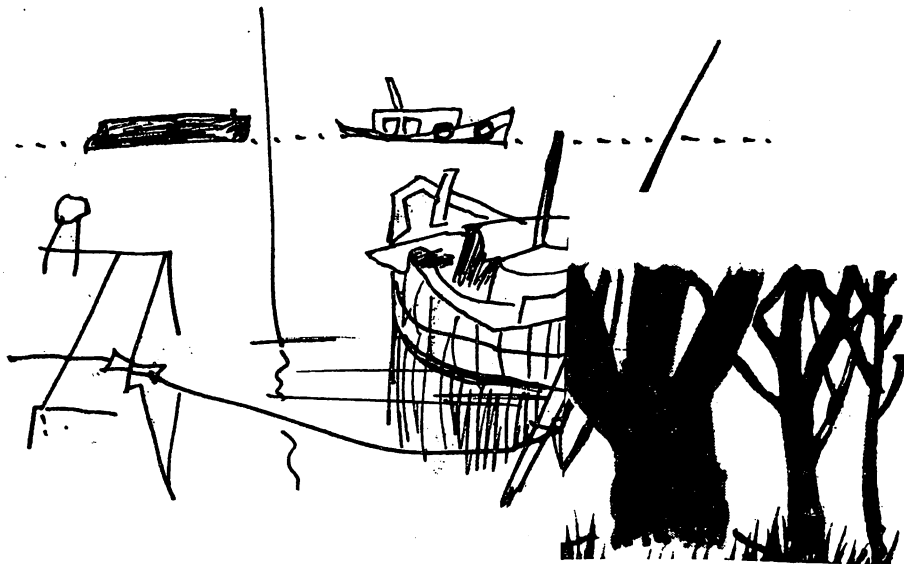
命の重さに差なんて無いのだ。誰が偉い、誰の命は重いなんて一体誰

が決めるというのか。自分は人とは違うと、そんなに思いたいのかな。それがそんなに大切なことなんだろうか。もっと大切なことがあるはずなのに。

みんな同じ人間なんだ。戦わなかったら、友達になれた人だって大勢いると思う。人間の性格は一人一人違うから、気の合う人もいれば合わない人もいる。だから楽しいのだ。何もかも自分に合わせようとせず、人のことも考えれば、戦争をしようなんて全く思わなくなるの

に。
「平和であることを当たり前に思っ
てはいけない」という言葉を、急
に思い出した。今まで犠牲になっ
てきた人達のためにも自分のためにも
人のためにも今の暮らしを大事にし
たい。

いつか世界中の人が安心して暮ら
せるようになった時に、平和だと
言えるんだと思う。



戦争と平和

柴田 紗予子

平和と言うと、戦争の事が思い浮かんでくる。それくらい平和と戦争はつながりがある。戦争なくしては平和は語れない。

私は、小・中学校の修学旅行で、広島・長崎へ行った。あの時、資料館で見た写真は、一生忘れないと思う。黒こげでボロボロになって抱き合って死んでいた親子だった。なんであんなになってしまったのか。原爆の威力の想像がつかなかった。なんでこんな目に会わなくちゃいけないのか。あの子の親はあの子が育っていくのを楽しみにしていただろう。あの子は、まだ何もよくわからない

まま、死んでいったんだろう。私は、あの写真を見て自分達が戦争にあっていたら、という事を考えていた。何も失うのはいやだと思った。家族も親せきも友達も先生も学校も。何もかも失いたくないと思った。そして今、私は平和の中に生きて、幸せなんだ、とも思った。

私達が大切な全てを失う事のない、平和な世界を守っていくには、どうしたらいいのだろう。それは、私のような戦争に会っていない若い世代の人達が、戦争を人事だと思わずにいる事。自分と戦争と平和のつながりを見つける事。こういう事が

必要なんじゃないかと思う。後、私達の次の世代に、私達が今まで学んできた、戦争と平和や、これからも学んでゆく戦争と平和を、ちゃんと伝えるべきだ。

五十年後は、科学や医学や何もかもが、今よりも進んでいるだろう。その進んだ科学や医学を戦争に使わないで欲しい。今から五十年前の人々がそうしたように、あんな悲惨な事をおこす為だけの科学や医学じゃなく、戦争をおこさない、おこす必要のない世界を作っていく為に、より進んだ科学や医学を使って欲しい。

最後に、戦争をなくし平和を守る為には科学などの最先端の技術も必要だ。けど、やはり人間に一番必要なのは心だと思う。私達は、数々の戦争体験の中から心を学び、またそ

れを次の世代へ伝えていかななくては
いけない。これは、最先端の技術を
駆使してもできない。人間の心から
心へしか伝えられないものなのだ。



戦後五十年を迎えて

宮沢良子

今年で戦後五十年を迎えた日本。テレビでもあちこちの番組でその事を大きく放送していた。偶然に見た番組で、アメリカの人が広島・長崎の原爆投下についてこう答えていた。「アメリカは日本を許したのに、日本は戦後五十年たった今でもその事を許せないというのはおかしい」

この言葉の意味が正しいのかどうかは、今の私には分からない。私が思うことは勝ち負けが決まった時が「終戦」ではなくお互いを許し合えた時が本当の終戦ということだ。日本とアメリカは残念ながらもまだそれができていない。私達も小学校の低

学年から、戦争の恐ろしさや悲惨さをずっと習ってきてある程度の知識は持っている。しかし、実際に被爆した人たちの苦しみや無念さは半分も分かっていないだろう。耳で聞いたそれだけで、「ああ、そうか」と同情するだけだ。そんな悲しみを分け合う様な事よりこれからの世界が平和である事の方が大切だと私は考えている。人が生きていく中で争いは必要な事なのかもしれない。だからといって命を奪うまで争わなくてはならないとはなんと情けない事だろうか。実際に被爆した人が書いた本を読んでいて、とても心に残る一文を見つけた。

「私は原爆をうらんでいません」

普通なら恨んでもやりきれない悔しい気持ちになるだろう。しかし、この一文は違う。その底深くに攻撃的で、しかもこの上なく寂しい気持ちを秘めている。死んだ人は帰ってはこないのだからという諦めの中の表れた文では決してないのだ。物事に悲観的になるのではなく、これからどうすれば良いのかそういう事を考えさせられた。何より大切なことは、過去から目をそらさず直視し、それをちゃんと伝えていくことだ。今年に入ってすぐに、家族の中で唯一戦争を体験し、知っていた祖父がなくなってしまう。こんなに戦争の事について考える機会があるならばもっとその事について話してもらっておけば良かったと今にな

って後悔している。過去をもっとも
っと知り、そして許し合える、それ
がこれからの世界の平和につながる
だろう。私が戦後五十年にして考え
たことは、目をそむけたくなる様な
事にならなかつてもそれを直視し、戦
つていける、そんな自分でありたい
ということだ。戦争で犠牲になった
人達のためにも、もちろん自分のた
めにもまたこれから生まれてくるす
べてのためにもこの世界が平和であ
ってほしいと願っている。



あとがき

出版にあたり、寄稿いただいた方の意図を尊重する意味で、原則として、修正は現代仮名遣いへの変換等最小にとどめております。従いまして、文章表現や言葉遣いに多少難解な部分があったり、また、現在では社会的に適切でない用語の使われている箇所が出てきたりします。例えば、「満州」は、現在では「中国東北地方（地区）の黒竜江省、吉林省、遼寧省を中心とする地域」などであります。当時の日本や諸外国の様子が分かりやすいようにと、国名や地名などをあえて言い替えておりません。実体験者の生きた言葉として御理解いただき、その底に流れる平和への熱い思いをおくみ取り御斟酌ください。

なお募集に際しては、数年をかけて行いましたので、年代のズレがありますことをお詫びいたしますとともに、寄稿をいただいた皆様方に、厚くお礼申し上げます。

平成八年（一九九六年）三月

寝屋川市 自治推進部 人権啓発課